

発刊にあたって

本学は今年度より公立大学法人として新たな一步を踏み出しました。本研究所も「沖縄県立芸術大学芸術文化研究所」と名称変更し、これまでのように沖縄の芸術文化の研究・発展に寄与する研究機関として大学内外に活動を広げていくことを推進してまいります。

さて、本研究所では、平成28年度から2年間にわたってハワイにおけるハワイ語導入事例や、各国の先住民語導入教育をモデルとしながら、本学琉球芸能専攻と共同して本事業の前身となる「しまくとうばプロジェクト」を進め、平成30年度から「沖縄県立芸術大学しまくとうば実践教育プログラム開発事業」を展開してきました。本年で6年目を数えるこの事業は、琉球芸能の「わざ」を「しまくとうば」を用いて教育するための実践授業とそれに関わる教材研究を主としています。

今年度も前年度に引き続き、年度初めから新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大状況に事業内容が影響を受けました。今年度事業は本学の定める「新型コロナウイルス感染拡大防止のための授業実施に関するガイドライン」に沿って遠隔講義や講座、対面講義を実施しました。したがってこれまでの年度における事業と実施方法や実施回数を変更せざるを得ませんでした。このような「ウィズコロナ」における新たな取り組みは、新教材の開発、講演会事業の一般公開方法など、これまでの活動の中で事業成果や研究成果の「アーカイブ」という視点から新たな事業成果も見えてまいりました。このような新たな取り組みは、次のスタンダードとなって継続されていくことと思います。

本事業は沖縄県立芸術大学の特色ある事業として位置づけられております。今後も琉球芸能専攻をはじめとして、しまくとうばに関係の深い講義・科目と連動し、発展していくことを目標とします。また、沖縄県のしまくとうば普及センターなど他機関と連動し、沖縄を取り巻く「しまくとうば」普及活動へ寄与できるよう、今後も活動を継続して参ります。

2022年3月

沖縄県立芸術大学 芸術文化研究所長

久万田 晋

令和3年度 しまくとぅば実践教育プログラム開発事業 事業報告書 目次

芸術文化研究所長挨拶

目次

しまくとぅば実践教育プログラム開発事業 報告書

1	はじめに	1
2	実施概要	2
3	実践教育プログラムについて	5
3-1	舞踊実技(比嘉いずみ)	5
3-2	舞踊創作演習(比嘉いずみ)	9
3-3	舞踊実技(高嶺久枝)	11
3-4	組踊実技(阿嘉修)	17
3-5	地謡実技(新垣俊道)	21
3-6	学生による授業評価アンケート	
3-6-1	学生アンケート結果(R3・前期)	29
3-6-2	学生アンケート結果(R3・後期)	31
3-7	しまくとぅば関連授業の取り組み	
3-7-1	「琉球語」(仲原穰)	33
3-7-2	「詞章研究」(鈴木耕太)	36
3-8	実践教育プログラム教材について	38
3-8-1	「琉球舞踊実技」(比嘉いずみ)	38
3-8-2	「組踊実技」(阿嘉修)	39
4	首里系組踊勉強会	
4-1	勉強会概要	40
4-2	勉強会内容	41
5	「誇らしゃ しまくとぅば」講演会概要	42
5-1	第9回「喜劇の女王が見たウチナー」概要	43
5-2	第10回「しまくとぅばと琉球舞踊」概要	44
6	第7回・第8回「誇らしゃ しまくとぅば」講演会講演録	
6-1	第7回講話テープ起こし	46
6-2	第7回講演会アンケート集計結果	69
6-3	第8回講話テープ起こし	70
6-4	第8回講演会アンケート集計結果	92
7	次年度への展望	93
8	資料りゅうPON連載記事・ていーち! Teach!! しまくとぅば	94
9	令和3年度しまくとぅば実践教育 授業録画日一覧	95

しまくとぅば実践教育プログラム開発事業報告書

1 はじめに

今年度も昨年度同様、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大によって、年度のはじめから本事業の内容を変更しながら行わなければならなかった。年度開始直後の4月12日から「まん延防止等重点措置」となり、その後も解除されることなく5月23日から9月30日までの4ヶ月以上「緊急事態宣言」が発布された。そのため沖縄における教育活動も制限を受けざるを得なかったことは言うまでもない。しかしながら、昨年培った遠隔講義や感染防止対策のおかげで、しまくとぅば実践教育プログラム開発事業研究会（以下、研究会）では、教育活動を止めることなく昨年に比べ、ややスムーズに事業を行えた年度であった。

今年度の沖縄県立芸術大学では前・後期の講義について、座学系講義は基本オンラインで行い、実技系講義は感染拡大状況を鑑みながら対面講義を行うという流れであった。本学における感染防止対策に則って、琉球芸能専攻において行ってきた特別講師を招いての対面講義は、2週に1度開催するということが基本の方針となった。また、座学系講義は対面講義を行う場合、各学部へ事前申請した後、開催することが可能となった。

本年度の「しまくとぅば事業」関連講義では新たな講義として「舞踊創作演習」に中曽根律子先生、久米ひさ子先生を特別講義として、歌劇「中城情話」の一場面をご指導いただいた。講義内容については「3. 実践教育プログラムについて」を参照していただきたい。

そして今年度も昨年に引き続き、「誇らしやしまくとぅば講演会」は感染拡大防止の観点から、本学演奏堂で観客を収容しての開催は実施せず、録画をして、すべて動画配信サイト（YouTube）を用いたネット配信を行った。本事業についての詳細は「5. 『誇らしや しまくとぅば』講演会」を参照いただきたい。

今年度は昨年から製作している動画による教材を琉球舞踊で追加製作した。また、本講義は次年度から一般公開し、学生たちが学外にいてもアクセスし、「しまくとぅば」の講義を予習・復習できるようにする予定である。

さらに、本年度は昨年9月から知念績有氏を招いて行った「首里系組踊勉強会」の成果発表を11月に行った。この発表会の映像は本研究所のホームページにおいて公開している。取り組みについての詳細は「4. 首里系組踊勉強会」を参照いただきたい。

今年度からの新たな取り組みは、琉球新報社の子ども向け新聞「りゅうPON!」へ10月から毎月1回、「ていーち! Teach!! しまくとぅば」と題して身近にあるしまくとぅばや本事業に関わる内容を分かりやすく紹介した。連載記事は本書8章（P94）を参照していただきたい。

コロナ禍ということもあり、対外的なワークショップや調査研究を行うことが難しい状況であるが、身近にある内容を見つめ直し、事業へと取り入れていった年度となった。今年から「沖縄県しまくとぅば普及センター」との連携を視野に入れ、「琉球語」や「詞章研究」などの座学系講義の取り組みも行った。今年度の成果は、これまでのしまくとぅば実践教育を見つめ直したことで基本的な問題に対しても微力ながら結果を出すことができたと感じる。

上記の事業を行った今年度の研究会のメンバーは以下の通りである。

鈴木 耕太（附属研究所：事業代表者）

高良 則子（全学教育センター）

麻生 伸一（全学教育センター）

高嶺 久枝（音楽学部琉球芸能専攻）

比嘉いずみ（音楽学部琉球芸能専攻）

阿嘉 修（音楽学部琉球芸能専攻）

新垣 俊道（音楽学部琉球芸能専攻）

西岡 敏（沖縄国際大学教授、沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）

仲原 穰（県立芸大非常勤講師、沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）

波照間永吉（沖縄県立芸術大学名誉教授）

令和3年度は昨年同様、研究会は基本的にリモート開催とした。研究会は奇数月に2回、偶数月に1回の合計18回開催した。

令和3年度の「沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」の事業計画は以下の通りであった。

1. しまくとぅば実践教育プログラム開発研究会（奇数月2回、偶数月1回開催）。[担当：全員]
2. 前期4科目、後期4科目の実践教育。[授業実施担当：高嶺・比嘉・阿嘉・新垣]
3. 「琉球語Ⅰ」へゲストスピーカーを招き、「実践教育プログラム」との連携を図る。[担当：仲原]（後期開催）
4. しまくとぅば講演会（第9回：11月・第10回：3月。オンデマンド配信）。[担当：全員]
5. 実践教育におけるしまくとぅばキーワードの蒐集（データの集積および編集）
6. 首里系組踊勉強会開催（令和3年4月～11月。成果発表11月）。[担当：比嘉・鈴木]
7. 「琉球舞踊実技」における副教材の研究開発（継続）。
8. 『琉球芸能用語事典（仮）』の編集。

本事業は沖縄県立芸術大学琉球芸能専攻という教育現場に「しまくとぅば」を導入し、教育実践することで、琉球芸能を教授するときにおいて、「しまくとぅば」でしか表現出来ない独特の「わざ」や表現を学習させ、学生の表現力や作品理解力などを総合的に高めようというねらいから行われた事業である。本年度の事業成果については、各章に詳細を掲載した。次年度以降、実践教育プログラムの対象講義を増やしていく計画である。本年度までの結果を踏まえ、よりよい教育プログラムを作成し、琉球芸能における「しまくとぅば」の用語を充実させていきたい。（文責：鈴木耕太）

2 実施概要

令和3年度、しまくとぅば実践教育プログラム研究会では年間18回（奇数月2回・偶数月1回）の定例研究会において以下の事項について検討し、実施した。

まず、令和2年度からの変更点は、これまで毎週行ってきた「琉球舞踊実技」「組踊実技」における、特別講師を招いての実践授業を2週に1回のペースで開催した。これは本学の新型コロナウイルス感染拡大防止の考えに則ったものである。特別講師が参加しない講義では、担当教員がしまくとぅばを用いて講義を行うよう努力した。また、昨年度からはじめた映像教材は今年度新たに「琉球舞踊実技」を追加製作することとした。

今年度の特別講師は「舞踊実技（高嶺）」が金城光子先生、「舞踊実技（比嘉）」が宮城幸子先生、「組踊実技」が金城清一先生、「舞踊創作演習」が中曽根律子先生と久米ひさ子先生となった。各特別講師の先生方のプロフィール等は、次の授業実践の報告に譲ることとする。

「しまくとぅば講演会」については、開催そのものを昨年同様、オンデマンドとすることを基本として企画した。本学演奏堂での開催は新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から断念し、第9回は令和3年9月15日に、劇団でいご座長の仲田幸子氏を仲田まさえ氏、鈴木を聞き手として行い、第10回は令和4年3月23日に本学琉球芸能専攻教授の高嶺久枝氏と渡嘉敷流守芸の会主である金城光子氏との対談を鈴木が聞き手となって収録を行った。今年度は大学の前期期間に長期に亘る沖縄県の「緊急事態宣言」があり、年間2回の講演会の実施も当初の予定から何度も開催日を変更して行うこととなったため、開催が年度後半へずれ込んでしまった。

研究会では『琉球芸能用語事典（仮）』を作成するために「琉球芸能用語事典部会（以下、部会と

する)」を発足させた。担当者は西岡を部会長とし、鈴木・波照間・仲原・仲嶺・比嘉・阿嘉の7名である。部会では、実践授業で出たしまくとうばのキーワードを蒐集するとともに、文献などから琉球芸能の用語を蒐集し、『琉球芸能用語事典(仮)』を刊行することを目標としている。今年度は前述のキーワードの蒐集を行った。

さらに、しまくとうば実践教育科目と、一般教育科目である「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」をカリキュラムとして連携させるため、組踊実技の特別講師である金城清一先生に「琉球語Ⅰ」の講義に参加いただき、講話を行った。また、「詞章研究Ⅱ」では昨年度の「しまくとうば検定試験」の模擬試験(9級)を行い、講義受講生へしまくとうば関連のアンケートを実施した。

今年度の実施事項の詳細は以下の通りである。時系列で示した。

令和3年	
4月3日	第1回首里系組踊勉強会
4月7日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉)
4月11日	第2回首里系組踊勉強会
4月12日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:比嘉)
4月14日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉)
4月17日	第3回首里系組踊勉強会
4月21日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉)
4月23日	第1回しまくとうば実践教育研究会
4月25日	第4回首里系組踊勉強会
4月26日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:比嘉)
4月28日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉)
5月1日	第5回首里系組踊勉強会
5月9日	第6回首里系組踊勉強会
5月10日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:比嘉)
5月12日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉)
5月13日	第2回しまくとうば実践教育研究会
5月15日	第7回首里系組踊勉強会
5月19日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉)
5月22日	第8回首里系組踊勉強会
5月24日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:比嘉)
5月26日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉・組踊実技Ⅲ:阿嘉)
5月27日	授業録画(組踊実技Ⅰ・組踊実技Ⅴ:阿嘉)
5月28日	第3回しまくとうば実践教育研究会
5月29日	第9回首里系組踊勉強会
6月2日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉・組踊実技Ⅲ:阿嘉)
6月7日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:比嘉)
6月9日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉・組踊実技Ⅲ:阿嘉)
6月10日	授業録画(組踊実技Ⅴ:阿嘉)
6月16日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉・組踊実技Ⅲ:阿嘉)
6月17日	授業録画(組踊実技Ⅰ・組踊実技Ⅴ:阿嘉)
6月21日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:比嘉)
6月24日	授業録画(組踊実技Ⅰ・組踊実技Ⅴ:阿嘉)
6月25日	第4回しまくとうば実践教育研究会
6月27日	第10回首里系組踊勉強会
6月30日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉)

7月4日	第11回首里系組踊勉強会
7月5日	第5回しまくとぅば実践教育研究会
7月5日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:比嘉)
7月6日	仲田幸子氏へ講師依頼文を送付
7月7日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉・組踊実技Ⅲ:阿嘉)
7月8日	授業録画(組踊実技Ⅰ・組踊実技Ⅴ:阿嘉)
7月9日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉)
7月14日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉・組踊実技Ⅲ:阿嘉)
7月15日	授業録画(組踊実技Ⅰ・組踊実技Ⅴ:阿嘉)
7月16日	第9回しまくとぅば講演会・(幕開け芸能)収録
7月17日	第12回首里系組踊勉強会
7月19日	授業録画(舞踊創作演習Ⅰ:比嘉)
7月24日	第13回首里系組踊勉強会
7月31日	第14回首里系組踊勉強会
8月6日	第6回しまくとぅば実践教育研究会
8月23日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:高嶺)
8月24日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:高嶺)
8月26日	第7回しまくとぅば実践教育研究会
8月27日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:高嶺)
9月9日	第8回しまくとぅば実践教育研究会
9月15日	第9回しまくとぅば講演会・(講話)収録
9月29日	授業録画(舞踊実技Ⅰ:高嶺)
10月1日	第9回しまくとぅば実践教育研究会
10月2日	第15回首里系組踊勉強会
10月9日	第16回首里系組踊勉強会
10月11日	授業録画(舞踊実技Ⅱ:比嘉)
10月13日	仲田幸子氏、まさえ氏へお礼状を送付
10月16日	第17回首里系組踊勉強会
10月22日	第10回しまくとぅば実践教育研究会
10月23日	第18回首里系組踊勉強会
10月30日	第19回首里系組踊勉強会
11月7日	第20回首里系組踊勉強会
11月8日	授業録画(舞踊実技Ⅱ:比嘉)
11月11日	第11回しまくとぅば実践教育研究会
11月14日	第21回首里系組踊勉強会
11月15日	授業録画(舞踊実技Ⅱ:比嘉)
11月16日	第22回首里系組踊勉強会
11月22日	授業録画(舞踊実技Ⅱ:比嘉・地謡実技Ⅳ:新垣)
11月23日	第23回首里系組踊勉強会
11月24日	授業録画(組踊実技Ⅳ:阿嘉)
11月25日	授業録画(組踊実技Ⅱ・組踊実技Ⅵ:阿嘉)
11月26日	第12回しまくとぅば実践教育研究会
11月27日	組踊勉強会発表リハーサル(奏楽堂ホール)
11月28日	組踊勉強会発表・収録(奏楽堂ホール)
12月1日	授業録画(組踊実技Ⅳ:阿嘉)
12月2日	授業録画(組踊実技Ⅱ・組踊実技Ⅵ:阿嘉)

12月6日	授業録画（舞踊実技Ⅱ：比嘉・地謡実技Ⅳ：新垣）
12月8日	授業録画（組踊実技Ⅳ：阿嘉）
12月9日	授業録画（組踊実技Ⅱ・組踊実技Ⅵ：阿嘉）
12月13日	授業録画（舞踊実技Ⅱ：比嘉）
12月15日	授業録画（組踊実技Ⅳ：阿嘉）
12月17日	授業録画（舞踊実技Ⅱ：比嘉・地謡実技Ⅳ：新垣）
12月17日	映像教材収録（琉球舞踊・動作①）
12月17日	首里系組踊勉強会の知念績有先生、出演者へお礼状を送付
12月20日	授業録画（舞踊実技Ⅱ：比嘉・地謡実技Ⅳ：新垣）
12月22日	授業録画（組踊実技Ⅳ：阿嘉）
12月23日	授業録画（組踊実技Ⅱ・組踊実技Ⅵ：阿嘉）
12月24日	第13回しまくとぅば実践教育研究会
12月27日	授業録画（舞踊実技Ⅱ：高嶺）
令和4年	
1月13日	第14回しまくとぅば実践教育研究会
1月26日	授業録画（舞踊実技Ⅱ：高嶺）
1月27日	第15回しまくとぅば実践教育研究会
2月2日	授業録画（舞踊実技Ⅱ：高嶺）
2月18日	金城光子氏へ講師依頼文を送付
2月25日	第16回しまくとぅば実践教育研究会
3月10日	第17回しまくとぅば実践教育研究会
3月11日	報告書原稿を入稿
3月23日	第10回しまくとぅば講演会・収録
3月25日	第18回しまくとぅば実践教育研究会
3月30日	金城光子氏へお礼状を送付
3月31日	映像教材納品（琉球舞踊・動作①）
3月31日	報告書納品

3 実践教育プログラムについて

3-1 舞踊実技(比嘉 いずみ)

実践授業1：舞踊実技Ⅰ・Ⅱ

授業期間 前期：令和3年4月12日～7月19日
後期：令和3年10月11日～12月20日

授業回数 前期：8回 後期：8回

対象学年及び受講人数 前期：学部1年次3人 後期：学部1年次3名

特別講師について

宮城 幸子(みやぎ ゆきこ) 88歳／「真踊流佳幸の会 会主」

昭和26年に琉球舞踊真踊流家元の真境名佳子師に入門され(芸歴66年)、昭和58年に沖縄タイムス芸術選賞大賞を受賞し、平成8年には沖縄県指定無形文化財「沖縄伝統舞踊」技能保持者に認定された。また平成15年に沖縄県文化功労賞を受賞し、平成21年には国指定重要無形文化財保持者に認定された実績を有している。真境名佳子師匠からはしまくとぅばでの舞踊指導を受けており、当時の指導法を体得し伝授できる重鎮な舞踊家の一人である。

令和3年、琉球舞踊立方として初めて国指定重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。

しまくとぅばキーワード

キーワード	意味・動作など
ヤファッテングワー ヒサ ンジャセー	柔らかく足先を出しなさい
クシ ミグラサーニ ユルミティ ウヌマーマ ウッチャカイル ウッピ	腰を回したら緩めて、そのまま前に寄りかかるだけ
アッチュシヤ ドゥーテューシ ムッチィチュン	歩く時は、胴体で持つていく
ドゥーテーシドゥ ウビール	胴体で覚える（体得する）
ハニーネ ヤファッテングワー	跳ねる時は柔らかく
メーンカイ ウッチャカイル ウッピ	前に寄りかかるだけ
ネーチリ イリレー	下腹にあげを入れなさい
サンシンヌ チル フミヨー	三線の弦を踏むように歩く
ユインサーニ ヒサヤ ヒッパッティ イチュン	余韻で足を引っ張っていく
チブルヌマチジカラ チビヌミーマディ ティーチ	頭の天辺から尻の穴まで一つにする
メーホーヤーナラングトゥウッチャカイルウッピ	前に寄りかかりすぎず 寄りかかるだけ
クシミグラチ ヒッタティヤーニ ウヌマーマ ウッチャカレ	腰を回し、引き上げるようにして、そのまま前に寄りかかる
ドゥーテューサーニ ヒサ ヒッパティ イチュン	胴体で足を引っ張っていく
ナジッテングワー ヒサ ンジャスン	柔らかく足を出す
クシ ミグラチ マルヌベーサングトゥ ウッチャ カイル ウッピ	腰を回して全部伸びるのではなく、前に寄りかかるだけ
ドゥーテューサーニ ウビーリヨー	体で覚えなさい・体で体得しなさい
クシ イリレー	腰を据える
ヒサ ピケーシヤ アツカン ドゥーテューシ アッチュン	足だけで歩くのではなく、胴体で歩く
イチ ヌジュシトゥ マジュン アギイリレー	息を抜くのと同時に下腹にあげを入れる
シタワタンカイ アギイリレー	下腹にあげを入れなさい
シタワタンカイ ネーチリイリレー	下腹にあげを入れなさい
クシ ミグラシーネー ウッチャカイル ウッピ	腰を回したら前に寄りかかるだけ
クシ ミグラサーニ ウッチャカイル ウッピ	腰を回したら、寄りかかるだけ
ヒサヤ クマングトゥー ンジャセー	足は交差しないで出しなさい
ウッチャガヤー ナラングトゥ ウッチャカイル ウッピ	前のめりになりすぎず、寄りかかる程度
シナヌ ナーカンカイ ヒサ イッティ シナトゥ バサングートゥ ヒサ ンジャセー	砂の中に足を入れて、砂を飛ばさないように足を出す
ドゥーテーシ ウッチャカレ	身体で前に寄りかかりなさい
ドゥーテーシ ウビーリヨー	身体で覚えなさい
イチ ヌジュシトゥ マジュン シチャワタンカイ アギイリレー	息を抜くのと同時に下腹にあげを入れなさい
ユルミヤーニ ウヌママ メーンカイ ウッチャカ イル ウッピ	緩めたらそのまま、前によりかかるだけ
ユルッテングワー ヒサ ンジャセー	柔らかく足を出しなさい
ウッチャガヤー ナラングトゥ ウッチャカイル ウッピ	前のめりになりすぎず、寄りかかる程度
クシ ミグラサーニ ヌジュル ウッピ	腰を回したら抜くだけ
ネーチリ イリレー アギ イリレー	あげをいれなさい（＝腰を入れる）

キーワード	意味・動作など
メーホーヤーナラングトゥ ウヌママ、ウッチャカイル	前に倒れすぎず、寄りかかるだけ
クシ イシヤーニ メーンカイ ウッチャカレー	腰を据えて、前に寄りかかりなさい
ドゥーテーシ ウッチャカレー	胴体で寄りかかりなさい
ドゥーテーシ ヒサ ヒッパッティイチュン	胴体で足を引っ張っていく
ユルッテングワワー アユミヨー	柔らかく歩きなさい
メーホーヤーナラングトゥ ウッチャカレー	前倒しすぎず、前に寄りかかりなさい
クシ イシヤーニ メーンカイ ウッチャカレー	腰を据えて、前に寄りかかりなさい
チュイチ ヌジュン	一息抜く
クシ ミグラサーニ メーンカイ ウッチャカイル ウッピ	腰を回したら前に寄りかかるだけ
クシ ミグラチ マヌルバーサン ウヌマーマー ウッチャカレー	腰を回したら、全部を伸ばすのではなく、前に寄りかかりなさい
アユミヤ ヤファッテングワワー	歩みは柔らかく
イチ ヌジュシトゥ マジュン メーンカイ ウッチャカレー	息を抜くのと同時に、前に寄りかかりなさい
クシ イシヤーニ ヌジュル ウッピ	腰を据えたら、抜くだけ
ハニーネ ヤファッテングアー ヒサ ンジャサー	跳ねる時は柔らかく足を出しなさい
ヤファッテングワワー ヒサ ンジャサーニ メーンカイ ウッチャカレー	柔らかく足を出したら前に寄りかかりなさい
ウヌマーマー メーンカイ ウッチャカレー	そのまま前に寄りかかりなさい
ウッチャカイル ウッピ	寄りかかるだけ
ドゥーテーサーニー ヒサ ヒッパッティ イチュン	胴体で足を引っ張っていく
スリケーラングトゥー メーンカイ ウッチャカレー	反り返らないで、前に寄りかかりなさい
クシ イシヤーニ ウヌマーマー ウッチャカレー	腰を据えたら、そのまま寄りかかりなさい

学生の反応・印象に残った言葉

【前期】

- ①今回受講する学生は1年次3名で、第1回目の授業では少し緊張気味であった。姿勢・歩み・回転の3つの基本を意識しながら歩みを重点的に繰り返し行い、宮城幸子先生に細かく一人一人ご指導いただいた。「かぎやで風(男)」の所作を再度確認した。
- ②前回に比べると緊張がだいぶ取れていて、体に力が入っていなかった。歩みは全体的にきれいであるが、3名とも右足が中心に寄る傾向がある。「かぎやで風」では、膝の開き方や体重のかけ方が流派によって多少変わるので、来週の授業の際、説明を行う。
- ③歩み、姿勢が全体的に整ってきた。息を抜く、という動作が次第に出来つつあり、肩の力が抜けている。次回の宮城先生を招いての授業から「かぎやで風(女)」の練習に入る。
- ④舞踊の基本動作、姿勢・歩み・回転が全体的に良くなりつつある。同時に目の表情(歌詞の内容をイメージする)にも意識を向けるよう、宮城先生より指導があった。7月3日(金)学内演奏会にて「かぎやで風(女踊り)」を発表することが決まっております、学生の意欲が高まっていると感じられた。
- ⑤「イチ ヌジュシトゥ マジュン、シタワタンカイ、ネーチリイリレー」のしまくとうばが、体得できつつある。息がうまく吐き切れており、上半身の力が抜けて、股関節にネーチリが入っている。

体の芯が通り、姿勢がとてもきれいになってきた。

- ⑥学生一人一人が、踊る前に体や姿勢を整える習慣が出来つつある。姿勢・歩み・回転の基本が身についてきている。
- ⑦今日は歩みの練習の後に、一人一人踊って、宮城幸子先生よりそれぞれの注意点を指摘して頂いた。全体的に歩みは良くなってきているが、イリミの歩む姿勢や、腰で小道具を扱う意識が不足していると感じた。
- ⑧受講した1年次3名は、宮城幸子先生の指導の下、琉球舞踊における基礎をしっかり体得することができた。

【後期】

- ①今回の受講生1年次3名は、ある程度基本が出来ているが、根幹の部分がしっかり安定する基礎を目指して、実践授業を行う。
- ②1回目よりも、姿勢や、目の表情、腰の入れ方がとてもよくなっている。
- ③体の軸や歩みが少しづつよくなってきている。同時に目の表情にも意識を向ける必要がある。
- ④歩みの足の出し方、回転が良くなっていった。
- ⑤歩みの練習時、目の表現への意識も行われてきている。「稲まづん」前半と後半の踊り分けに苦戦しているようだった。次回の課題とする。
- ⑥翁長俊輔君の背中へのゆがみが、かなり取れてきた。まだ右腰は上りぎみである。森山康人君は、上半身が倒れすぎで、少し頭が前に倒れている。あゆみはとても良い。
- ⑦姿勢・歩み・回転の基本が、全体的にとても良くなってきた。
- ⑧受講生3名ともに、琉球舞踊の姿勢・歩み・回転の基本を習得しつつある。琉球舞踊全般に共通する基礎なので、今後継続して修練を重ねて体得して頂きたい。

今年度の授業について

【前期】

コロナ禍中ではあったが、感染対策を行いつつ、隔週で特別講師を迎えて対面授業が行えたことは、学生達の実技習得とモチベーションアップにもつながり良かった。更に宮城幸子先生の間人国宝認定の朗報があった3日後に前期最後の授業があり、宮城先生と一緒に「かぎやで風」を踊れたことは、学生にとっても貴重な経験となった。

【後期】

後期の授業も、前期と同様にコロナ禍中ではあったが、隔週で特別講師を迎えて対面授業が行えたことは、学生達の実技習得とモチベーションアップにもつながった。

しまくとぅばを使用しての実技指導に、受講生は初めの頃は戸惑いも感じられたが、次第にしまくとぅばも理解し、基礎習得や表現の上で変化が見られ、学生一人一人の基本がかなり安定した。そして、後期の課題曲である古典女踊り「稲まづん」は、真踊流の十八番芸でもあり、この演目を通して音曲の使い方や所作、身体表現法、歌詞解釈など、基礎習得と合わせて貴重な学びを得る機会となった。

次年度への展望

授業の記録ビデオを活用し、学生が前半と後半での身体の変化を再確認することができなかったのは反省点である。次年度はその時間を確保し、客観的な視点で自己認識力を高める機会を学生に提供していきたい。

また、事業も5年目となり、しまくとぅばによる実技指導の重要性と成果が、学生を通して感じることができた。これらの貴重なわざ言語の保存と継承法などを研究会で検討し、今後の伝統芸能の普及と発展につなげていきたい。



舞踊実技の様子1



舞踊実技の様子2

3-2 舞踊創作演習(比嘉 いずみ)

実践授業 2：舞踊創作演習 I

授業期間 前期：令和3年4月7日～7月14日

授業回数 前期：15回

対象学年及び受講人数 学部3年次3人

特別講師について

中曽根律子(なかそね りつこ)80歳／「劇団うない 代表」

昭和39年(23歳)に乙姫劇団に入団し、平成4年の閉団までの38年間、県内をはじめ、県外・海外で団員として活躍された。平成6年には、新たに劇団うないが旗揚げされ、平成11年に同代表として「琉球歌劇」の若手育成を行いながら、公演活動を行っている。平成13年に沖縄タイムス芸術選賞「演劇部門功労賞」を受賞し、平成15年には沖縄県指定無形文化財「琉球歌劇」保持者に認定された。平成18年より本学の非常勤講師として、舞踊創作演習 I の科目で「琉球歌劇」を指導。

久米ひさ子(くめ ひさこ)61歳／「劇団うない 団員」

昭和50年(15歳)に乙姫劇団に入団し、平成4年の閉団までの27年間、団員として活躍された。その後平成6年に旗揚げされた劇団うないでは、演者のみならず企画制作全般を担い、琉球歌劇を通して沖縄の豊かな文化(肝心)を次世代に継承していきたいと、若手育成にも尽力されている。令和3年より、しまくとぅば実践教育の対象科目となる「舞踊創作演習 I」で、琉球歌劇を担当している中曽根律子氏の助手として、琉球語と演技を指導。

しまくとぅばキーワード

キーワード	意味・動作など
チカク ユウイブウサヤ アイビーシガ ムシカ ヨー ユスヌ ミイーネェ チャースガ ワンネー ウトルサヌ	近くに寄りたい気持ちはありますが、もし他所に見られたらどうしましょう、私は怖いのです
イチグヨ	いつまでも
チィザラリール ナカヤアラン	つながれる、仲ではない
フヤワチャル インドゥ ナー インンサダミ	出会った縁こそが、本当の定めである
イチワラニ	偽りではありませんね
カミネ イチワティン ソゾニ イチワユミヨー クヌユカラ アヌユ ママニナユサ	神に偽っても、貴方に偽る事はない、この世からあの世までも、そうである
シマ	出身地
マメ	真向い

キーワード	意味・動作など
シチャヌ ウムイヤヌ	下のうむい屋（屋号）
ヤクシクユ タゴーナヨ	約束を忘れないで
ウンジュナードンヤレエ スイヲテ チャーネール イナグヤテン トゥメーラリアル ウンジュドヤミ セェビール	貴方ほどの人なら、首里でどのような女性でも、探せるお方であるはず
クーサル バスカラ ナジキラットール ナカ ヤ イビン ドーヤー	小さい時から、いいなづけされている仲なんですよ
フージェーネーラン	みっともない
ウヤユシ クァユシ	親の言う事、子の言う事も聞かないとわからない
イーヘエダチャーヤウラン。ナーヤ グソーンカイ イ ドゥーチュイバイスンテエ	位牌を持つ人はいない、貴方は天国に一人で走って行くはずだ
フリムヌイーシークァティ ヤーヤナー	バカなものの言い方をして、貴方は！
アヒー	お兄ちゃん
アヒグワワー	愛しい人、恋人
ウミチリヨウヤ イエー アヒグワワー	私の事は忘れて下さい、愛しい人よ
ママナラン	一緒になれない
アサジクンジャ	浅地紺地（想いを着物の色にたとえた表現）
ウユバランデシヤ	およばないということは
チブミナティ サカン ハナヌ アユンナ	つぼみになって、咲かない花がありますか
イーチュー ウガミブサイ ビータン	とっても、お会いしたかったです
サダミティ ウラミニ ウムティ クィールハジャヤ	さぞかし、恨みに思っている事でしょう
シラキ	棺桶

学生の反応・印象に残った言葉

- ・「中城情話」を演じるに当たって、しまくとぅばのイントネーションや普段、私達が学んでいる琉球芸能とは違うポイントが多くあり、芸能の知識と技の幅が広がった。
- ・とても大変でしたが、絶対に自分の力になったと思う。
- ・琉球歌劇では、わからない言葉がほとんどだったが、先生方が1つ1つ丁寧に訳して教えてくれて、新しいことをたくさん学ぶことが出来た。
- ・歌劇を通して、琉球語の面白さを実感し、組踊の唱えでは感情を込める意識が出来た。
- ・所作を伴う事で、うちなーぐちが理解しやすかった。
- ・授業がスタートした頃は、言葉・歌・所作ともに全てが難しく、この授業がとても苦痛に感じたが、回を重ねるごとに面白さが増し、機会があればまた挑戦したいと思う。

今年度の授業について

この科目では中曽根先生と相談のうえ、受講生の人数に応じて歌劇の演目を決定している。今年度は「中城情話」に登場する里之子、ウサ小、タラー、主（すー）4名の名場面を抜粋し、上演時間約30分の内容で台本を構成した。配役は全役を経験させて決めたい、との中曽根先生の意向により、授業の前半では一通り各役を演じた後、雰囲気を見て役を決定した。初めの頃は、歌劇や台詞に照れや戸惑いもあったが、後半はそれぞれの役に集中して取り組み、台詞の中に感情も感じられ、身体表現も次第に良くなっていった。

収録は、中曽根先生に主を演じて頂いた事で、舞台が引き締まり、全体がとてもいい内容に仕上がった。収録後、学生からはこれまでにない達成感を感じ、組踊や琉球舞踊とは違う難しさと面白さがあった。また機会があればぜひ琉球歌劇に挑戦してみたい、との感想もあった。

また今年度より授業に参加して頂いた久米ひさ子先生は、授業がスタートした時は、台詞（うちなーぐち）・歌・所作ともに初めて挑戦する学生達の様子をみて、15回の授業で習得できるかとても心配であった。しまくとうば講演会の収録では、驚くほどの上達と熱演に感動した、とのコメントがあった。

次年度への展望

この科目は前期のみの科目である。令和4年度も今年度同様に、助手の先生に参加して頂けることにより細やかな、うちなーぐち・歌・演技の指導が可能となる。

琉球舞踊・組踊を学ぶ学生達にとって、琉球歌劇はあまり触れることの少ない琉球芸能である。しかし、過去の名優達は琉球歌劇や沖縄芝居を通して、演技力や言葉の使い方を体得し、伝統芸能を幅広く学び実践することで、観客を魅了する表現者として人々に感動を与え活躍し今日まで伝承してきた。学生達には、ぜひこの授業を通して、生きた沖縄の言葉に触れながら、表現者としての幅を広げてほしい。しまくとうば実践事業の予算で、助手の先生に参加して頂いた事により、配役によって変わる所作や言葉の使い方など、細かい部分まで指導頂けた。

また、この科目は前期のみの科目である。令和4年度も今年度同様に、助手の先生に参加して頂けると、より細やかなうちなーぐち・歌・演技の指導が可能となる。



舞踊創作演習の様子1



舞踊創作演習の様子2

3-3 舞踊実技(高嶺 久枝)

実践授業3：舞踊実技Ⅰ・Ⅱ

授業期間 前期：令和3年8月～9月

後期：令和3年12月～令和4年2月

授業回数 前期：4回(8/23・24・27・9/29)

後期：3回(12/27・1/26・2/2)

対象学年及び受講人数 前期：1年次2名・修士2年次1名／後期：1年次3名

特別講師について

金城 光子(きんじょう みつこ) 74歳／渡嘉敷本流守藝の會三代目家元

- ・平成18年 沖縄県文化協会賞受賞
- ・平成21年 沖縄タイムス芸術選賞「奨励賞」受賞
- ・平成27年 沖縄県南部連合文化協会賞受賞
- ・平成元年 町制70周年記念与那原町文化協会特別文化功労賞受賞
- ・令和4年 沖縄タイムス芸術選賞「大賞」受賞

しまくとぅばキーワード

キーワード	意味・動作など
シンカヌチャー	仲間の皆さん
オオジターチムツチュル	扇子2本持っている
ナー チュケンドー	もう一回
ミジリヌ ヒサ	右の足
ドゥーナ メーンカイ	自分の前に
クマー タックワーチ	ここは、くっつけて
チリケーシ	切り返し
ナー チュケンヤー	もう一回ね
イーベー ヌバシヨー	指は伸ばしなさいね
ワラバーター	子ども達
ナトオンドー	出来ているよ
ガマクォー イリランドー	腰は入れないよ
ウヌ ヒサシ トゥミリヨー	この足で止めてね
トー アンセー チューヤ ナー ウリサーニ ウ ワヤビラナ	では、今日はもうこれまでで終わりましょう
ジョウジナトーイビーサ	上手になっていますよ
イッターヤ シグ ウビーグトゥ、ウムトールグトゥ ナラサーリグトゥ ラクヤンドー	貴方達はすぐ覚えるから、思うように教えられるから楽ですよ
ムチカサンリチ ウムトータシガ	(受け取りは) 難しいと思っていたが
ミジリノヒサ メーンカイ ンジャサーニ	右の足を前に出して
ヒジャリヌ ヒサ ンジャチ	左の足を出して
クサンカイ	後に
ウルチ	下ろして
ヒジャリヌヒサ ヒチャーニ	左の足を引いて
ウルサーニ アッチガチナー ウリノーサーニ	降ろして、歩きながら これを直して
ヨンナーサングトゥ・・・ イフィーグァー アワ ティリィヨー	ゆっくりしないで 少しあわててよ
チカンティン シムン	間がなくとも良い
トー ナマ	はい、今(です)
ウディヌ ナガサグトゥ	腕が長いから
ハニーネー フィトゥヒサ ウトウストウマジュン メーンカイ	跳ねる時、一足おくと同時に 前へ
カシェー ムチカシコーネーラン、ウビーヤッサグ トゥ ウビートゥキヨー	歌詞は難しくない、覚えやすいから覚えておいてね
チュー ウガナビラ	ごきげんよう。またはおはようございます。
チューン ガンジュー ヤガヤー	今日も元気ですか
チューヤ ハマティ ウビーリヤー	今日は頑張って覚えて下さいね
ウーティ クーヨー	追ってきてね
タッチキヤーニ ハニヤーニ	くっつけて、はねて
ナトーイビーン	出来ていますよ
タアーチ アーチ	二つ合わせて

キーワード	意味・動作など
パチミカチィ シミヤーニ	パチッと閉じて
ムチカサグトゥ ナーチュケンドー	難しいから もう一回よ
ハニビサヤアラン	はね足ではない
アンサーニ クーテンナー クーテンナー	そうして少しずつ少しずつ
イッターヤ ユーウビートォンドー	あなた達はよく覚えているよ
イッペー カフーシドー	多大な感謝です
ナラーティ クィティ カフーシド	習ってくれてありがとう
クマカラ クマンカイ ムッチチュールダキドー	ここからここに持ってくるだけよ
チリケーセェ メーンカインジチ	切り返しは前に出して
ミジリノヒサ ヒチャーニ	右の足を引いて
タッチキランドー	くっつけないよ
アッチュンドー	歩くのよ
アッカラングトゥ	歩けないから
ヌビーシトォー マジュン	伸ばすのと同時に
クネーラー ユージュヌ アティ ワッサイビータン	この間は用事があったってわかったです
チーグーシヌ ムチヨー アンシ ムチヨー	杖の持ち方、こうして持ってね
ミジリヌ ヒサ ドゥーヌ メーンカイ タックワーセー	右の足を自分の前にくっつけて
ナーチュケンヤー ヨーンナー シマーニ	もう一回、ゆっくりやっごらん
クマー ハニビサディル ワジャシカラ	ここは、ハネビサという所作をしてから
チリケーシン カンシ スンドー	切り返しは、こうしてやるのよ
カンシ シェーカー ヒサ ウーインドー	こうすると捻挫してしまうよ
トゥー ナトンドォー ナトーシガ ナーチュケン ン シマーニー	出来ているよ、出来ているが、もう一回やっごらん
クマヤ クヌ ヒジシ トゥミリバ ハマイン ドォー	ここは、肘で止めればハマるよ
チュウン チバラナヤー トゥ 自己紹介 ウチ ナーグチシ シマーニ	今日も頑張りましょうね。さあ、自己紹介をウチナーグチでやっごらん
ウビティチョンドー、ウビンジャシガチナーシ シムンドー	覚えてきているよ。思い出しながらでよいよ
チューン ナイルウッピシ チバラヤー	今日も出来るだけで頑張りましょうね
渡嘉敷流ヤ ヒサジケー トゥ ドウジケーガ イッタームントー ウフィグワー チガイन्दー	渡嘉敷流は、足使いと体の使い方があなたたちのものとは、少し違うよ
チューン ナイルウッピシ シムクトゥ チバラ ヤー。 トォ シマーニ	今日も出来るだけでよいから頑張りましょうね。では、やってみてごらんなさい
カンシサーニ ミジリノヒサ メーンカイ ウシン ジャチカラ	こうして、右の足を前に押し出してから
クサーリンカイ マーヤーニ ティ ウルチカラ	後に回って手をおろしてから
ミジリヌヒサ ヒチャーニ ウリカラ アッチュン ドー	右の足をひいてから歩くのよ
クネーラヌ舞台ヤ ウムサタンヤー アンシマタ デキトータンヤ	この間の舞台は、面白かったね、そして、よく出来ていたね
アレー ワカイヤッサタンヤー	あれは、わかりやすかったね
イーリキサタンヤー	おもしろかったね

キーワード	意味・動作など
トゥー シマーニ、ウピトール ウッピーシ シムサ	さあ、やっごらん、覚えているだけでいいよ
ミジリノヒサ マジュン ウスヤーニ	右の足を共に押さえて
ヤサヤサ	そうそう
ナーチュケン サヤー	もう一回しましょうね
ハニビサ	渡嘉敷流にのみ所有する足さばき（名称）
ヒジャイッンチ ミジリッンチ	左見て、右見て
ウマンジェー ヨンナードー	ここでは、ゆっくりよ
イッター ワラビンチャーヤ ナママデ ナゲーン オドゥティチョーグトゥ ウビーセー ナママデー ヤッサタル ハジヤシガ、ドゥーヌムントーウ ヒィグワーチガトーグトゥ テーゲームチカサン ディ ウムトーガヤンディ シンシーヤ ウム トードゥ。ヤシガウリガ ウヌ授業ぬ目的ヤク トゥ チバラナヤー！	あなたたち子供達（学生）は、これまで長い間踊ってきたから、これまで、覚えることは優しくなかったはず、だが、自分たちのものとは少し違うので、少し難しいと思っているのかなあ、と先生は思っているよ。しかし、これが、この授業の目的ですから、頑張りましょう

沖縄県立芸術大学「しまくとぅば実践教育プログラム事業」に参加して

本学の「しまくとぅば実践教育プログラム事業」に取り組んだ筆者は、本年度（2021年）でその事業に取り組む最終年度となる。そこで、ウチナーグチ（沖縄語）普及活動の取り組みについて振り返りとともに関連事項を記載する。そして、後進の参考になれば幸いである。

2006年、沖縄県は毎年9月18日を「しまくとぅばの日」¹と制定し、2021年度は15年目を迎えた。様々な取り組みがなされ、それらは、ウチナーグチの継承・発展につながると期待されてきた。しかし、しまくとぅば（琉球語）は、2009年、国連教育科学文化機関（UNESCO）により将来消滅の可能性の高い言語の一つに認定された。

我が家では、2000年、夫高良勉が9カ所の「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の世界遺産登録事業を担った。その後、沖縄県史料編集室では『新沖縄県史』の主任専門委員を務めた（初版『沖縄県史』編集委員を務めた作家宮城聡は筆者の父方の叔父である）。

夫高良は方言札を下げられ、筆者は中学生の頃、一日の目標に「方言を使わないようにしよう」と掲げられ、方言の低俗性のレッテルを貼られた時代を体験してきた²。高良は「チカイシガマシ（使う方が良い）」と、揺るがない信念で琉球語を使い続けてきた。筆者は、その否定的な言語意識の根底からの払拭には時間を要した。しかし、琉球大学で沖縄の歴史や琉球文学を学び、これまで培ってきた琉球舞踊を携え郷土芸能クラブで組踊も学び、世界に誇れる沖縄特有な文化、習慣、伝統行事を受け継いでいくうえで、沖縄文化の基層である「しまくとぅば」はそこで暮らす人々の意思疎通を図るツールであり、欠かせないアイデンティティ確立の拠り所であるということを知り、しまくとぅばの貴重さを認識した。

また、高良は自作の詩を初めてウチナーグチで全て書き下ろした詩人と言われている。それ故か、NHK出版社からの依頼を受け、高良勉著『ウチナーグチ（沖縄語）練習帖』（2005年）を出版した³。そして、筆者らは今後の普及活動について話し合い、まず、筆者の琉舞道場を提供して若者らへ『ウチナーグチ練習帖』をテキストにした講座を開催し、普及活動を行ってきた。在住する南風原町の文化協会では「しまくとぅば部会」が設立され、また、筆者らは「南風原町組踊保存会」を2014年に創設し、その年に、沖縄県文化協会主催で「シマdeシンポジウム村の組踊×しまくとぅば」と題してシンポジウムを開催し、筆者はそのコーディネーターを務めた。さらに、南風原町文化

協会郷土芸能部創設20周年記念事業として、地域伝承の物語を資料を基に、古典音楽の師匠と共に台詞をウチナーグチで地域の言葉を交えて書き下ろし、琉歌、島唄、組踊、琉球歌劇、沖縄芝居、つらね等のこれまで培ってきた技と手法を取り入れ脚本化し、演出・主演にて記念公演で初演した。

その脚本を、担当学部科目「琉球舞踊創作演習Ⅱ」に取り入れ紹介し教示したところ、大学院へ進学した学生が、沖縄文化コース提供科目「アートマネジメント概論」の授業で課題に取り上げ、企画・運営・演出・主演し成果の発表をした⁴。筆者の期待する本学の学生像が実現できた。そして、学生自身の住む地域への貢献に展開して欲しいと願った。

琉球芸能を修行する者にとって、古代社会のオモロ、オタカベ（お崇べ）から琉歌、島唄、組踊、琉球歌劇、沖縄芝居、子守歌、諺の黄金言葉などの琉球王国を経て受け継がれてきた文学・芸術性豊かな内容の理解に「ウチナーグチ」の理解は必須である。

しかし、沖縄県立芸術大学琉球芸能専攻の昨今の学生をみても、日常生活において、「しまくとうば」への意識調査をすると「使わない」「使う人が周りにいないので聞けない」「全くしゃべれない」というのが現状である。

また、沖縄県民意識調査などの分析から、60代以上の多くは「聞けるがしゃべることは難しい」、70代以上の多くは、「使えるが、会話する相手がほとんどいない」などと、しまくとうばの話者が年々減少（2013年の調査では全体の10%程と証明）している。つまり、家庭が継承の場ではなくなり、世代間継承も途切れているため、スローガンだけでは「しまくとうば」の継承は、進まないことが分かる。

そこで、筆者は、2019年より『琉球語の美しいことば』⁵『黄金言葉』⁶『ウチナーグチ（沖縄語）練習帖』⁷『沖縄生活誌』⁸などを参考に、覚えておきたい基本の「ウチナーグチ」の単語を中心に練習するための資料と、繰り返しの学習を課題とする「復習ノート」を作成し「ウチナーグチ（沖縄語）の練習」を、毎回、授業開始前の10分間程学生に行った。

その後の実践事業では、金城光子講師と筆者は、学生らの耳に慣れさせる為、ウチナー口のみで会話と技の指導を行った。

その成果などを踏まえ、資料をまとめてテキスト化を試み出版した⁹。そして、それが国際社会に生き未来を拓く沖縄の子供達への「ウチナーグチ」の普及となり、「しまくとうば」の復興・再活性化に繋がる一冊となれば幸いと考えている。

また、次世代へウチナーグチの普及とスキルアップを願うだけでなく、自己のウチナーグチのスキルを確認したいと思い、令和3年度しまくとうば検定（中南部言葉5級～9級）¹⁰を2021年12月18日・19日の両日を通して受験し体験した。そして、先日、5枚の合格通知が届いた。

定年退職後もチュイタレーダレー精神で運営される本事業を見守り応援していきたい。

これまで、お付き合い、支えて下さいました皆様へウチナーグチで心からの感謝を申し上げます。

シディガフデービタン、^{むむがふう}百果報デービタン

2022年3月3日 沖縄県立芸術大学 音楽棟 高嶺研究室から首里城正殿跡を眺めながら
註

- 1 2006年「しまくとうばの日（9月18日）」が制定され、2017年9月12日、しまくとうば普及センター（センター長：波照間永吉）が設置（沖縄県からの業務委託による運営）された。
- 2 「ウチナームノームル捨ティレー（沖縄のものは全て捨てなさい）」という時代があった。教師たちは、沖縄の生徒たちの学力や発表力が低いのは、ウチナーグチを使っていて共通語に習熟していないからだとは考えられていた。
- 3 娘美和子（当時小学校5年生）に、古い型のパソコンをおもちゃ代用に与え、手書き原稿の打ち込みを任せた。当時、校正用原稿はファックスで巻紙のように長い原稿が届き、校正も意図的に娘にやらせ、無意識層に「ウチナーグチ」の文字言語を打ち込んだ。父娘は共同作業にて2冊の本を完成させて喜び合っていた。

- 4 2019年、上原崇弘（修士1年次）により筆者が論文&教材化した「歌舞劇うさんしー」の再演を企画公演した。
- 5 仲宗根政善『琉球語の美しさ』ロマン書房 1995年。
- 6 仲村優子編著『黄金言葉』琉球新報社1997年。
- 7 高良勉著『ウチナーグチ（沖縄語）練習帖』日本放送出版協会（NHK出版）2005年。
- 8 高良勉著『沖縄生活誌』岩波書店 2005年。
- 9 高嶺久枝編著『ウチナーグチ（沖縄語）練習テキスト』KANA舎2022年。
- 10 主催：沖縄県・しまくとぅば普及センター。

2021年しまくとぅば実践授業「琉球舞踊実技II」



ウチナーグチ練習テキストを用いて日常語の会話の練習と、課題演目の歌詞の読み方・解説、手前学習風景(講師の語るウチナーグチのよりよい理解のために)

実践授業

*「江戸上り口説」・「江戸下り口説」は、渡嘉敷流にのみ保存されている演目といわれている。



*「江戸上り口説」は、琉球から江戸までの道中をチーグーシ(杖)を持ち、クルチョウ・ウフウビ・ハチマチ姿で踊る



最終授業日：金城光子先生(右から2人目)と記念撮影



*「江戸下り口説」は、江戸から任務を終えて琉球までの道中と安堵した様子をも表現する為、クルチョウ・ウフウビ・ハチマチ姿からクルチョウを脱いだ姿で踊る。上記衣裳からクルチョウを脱いだ姿で、帰りの道中を扇を持ち踊る。
(2021年10月16日(土)琉球芸能専攻定期公演にて実践をした。)

3-4 組踊実技(阿嘉 修)

実践授業 4：組踊実技 I・II・III・IV・V・VI

授業期間 前期：令和 3 年 5 月 26 日～7 月 15 日

後期：令和 3 年 11 月 24 日～12 月 23 日

授業回数 前期：17 回 後期：13 回

対象学年及び受講人数

前期：1 年次 6 名、2 年次 3 名、3 年次 3 名

後期：1 年次 6 名、2 年次 3 名、3 年次 3 名

特別講師について

金城清一(きんじょう せいいち) 80 歳 / 「玉城流翠扇会家元」

- ・糸満出身
- ・初代家元玉城盛義に師事
- ・国指定重要無形文化財「組踊」(総合認定) 保持者
- ・文化庁長官表彰
- ・沖縄県文化功労章受章
- ・玉城琉金城清一「組踊会」主宰

しまくとぅばキーワード

キーワード	意味・動作など
アーケーजू	とんぼ
アタビチャー	蛙
ガマク	腰
ターイユ	フナ
ドゥシンチャー	友達
ナウナジャー	うなぎ
ニチョンドーヤー	似ている
ヒージャーカラ	普段から
ヤーンカイケエーティ ハル シクチ シーヨー	家に帰って畑仕事しなさい
ユクシムニー	嘘をつく
アンシェーネーラン	それではない
クミオドリサァー シバイヤナインドー	組踊が出来ると、お芝居もできる
シンシー	先生
ターチュー	双子
チューバー	強い
ティーカジエー	手数
フドゥノマギサ	身長が高い
フマガ	ひ孫
イキガヌ	男性の
イナグヌ	女性の
タンカーイイ	向かい合って
チャクシ	長男
ナーティーディー	それぞれの役、その役々

キーワード	意味・動作など
ハットグルクメー	(ダラダラしている人にたいして) もっと早く動きなさい(急ぎなさいとは少し違う感じ)。
フガラサー	ありがとう(与那国方言)
ミーファイユー	ありがとう(八重山方言)
ゴーグチ	文句
タマナー	キャベツ
メーナチ	毎日
ウトウイムチヨー	おもてなし方
ナンドゥルーモーイ	ダラダラした踊り
ヒートゥ	イルカ
チバラン	頑張らない
チャースガヤー	どうしようかね
チャーヒンギー	逃げる
ハジチ	嫁入りに行く入れ墨
フユー	怠ける
アキサミヨー	ああ!・うわー!(Waw的な言葉)
グテー	腕力
シムサ	いない
ナーヒン インデー	もう少し見なさい
ムルミーラン	全然見えない
アマンカイ	あそこに
ヌーナランシガ	何もできない
マギーク	大きく
アンシーネー ウカサッサー	そうなるとおかしい
ヨンナー アッチュン	ゆっくり歩む
チブル	ひょうたん
ナーベラー	へちま
ンジャナバー	苦菜
アンシシエー カンシシエー	ああやりなさい、こうやりなさい
グブリー	失礼
チャーナットガヤー	どうなっているのか
ティーチターチシージャ	一つ、二つ先輩
ハーエーハーエーサーニ ターヤガ クルダン	駆け足をして、誰かが転んだ
イッチシムサ	座ってよろしい
ナンデーシ	桑の実
マース カタミティ	塩を担いで
アランテー	違う
イナグンチャー	女性たち
ウヌマーマー	そのまま
ウマカラウヘー	ここから少し
ガンジュー	元気
シージャヌカター	先輩方

キーワード	意味・動作など
シージャヌカター	頭
シムガナヤー	良いかな
チャーナトガヤー	どうしているのか
チリケーシ	切り返し（舞踊用語）
ティーヤアギレー	手はあげなさい
ナーチュケン	もう一度
ミグリヨー	まわりなさい
ミジチ	目付け
アマクマ	あちこち
フニ	船
ムチカサンドー	難しいよ
クリンカイ	ここに
アマクマン スシェーヤ	あちこちやってしまう
ハルサー	農業
ヒサダカーグワー	つま先立ち
ヒジャイ ヌーディ	音痴
ミートウンダー	夫婦
ワカイミー？	分かるか？
イイレ	座りなさい
グリー	お辞儀
ウエンチュ	ネズミ
ヒージャ	ヤギ
ヤナカーギー	顔がよくない
アンシル	どうりで
イイ ソーグワァチ	良い正月
ウフェー チガトーン	少し違う
モーアシビー	野原や海岸で遊ぶ

学生の反応・印象に残った言葉

《前期》

- 1年次・・・清一先生のこれまでの経験や第一線の先生方のエピソードに興味を持って聞き入っていた。(2回目) / 「しまくとぅば」での指導に慣れてきた。(10回目) / 過去に指導をされた先生方の話には、学生たちは目を輝かせて聞き入っていた。(13回目) / 「しまくとぅば」が聞きなれて、台詞の発音も良くなった。(16回目)
- 2年次・・・離島出身の学生には難しい単語があったが、少しずつだが理解できるようになったと思う。(1回目) / 標準語より「しまくとぅば」での指導の方が学生に響く感じがした。(4回目) / 「しまくとぅば」での会話に理解をしてきた。(5回目) / 「しまくとぅば」での指導に聞きなれているように感じた。(7回目) / 「しまくとぅば」での指導に慣れてきたように思う。(8回目) / 「しまくとぅば」が聞きなれて、台詞の発音も良くなったと思う。(12回目) / 「しまくとぅば」が聞きなれて、台詞の発音も良くなった。(15回目)
- 3年次・・・2年目になると聞きなれた感じがした。(3回目) / 今では中々聞けない乙姫劇団の

話に興味を持っていた。(6回目) / 離島出身の学生も「しまくとぅば」が理解できているように感じた。(9回目) / 「しまくとぅば」での会話が理解できているように感じた。(11回目) / テスト前でもあったので、「しまくとぅば」の指導に学生の緊張感が伝わった。(14、17回目)

《後期》

- 1年次・・・学生たちは聞きなれているように思った。(2回目) / 学生たちは理解をして所作をしていた。(5回目) / 学生たちは理解をしていた。(8回目) / 学生達は興味深く聞いていた。(12回目)
- 2年次・・・学生たちは興味深く聞き入っていた。(1回目) / 学生は聞きなれた単語で納得していた。(4回目) / 学生たちは理解をしていた。(10回目) / 学生達は楽しみながら聞いていた。(11回目)
- 3年次・・・学生達は聞きなれているように感じた。(3回目) / 学生たちは理解をした。(6回目) / 学生たちは理解をしていた。(13回目)

今年度の授業について

今年度も、コロナ拡大防止のため特別講師を招いての授業回数が少なかったのが残念だった。組踊の台詞は発音も大事であり、日常から「しまくとぅば」に聞きなれる事が必要である。そのため授業の始めに金城清一先生の日常会話を「しまくとぅば」で話してもらうようにした。学生達は回を重ねるごとに「しまくとぅば」に慣れ、所作もスムーズに動けるようになった。また、「しまくとぅば」に興味を持ち、自ら「しまくとぅば」での会話をしようと努力をしていた事がよかった。

次年度への展望

次年度も同様、「しまくとぅば」での日常会話を聞きなれてもらい、「しまくとぅば」で組踊の指導を行う。



組踊実技Ⅲの様子



組踊実技Ⅵの様子

3-5 地謡実技（新垣 俊道）

実践授業5：地謡実技IV

授業期間 令和3年11月22日～12月24日

授業回数 4回

※実施は5回を予定していたが、コロナウイルス感染症の影響で4回の実施となった。

対象学年及び受講人数 琉球古典音楽コース2年次 2人

特別講師について

比嘉 康春（ひが やすはる）69歳／（沖縄県立芸術大学名誉教授・国指定重要無形文化財「組踊」保持者）

昭和28年、東村出身。昭和48年、安富祖竹久氏に師事。

平成2年より沖縄県立芸術大学で教鞭を執る。多くの琉球舞踊、組踊の地謡を務め、平成10年には独唱曲53曲をリリース。平成26年に沖縄県立芸術大学第7代学長に就任。2期務めた。

現在は沖縄芸能協会会長、伝統組踊保存会副会長を務めながら国指定重要無形文化「組踊」保持者として、実演活動はじめ後進の育成にも尽力している。

しまくとぅばキーワード

キーワード	意味・動作など
ニーセーヲウドゥイヤ カシン ウタン クファーク	二才踊は歌詞も歌も固く（力強く）
ヒチタティティ	引き立てて
サンシン ヒチュル トウチヤ バチサーニ ナ ディルグトウヤ アラン。ティクビサーニ タミ ティカラ ヒチュル。ウヌヒチカタヤ ウンナヲウ ドゥイ、ニーセーヲウドゥイ、ゾーヲウドゥイ、ム ルイヌムン	三線を弾く時は、バチで撫でるようにはな い。手首を使ってためてから弾くように。この 弾き方は、女踊、二才踊、雑踊と全部同じ。
ジウテースルトウチネー ウタン ウビーティ フシ ン アワサンネー モーヤーターガ ファンナイン。 ヤクトウ ジウテヤ ティアーシーヌ トウチカ ラ チャー カンペキニ ソーカンネーナラン	地謡を務める時は、歌も節もしっかり覚えて合 わせないと、踊り手が不安になる。だから、地 謡はお手合わせの時から、完璧でなくてはいけ ない。
ティルチナシンシーターヌ エンソウヤ ワッター ヌ エンソウトウ マーヌ チガイガヤンディイ チ クラビヤーニ クフウサン	照喜名（朝一）先生たちの演奏は私たちの演奏 と、どこが違うのか比べて自身の演奏を工夫し た。
カシヤ ズラスヤ アラン。トクニ クドゥチケイ ヤ アビトンネーシ、クトゥバトウシ チタワル グット タミティカラ チキユル	歌詞はズラして歌うという捉え方ではない。特 に口説系は話しているように、相手に言葉とし て伝わる様にためてから後ろに付けるものだ。
ヲウドゥイキョクヌ サンシンヌ ヒチカタヤ ウ ンナヲウドゥイ ゾーヲウドゥイヤ ヤファッテン グワー	踊りの曲の三線の弾き方は、女踊り雑踊りは柔 らかく。
ヒョウシヌ トウイカタ、 テンボヌ トウイカタ ヤ クンクンシーヤ イヌ ハチブイチリンミヤ ク、イヌ ヒョウシヤシガ ヲウドゥイニユッテ ヒチカタ ヒョウシヌ トウイカタヌ チガイ ン。ウリガ、ヲウドゥイヌウムサン ムズカシイ トゥクルヤサ	拍子、テンポの取り方、工工四では同じ八分一 厘。同じ拍子だけでも、踊りによっては弾き 方、拍子の取り方が違う。これが、踊りの面白 いところで難しいところだよ。
ニーセーヲウドゥイ ヤクトウ サンシンヌ ヒチ カタヤ ウフェー タミティカラ	二才踊りだから三線の弾き方は少しためてから

キーワード	意味・動作など
<p>ムトウヌチバナトウ メーヌハマヤ ウフェー ヒチカタヌ カワイシエーヤ。ウレー イッペー ダイジナクトウ。ヤクトウ タトウイルンシエー ドウーヌ ヌーディーヌ チョウシヌ ワッサルバアイヤ サンシンヌ ヒチカタシ クィーユカバースン。ヤクトウ サンシンヌ ヒチカタンディシエー ウタユ ヒツパリ ンジャスン。チューヤ チョウシヌ ワッサンディ ウムイネー サンシンサーニ イチュイ チキヤーニ ウタヒツパティ イチュルバーヤサ</p>	<p>本貫花と前之浜は、少し三線の弾き方が変わるよね。これは、とても大事なことだよ。例えば自分の喉の調子が悪いなと思ったら、三線の弾き方でカバーする。だから三線の弾き方というのは歌を引っ張りだすものだよ。今日は調子が悪いと思えば、三線で勢いを付けて歌を引っ張り出していくのだよ。</p>
<p>イヌ 「カジャディフウ」ヌ ウタムチャシガ、イクチンアシエーヤ。「シラシハイカー」カラ「フィシチブシ」トゥカ。ヤシガ 「カジャディフウ」 ヒチュルグトウシ シュドゥンヌ 「ナカマブシ」 ヒチーネー、ウリマタ「ナカマブシ」 アランナイン。ヲウドウイヌ アッカラン ナイクトウ、ヲウドウイニユッティ ヒョウシヌ トウイカタヤ チガイクトウ ブヨウキョクヤ ウムサンバーヤサ。</p>	<p>同じ「かぎやで風節」の歌持だけど、幾つもあるよね。「白瀬走川」から「平敷節」とか。だけど、「かぎやで風節」を弾くように諸屯の「仲間節」を弾くと、これはもう「仲間節」ではなくなってしまう。踊り手が歩めなくなる。踊りの演目によって拍子の取り方が違うから、舞踊曲は面白いのだよ。</p>
<p>ヒルマサンヤ、イヌ ハチブイチリンミヤクドゥヤシガ。クンクンシーンカイ アンシカチエーシガ、ウレー、ブヨウ タティレーカラー、ブヨウヌ フンイキ ンジャスタミナカイ ウヌフージーヌ キョクソウ カンゲーティ ヒカントーナランクトウ、フントーヤ キュウブミヤククライ、ユッタリ ウヌフージーヌ フンイキ チュクイールヒチカタン イッペー ジウテーヌ カンジンナトゥクマヤサ。「仲間節（実演）」、ハチブイチリンミヤクサーニ ヒチーネー、ダー、ヌーヌ アジヌネン。「仲間節（実演・ゆったりと）」 アンシ ウムイ イリレーカラー ヒョウシヤムル トウカンカクヤ アランクトウ、イヌ ナガサヤ アランクトウヤ。ヌバチャイ、ヒッチミタイサーニ ウムイ イッティ イチュバーヤサ</p>	<p>珍しいね、同じ八分一厘脈だけれども。工工四には、このように書いているが、踊りを立てると舞踊の雰囲気を出すために少し曲想を考えて弾かないといけないから、本当は九分脈くらいゆったりと。このような雰囲気を作る弾き方も地謡の肝心なところだよ。「仲間節」を八分一厘脈で弾くと、何の味もない。このように思い入れをすると、拍子は等間隔ではない、同じ長さではないからね。延ばしたり、縮めたりして思いを入れていくのだよ。</p>
<p>サンシン、コテンオンガクヌ チークンディーシェー、ヒージーカラ クントウーシ シンシートウ タンカーナヤーニ ヒチョーシガ、ウヌフージンヌ マヌトウイカタ、ウリスルタミニ ナンカイン イヌクトウ クイケーチ クイケーチ レンシュウ スンバーヤサ</p>	<p>三線、古典音楽の稽古は平時からこのように先生と向き合って弾く。このような間の取り方を習得するために何回も繰り返して練習するのだよ</p>

キーワード	意味・動作など
<p>カシカキヌ「フィシブシ」ヤ ナマヌグトウシ シムシガ 「シチシャクブシ」ヤ ダンダン ウムイヌ マサティ イチューサヤ。ヤクトウ、ドウヌキムチン タカマッティ イチュルグトウシ ウタユン。タトエバ ノバストコロ、ウフェーフクラミグァ ンジャシーネー、イッペー イイカンジン。タダヒケーカラー ナンドゥルーナイシガ、ウマリカーウティ ウントウーシ フクラマセーカラー カンキウヌ チチュセー。アンシーネー チヤン ンジティチュークトウ。ワッターアフソシンシーヤ チヤングトール ウタヤティン、クドウチウタヤティン チヤ、ウタヌ イルンンジティ クーランネー、ヘイバンニ チカリールクトウ、ウントウーシ ウタレーディイチ イミシェータン。ヤクトウ「シチシャクブシ」ヤ タダウタテーナランドー。ウムイ イリレーカラー ウントウーシ クィーン キモムチン ダンダン アガッティ チュークトウヤ ウリ ウタンカイ ンジャチイカンネー</p>	<p>「干瀬節」は今のような演奏でいいけど、「七尺節」は徐々に思いが増していくよね。だから、自分の気持ちも高まっていくように歌う。例えば節を伸ばすところ、少し膨らみを出すと、とても良い感じなる。ただ弾いてしまうと、だらっとした歌になるけど、節を伸ばすところは、このように膨らまずと緩急がつくよね。そうして歌うと艶が出て来るから。私の師匠、安富祖先生は「どのような歌でも、口説でも、艶、歌の色が出てこないと平板に聞こえるから、このように歌いなさいと、おっしゃっていた。だから「七尺節」は、ただ歌っていけないよ。思いを入れたら、このように声も気持ちも上がっていくからね、それを歌に出していかないと。</p>
<p>ナマヤ ウタヌカタニ ハマッテイル、ジッサイ、ブヨウ タティルバアイハ ヲウドウイ ンダンネー ナランクトウ フィトウニユッティ サーラナイ ウタティ ヲウドウイシンウシガ ナカニハ ナーウフェー ムッチクィリ、ムタチクィリンディ イユル フィトウンウン。ワンネー ドチラカトイウト サラットウ ナガチ イチバン ウムシルサトウクルナカイ ウマンカイ ナサキカキン。</p>	<p>今の歌は型にはまっている。実際、舞踊を立てる場合は、踊りを見ないといけないから、人によっては早めに歌って踊る人もいるが、中には、もう少し持って、持たせてくれと言う人もいます。私は、どちらかと言うとサラッと流して、一番面白いところに情けをかけていく。</p>
<p>カシヌイミ ムルワカイラヤ。「サトウガ アケジバニ ンシュユ シラニ」トンボノハネノヨウニスケテイル、アーケージュ トンボノ ハネノヨウニ。アンサーニ フントーニ ウングトール チンヌ アガヤンディ ウムティ コウゲイセンコウヌ センシヨクコースヌ グニンービカーメーヤタンドー ワーガ ガクチョウソール ジブンヤタシガ センシヨクノ サクヒンテンガアッテ ナマヤ ナクナティ ウランシガ、ルバースギンコシンシー ウヌッチュガ チュクテール シュリハナクラオリ ミタメハ ヒジョウニ アチアチートウイルン オールサーニ ヌヌン アチサン アタシガ タックアティ チュージューク ンデーアマンミュルバー。アンサーニ クリヤサ ンディウムティ ルバースシンシーンカイ ユーサンデークリドゥ アケジバニヤ アラニ。フツウヤ「ナカザトウブシ」ヌ ウッチャキグアーヌアセー、フントーヌ アケジバニディ イーシェー アヌシュリハナクラオリ。イルンナ ヌヌ ンチョーシガ タックアティ ンデーカラ アマガ シキティ ミユタン。ヤクトウ ビジュツコウゲイヌ サクヒンテン アセーヤ アリ、ウフェー マワティンデー。ウマカラ イルンナウタ ヲウドウイカイ チカトール イルンナ ムヌガ ンジティ チューサ。</p>	<p>歌詞の意味は分かるよね？「里が蜻蛉羽 御衣すらね」蜻蛉の羽の様に透けている。それで、本当にこのような着物、布があるのかなと思って工芸専攻の染色コースの、五年ほど前だったはず、私が学長している時分だったけれども、染色の作品展があって、今は亡くなっていらっしやらないけど、ルバース吟子先生、この先生が作った首里花倉織を見た。見た目は色も青で布も厚かったけど、近寄ってよくよく見ると、あそこ（布の奥）が見えるわけ。それで、これだと思ってルバース先生に「もしかしたら、これが蜻蛉羽ではないですか？」と聞いた。普通は「仲里節」の打掛があるだろ、けど本当の蜻蛉羽は、あの首里花倉織。色んな布を見てきたが、近寄って見ると、あそこが透けていた。だから、美術工芸の作品展があるよね、あれを少し周ってみてごらん。そこから色んな歌、踊りに使っている色々なものが出てくるよ。</p>

キーワード	意味・動作など
<p>サンシンン ウルシ、ウルシコウゲイヒンヤ シェー。ワンサンセンヤ アリガ(新垣)サンシン ヌン ウマンカイ(天の部分)チルヌ トウドーシ イッチョーン。マタヨシ シンヤセンセイノ オ トウサン、マタヨシ シンエイ シンシーヌ カイ リョウガタヌ サンシン。ワーガ ムッチョール サンシンヤ、ウヌ マタヨシ シンエイ シンシー ガ チュクタル ダイ2ゴウ、カンテイション ア ンヨ。ダイ1ゴウヤ ワッター シンシーガ。ヤシ ガ、(この三線を購入した時分)ワンネー ナーダ ワカサテークトウ 25、6ビカーヤタガヤ ウレー イッター ワカーガ ナマー ヘーサン。 ヤシガ、チャーシン フサテークトウ オガミタオ シテ キュウリョウ 3カゲツブン。ヤーガ コ ユサドーンディ イラッタシガ チャッサヤティ ン シマービークトウ チャッサシ ユズティ クイミセーガンディ トウータクトウ ウッサ ンディ イュルバー。カンガエタラ 3カゲツブン キュウリョウ(笑)トウジンカイ ヌーンディ イ ラングトウ キュウリョウ サンカゲツ、アンシ ナマン ムッチョーン。ヌーンディガ イイネー、 サンシンヌ ウトウガ チョット キザッポク イ エバ ワンヌ カンセイニ ピタッと アタト ン。トー、クリドゥヤッサー ワームノーンディ イヤーニ。ヤクトウ ガッキン ドウークルシ カ メーラワン イイ ガッキ カメーティ。ウレー ジウテー スルバーニ ユッタイ、アルイヤ ミッ チャイサーニ ヒチュサヤ。サンシンヌ スルワ ンネー ウトウヌ ウフェー チガイクトウ ヤク トウ トシミチセンセイ、イツオセンセイトウ ヒ チュル バーイヤ チャー サンシンヌ ウトウ スルワースグトウシ。ウヌタミナカイヤ サンシン ビケーンヤ アラン。ヒチカタン ミッチャイ、ナ マ サングトウシ ヒチカタン スルワーサント ナランバー。キョウジャクヌ チキカタン ウタヌ ナカウトーティ チューク ヒチュルメーヤ タ ゲーニ チューク ヒチュル。ヤクトウ ジウテ ンディ イシエー フウドウイ フウドウラスタミ ニ フウドウイヌ シンカヌチャーガ イイキモチ ナイルグトウ ウトウン チュ克蘭ネーナラ ン。ウヌタミナカイヤ サンシンヌ ウトウン ヒ チカタン カンゲーラントー。ナマー、コクリツゲ キジョウ ウティ ダイイツセンサーニ カツヤク ソール ゲイダイヌ オービーター。ムル サンシ ンヌ ヒチチュラサン。トー イッターン ガンバ レーヤー。</p>	<p>三線も漆、漆工芸だよ。私の三線は、あれ が(新垣)三線も、ここに(天の部分)に鶴が 飛んでいる螺鈿が入っている。又吉真也先生の お父さん、又吉真栄先生の改良型の三線。私が 持っている三線は、この又吉真栄先生が作った 第2号、鑑定書もある。第1号は私の先生が 持っている。けど当時、私はまだ若かったか ら、25、6歳だったかな。先生に「これは、お 前たち若者には今はまだ早い。」と言われた。け ど、どうしても欲しかったので拝み倒して給料 3カ月分(笑)。「お前には購入はできないよ」 と言われた。けど「どれだけでもいいから、幾 らで譲ってくれますか?」と聞いて考えてみる と、給料3カ月分。妻には何も言わないで購入 した。それで、今もこの三線を持っている。何 故かと言うと、ちょっときざっぽく言うと、私 の感性にピタッと当たっていた。あーこれだ、 私の三線はと。だから楽器は自分で探す、良い 楽器をさがすことが大事。これは地謡する時に 四人、または三人で弾くよね。三線の音色が揃 わないと。三線の音色は少しずつ違うから。だ から俊道先生、逸夫先生と弾く場合は、いつも 三線の音色を揃えている。その為には三線だけ ではないよ。弾き方も三人、今のように揃えな いといけなないわけだ。強弱の付け方も歌の中 で強く弾く所は互いに共通認識で強く弾く。だ から、地謡というのは踊り手を踊らせるために 踊り手が良い気持ちになるよう音を作ってい かないといけなない。その為には三線の音色も弾 き方もしっかり考えないと。今、国立で第一線 で活躍している芸大のOB達の演奏は、三線の弾 き方、音色が美しい。さー、あなた達も頑張り なさいね。</p>
<p>チューン ユタサルグトウ ウニゲーサビラ</p>	<p>今日も宜しくお祈いします。</p>
<p>ブヨウヌ チュンチャーヤ ウヌカシ チチャーニ ウヌキモチシ モーイクトウ ヤクトウ ウヌ フーヂーヌ ウタ モーヤーンカイ チカサンネ ナラン</p>	<p>舞踊の人達は、この歌詞を聞いて、この気持ち で踊るものだから、このような歌は歌詞を踊り 手にしっかりと聞かせないといけなない。</p>

キーワード	意味・動作など
<p>モーヤーヌ シンシータートゥ ジウテーヌシン シーター イルイル ガクヤ ヲウティ ハナシス ンバー。ウヌバーニ ジウテーヤ モーインカイル アワスミ。モーヤーヤ ウタンカイル アワス ミ。ジルガ テーシチガ。ウンナ ハナシナヤーニ ジウテースルシンンシーターヤ ウレーヤ オ ンガクンカイ アワスシドゥ アタイメーヤル。 オンガクアティドゥ ウドゥイヤ ナイクトゥ。ヤ シガ ウドゥイヌ シンシーターヤ クヌウドゥイ ヤ アンシシ モーラントーナランクトゥ クング トゥーウシ ヒチクィレー</p>	<p>踊りの先生たちと地謡の先生たちが色々で楽屋 で話をするわけ。その際、地謡は踊りに合わせ るのか。踊り手は歌に合わせるものなのか。どっ ちが大切かという話になって、地謡の先生方は、 これは音楽に合わせるからこそが当たり前だ。 音楽があつて踊りが踊れるのだから。だけど、 踊りの先生たちは、この踊りはこのように踊ら ないといけないから、このように弾いてほしい。</p>
<p>チンプシヤ ナーウフェー ユッテングアー。ヤシガ シラシハイカーヤ ウフェー ナガリールグトウヤ</p>	<p>「金武節」は少しゆったりと。「白瀬走川節」は 少し流れるようにね。</p>
<p>ヤクトゥ ウヌ カシカキヤティン リュウハニ ユッテ フィシブシヤ ウフェー ヒチタティ ティ。シチシャクブシヤ ウフェー ヨーンナ グア。リュウハニユッティ ウフェー チガイン バー。マタ チュニユッティン チガイン。ヤク トゥ ウヌフージーヤ ジウテーヤ タゲーニ ティアシー スルバスニ ウヌクトー チャーチ ムンカイ イッターカントーナラン</p>	<p>だからこの「かせかけ」でも流派によって「干 瀬節」は少し引き立てて、「七尺節」は少しゆっ くりと。流派によって少し違うわけだ。また、 人によっても違う。だから地謡は お互いに手合わせをする際は、常に肝に銘じ ておかないといけない。</p>
<p>タダ モーラセー アラン。ニンゲンコクホウ トゥカ マギーシンシーターヤ ヲウドゥイトウ モーヤートウヌ カケヒキヌ アルバー。ウレー ワッターン ユースンヤ。ツマリ ウヌツチュヤ チューヤ ウフェー ヒサヌ アーランサンディ ウムイネー テンポ ハヤミタイスン。ノウトカ カブキトカ ウヌチュンチャー ムル イヌ カ ンゲー。ヤクトゥ カブキブヨウスル チュヌ ク トゥバ ヤシガ チューヤ マーヌ ジウテーガ チョンディ イルバーネー クンドー モヤー ターヤ チューヤ クヌジウテーヌ チュンチャー ヤ クヌフージーヌ フンイキドゥ マシヤクトウ ワンネーウリンカイアーチ ウドゥラ</p>	<p>ただ踊らせば良いではない。人間国宝とか大き い先生たちは踊り手、舞い手とのかけひきがあ る。これは私たちもよくするね。つまり、この 人は今日は少し足が合わないと思ったらテンポ を早めたりする。能とか歌舞伎とか、この人達 も同じ考え方。歌舞伎舞踊をする人の言葉だけ れども、今日はこの地謡が来ているという場合 は、今度、踊り手は今日の地謡の人達は、この ような雰囲気をお好みから私はこの地謡に合わせ て踊ろう。</p>
<p>クリヤ ワーガハジミティ イッター タインカイ イチョールクトゥ アラン。トシミチシンシーター ンカイ ムル ヒーギーカラ ハナシソーン。ヤクトウ ナマカラ マタ シンシーカラ ヒーギーヌ ハナシ イチューンハジヤクトウヤ ヤスハルシンシートウ マッタク ニチャーサートオモウハズ。</p>	<p>このことは、初めてあなた達2人に言っている ことではないよ。俊道先生達にも全部、日頃か ら話していることだよ。だから、これから（俊 道）先生から日頃の話がいくと思うから、康春 先生に全く似ているねと思うはず。</p>

キーワード	意味・動作など
<p>(比嘉先生が演奏中に少し動くことについて) ウレー ワッターシンシー、ワンヌシンシーガ ワンカイ ナラーズル バーニ ディシンチャーンカイ ナラーズル バーニ ホン ミシランテークトゥムル ティーヨー チラヌ ンジュカサーニ フシヌ イリカタ ナラースタクトゥ ウヌ クシチチョールバ。ヤシガ ナマー ンナ クンクンシー ンジュセー。クンクンシー ンジュクトゥ シンシーヤ ンダンシエー。ヤクトゥ シンシーヌ ウヌ ウジュチュシ ワカラントゥ ワッターヤ ウリガ シミチチョークトゥ マチガッタ フシイリシーネーカラー シンシーガ ワン ウングウトゥーソーミ。ウマー ミグラシドゥスル。ワッターシンシーヤ ワザトゥ ウジュカスタン。</p>	<p>これは先生が私に習わず場合に、弟子に習わず場合には本を見せなかったから、全部、手様や顔を動かして節の入れ方を習わしていたから、この癖が付いているのだよ。だけど、今はみんな工工四を見るよね。工工四を見るから先生を見ないよね。だから先生の動き方が分からなくなるから、私たちはこれが染みついている。間違った節入れをすると、先生が「私はこんなふうになっているのか？ここは巡らすようにしないと。」と、私の先生はわざと体を動かしていた。</p>
<p>コテンオンガクヤ デンショーオンガク。ソウイウフウニ シショウカラ ディシニ ウゴキ、フシノマワシカタ、クィーヌ ンジャシカタ フシヌ ミグイカタ アンシ シーネー シンシーカイ ニールバー。ヤクトゥ ジマンノー アランシガワンガ シーハジメー イッパー シンシーンカイ ニチョータラヤ。ヤクトゥ イチバンノ フミクトゥバヤ シンシーヌ ウタンカイ イッパー ニチョンヤンディ イラリネーカラー イチバンヌ フミクトゥバテ。ヤクトゥ ナマー クンクンシー ンチ スシ ウレー ムリヤネーンシガナルビチュー ナマ ソールグウトゥシ シンシーヌ ドゥーヌ ムチーヨー クィーヌ ンジャシカタ ウレー トゥイネー ジョートーヤサ。マタ ウリンカイ ウタナサキヌアクトゥヤ。</p>	<p>古典音楽は伝承音楽。そういう風に師匠から弟子に、動き、節の廻し方、声の出し方、節の巡らし方をすると先生に似てくる。だから自慢ではないけど、私が習い始めの頃はとても先生の歌に似ていただろ？これは一番の誉め言葉。先生の歌にとっても似ているねと言われると、一番の誉め言葉さ。だから今は工工四を見る。これは無理だとは思いますが、なるべくは今やったように先生の胴の持ち様（体の動かし方）、声の出し方、これを取ると良いよ。また、そこに歌情けがあるからね。</p>
<p>ナーチュケーンヤ。カシヤ シッカリドー</p>	<p>もう一回ね。歌詞はしっかりだよ。</p>

キーワード	意味・動作など
<p>ブヨウキョクニハ ンジファ ナカヲウドウイ イ リファガアル。ムトウヌチバナヤ チンプシトゥ シラシハイカー。ンジファ、ナカヲウドウイ、イリ ファ キョクヤ ターチシカネーンサヤ ヤシガ シラシハイカーヤ カシガ ターチアシェー ヤ クトゥ ターチミーガ イリファナイン。メーヌ ハマーヤ フントーヤ ティーチナー ティーチ ナー ドクリツソール ウドゥイヤタル。ヤシガ ミーチ。マギー シンシーガ ユウコウシンシー トゥカ ンカシヌ シンシーターガ メーヌハマ ビケーシェー ウフェー タランクトゥ ディカ サカハラ タッチキラ。アルイヤ ユナバルブシ タッチキランディイヤーニ サイショヤ ティー チャタシガ ナマー ミーチナトーン。アンサーニ ナーティージェー カシカキ。カシカキヤ フィ シブシトゥ シチシャクブシ ヤシェーヤ。ヤシガ リュウハニユッテー ナマー フトゥンドウ サ ンシガ、ナーティーチ サアサアブシカ ヒャクナ ブシガ チチャーニ ンジファ、ナカウドウイ、イ リファ ヤシガ。ヌーンチ サンバンミーヌ サア サアブシヤ ネーン ナタガンディ イイネー ウ レー ハッキリシタクトウヤ ワカランシガ ダイ タイヌクトウヤ コンクール ウキンディイヤーニ ヌジュール。アンシカラ ナーティージェー カ シヌ ミーチメー チナガランディ。ヲウドウイ ヌ シンシーヌチャーガ ウリシェー アタラン ディ。イッショウケンメイ ドゥーヌ カナサル チュヌタミナカイ ヌヌ ウートルムン ディチャ ヨ タチムドゥラ サトゥヤ ワガヤドウニ マ チュラデムヌ イミヌ アタランディ イヤーニ ウレー サンナタルバー。</p>	<p>舞踊曲には出羽、中踊、入羽がある。「本貫花」 は「金武節」と「白瀬走川節」。出羽、中踊、 入羽だけど曲は2つしかないよね。だけど、「白 瀬走川節」は歌詞が2つあるよね。だから2つ 目の歌詞が入羽になる。「前の浜」は、本当は 一つ一つ独立した踊りだった。だけど、今は三 つ。大きい先生方が由康先生とか昔の先生たち が「前の浜節」だけだと少し足りないから、「坂 原口説」をくっつけよう。あるいは「与那原節」 をくっつけようというて、最初は一つだったけ ど、今は三つになっている。それから、もう一 つは「かせかけ」。「かせかけ」は「干瀬節」と 「七尺節」だよね。だけど流派によって、今は ほとんどはやらないけど、もう一つ「さあさあ 節」か「百名節」が付いて出羽、中踊、入羽だっ た。どうして三番目の「さあさあ節」が無くなっ たかというて、これは、はっきりとしたことは 分からないけど、大体のことはコンクールの兼 ね合いで抜いている。それから、もう一つは歌 詞三つの意味が繋がらないのだと。一生懸命、 愛する方のために布を織っているのに「でい ちゃよ〜(歌詞)」が当たらないというて、これ をやらなくなったのだよ。</p>
<p>センシューヤカ ヒチジュラク ナトンヤー。イッ カイメヤカー ニカイメ ニカイメーヤカー サン カイメ。</p>	<p>先週よりか弾き美しく(上手)になっているね。 一回目より二回目、二回目より三回目と。</p>
<p>トー チューヤ ウッサマディヤ ニフェーデービ タン。</p>	<p>さあ、今日はこれまでね。ありがとうございました。</p>

学生の反応・印象に残った言葉

- ①比嘉先生とは初対面でもあり、終始緊張気味ではあったが、指導を受けていくうちにのめり込んでいく様子だった。また、先生の曲をしっかり覚えて地謡に挑むという言葉に、それぞれ「ウチアタイ(思いあたる)」している様子も伺えた。授業終了後、学生からは「あっという間の時間だった」「緊張したが楽しかった」「比嘉先生の指導や演奏は、自分の先生とも共通しているところがあった」などの感想があり、学生も充実した様子であった。まだ、1回目ではあるが、大きな刺激を受けた時間だったように思う。
- ②前回、しっかり演奏できなかつた「本貫花」の曲が、ある程度、改善されていた。自己での取り組みのあとが伺えた。授業は終始、ウチナー口を使用しての指導であるが、雰囲気をつかむだけでも大きな成果に繋がっているように思う。また、全く分からない言葉が出てきて戸惑っていることもあるが、その際は目線で私に助けを求めている。このような目線での合図がある際は、その都度、私の方で訳をしている。まだ緊張もある様子だが、私が間に入ることで少しリラックスして授業に挑んでいるように感じている。また、今回は学生から特別講師への質問もあり、積極性

も伺えたことは大変良かった。嬉しく思う。

- ③回を重ねるごとに演奏する姿勢や技術が良くなってきた印象を受けている。また、ウチナー口の理解も何となくではあるが、理解しているように思う。しかし、まだ分からない部分も多くあり、再度、訳をしながら説明をするなどの方法を取ることで、少しずつ理解度を上げている様子である。演奏技術の向上とウチナー口の理解はそれぞれ時間を要するが、それでも毎回変化が見受けられる。
- ④今日の受講は、一人のみであった。演奏する姿勢や技術は回を重ねるごとに改善している。特に今日は、特別講師から「先週よりも弾き美しくなっている」と、お褒めの言葉もあった。また、ウチナー口もニュアンス的に理解しているところも見受けられた。毎回、ウチナー口を聞くだけで徐々に会話全体の雰囲気を感じている様子である。

今年度の授業について

授業では舞踊曲「かせかけ」「本貫花」「前之浜」を取り上げた。三線の弾き方をはじめ、テンポ感、拍子の取り方、節回し、吟使い、歌の緩急といった表現法、さらには仮名の付け方や発音など、実際の舞台を想定した、実践的な指導が行われた。また、講師自身の体験を交えながら、地謡としての在り方や心得など意識改革を促していたことは大変印象に残っている。さらには楽譜と実際の演奏との違い、対面でしか習得できない演奏法についての指導もあり、高度な授業が実施された。授業では、ほぼ全てがウチナー口での会話で進められた。学生は、会話の内容を全て理解することは出来なかったようだが、分かる言葉もあつたり、また、ニュアンスで感じ取っている様子であった。また、全く理解出来ない言葉が話された際は、私の方で訳を行った。このような高度な授業を全てウチナー口で実施したことは、学生をはじめ私自身の今後の指導の在り方、そして記録の面でも大きな収穫となった。

次年度への展望

今年度は本学に着任して1年目ということもあり、後期からの授業実施となった。反省点としては、特別講師が指導する日までに課題とする曲の習得がなかなか進まず、暗譜した状態で授業に挑めなかったところが上げられる。次年度は、特別講師の授業内容にしっかり対応できるよう取り組みながら、実践授業に挑みたい。受講者や受講学年については、個々の演奏レベルなども踏まえながら、受講に相応しい時期も考慮し選定していきたい。また、今回の実践授業は地謡実技とグループ形態であったが、次年度は個人レッスンも視野に入れながら検討してみたい。



地謡実技の様子1



地謡実技の様子2

3-6 学生による授業評価アンケート

3-6-1 学生アンケート結果

実施日時：令和3年7月

対象：琉球芸能専攻学生

I. 対象授業名と受講者数、アンケート回収枚数

受講者合計21名うちアンケート回収枚数21枚※

内訳：「琉球舞踊実技Ⅰ」6名、6枚

「琉球舞踊創作演習Ⅰ」3名、3枚

「組踊実技Ⅰ」6名、6枚「組踊実技Ⅲ」3名、3枚

「組踊実技Ⅴ」3名、3枚

※琉球舞踊実技Ⅰと組踊実技Ⅰの両方を受講した3名、
琉球舞踊創作演習Ⅰと組踊実技Ⅴの両方を受講した3名含む

II. 質問と結果

1. この授業を受けるまで、

- ①しまくとうばに接する機会はどのくらいありましたか。
- ②しまくとうばをどれくらい理解できましたか。
- ③しまくとうばを意識していましたか。

質問 1-①

選択肢	人数
ほぼ毎日	3
週に数回	14
月に数回	4
年に数回	0
ほぼ無し	0
無回答	0
計	21

質問 1-②

選択肢	人数
ほぼ全て	0
8割程度	11
半分	8
3割	2
皆無	0
無回答	0
計	21

質問 1-③

選択肢	人数
はい	14
いいえ	7
無回答	0
計	21

2. この授業を受けている間、

- ①授業内で使用されたしまくとうばをどれくらい理解できましたか。
- ②しまくとうばを以前より意識していましたか。
- ③授業外でしまくとうばを使用する機会はどのくらいありましたか。

質問 2-①

選択肢	人数
ほぼ全て理解できた	2
8割程度理解できた	12
半分程度理解できた	5
3割程度理解できた	2
ほとんどわからなかった	0
計	21

質問 2-②

選択肢	人数
はい	20
いいえ	1
どちらでもない	0
無回答	0
計	21

質問 2-③

選択肢	人数
増えた	17
減った	0
変化なし	4
計	21

3. 今後について、

- ①しまくとぅばに接する機会を増やしたいと思いますか。
- ②しまくとぅばをもっと学びたい・使いたいと思いますか。
- ③しまくとぅばでの実技の授業をまた受けたいと思いますか。

質問 1-①

選択肢	人数
はい	21
いいえ	0
無回答	0
計	21

質問 1-②

選択肢	人数
はい	21
いいえ	0
計	21

質問 1-③

選択肢	人数
はい	20
いいえ	0
どちらでもない	1
計	21

4. 「琉球語基礎」、「琉球語Ⅰ」、「琉球語Ⅱ」を受講されましたか。(複数回答可)

選択肢	人数
琉球語基礎	7
琉球語Ⅰ	6
琉球語Ⅱ	0
無回答	0
受講なし	8

5. 授業の感想・意見、印象に残っている言葉などがありましたらご記入ください。

- ・日常会話で使う方言などは、ある程度理解できているが、物の名前などの方言などが理解できていないところがあると感じました。
- ・今までと違う授業の感じで良い緊張感を味わいながら楽しく学べた。
- ・今までよりもしまくとぅばを理解できるようになったと感じました。もっと理解できるように勉強したいなと思いました。
- ・以前よりもしまくとぅばを意識して日常の生活でもたくさん方言を使っていけたら良いなと思いました。
- ・なかなか方言で指導する先生が少ないので、このしまくとぅばの授業で学ぶことができ勉強になる。
- ・昔と今とで、組踊の演じ方に違いがあるのが、勉強になりました。しまくとぅばの勉強にもなり、日常で使う機会を増やしたいです。
- ・授業を受け、以前より沖縄語を意識し、少しおぼえることができた。
- ・今まで知らなかった島言葉を知る機会になりました。舞踊・組踊の稽古の中で、島言葉を使うのはとても大切だと感じます。
- ・しまくとぅばに接する機会が増えてうれしかったです。授業以外でも使えるようになりたいと思いました。
- ・金城清一先生の使う日常的なしまくとぅばについてもっと詳しくなりたいと感じました。しまくとぅばでしか説明できない所作もあり、とても興味深かったです。
- ・「中城情話」を演じるにあたって、しまくとぅばのイントネーションや普段わたしたちが学んでいる琉球芸能とは違うポイントが多く更に幅が広がったような気がします。とても大変でしたが、絶対に自分の力になったような気がします。
- ・沖縄芝居では、方言が今まで以上にたくさん出てきて、分からない言葉がほとんどだったが、先生がいちから分からない方言を訳してくれて新しく学ぶことも多くあった。

- ・標準語では理解できなかった1本の使い方が島くとうばでピンときたことが印象に残っている。
- ・生活や普段の稽古で琉球語を使う機会が少ないので、このプロジェクトで琉球語が学べてうれしい。勉強になった。
- ・このしまくとうばの授業を受けている時期に宮城幸子先生が人間国宝になられてとても嬉しかった。歩みのヤファッテングワーは常に意識していきたいなと思いました。
- ・しまくとうばでの授業は分かりやすかったです。日本語では伝わりにくいニュアンスがしまくとうばのちょっとした表現で理解することが出来ました。
- ・渡嘉敷流にのみ伝承されている「江戸下り口説」を今回習うことができて大変貴重な勉強になりました。今後もしまくとうばの理解を深めていきたいなと思いました。
- ・普段使っている方言ではなく、芝居の口調などを聞くことができたので勉強になりました。

3-6-2 学生アンケート結果

実施日時：令和4年1月
対象：琉球芸能専攻学生

I. 対象授業名と受講者数、アンケート回収枚数

受講者合計19名うちアンケート回収枚数17枚※

内訳：「琉球舞踊実技Ⅱ」6名、6枚

「組踊実技Ⅱ」6名、5枚「組踊実技Ⅳ」3名、2枚「組踊実技Ⅵ」3名、2枚

「地謡実技Ⅱ」2名、2枚

※琉球舞踊実技Ⅱと組踊実技Ⅱの両方を受講した6名含む

II. 質問と結果

1. この授業を受けるまで、

- ①しまくとうばに接する機会はどのくらいありましたか。
- ②しまくとうばをどれくらい理解できましたか。
- ③しまくとうばを意識していましたか。

質問1-①

選択肢	人数
ほぼ毎日	2
週に数回	9
月に数回	5
年に数回	0
ほぼ無し	1
無回答	0
計	17

質問1-②

選択肢	人数
ほぼ全て	0
8割程度	7
半分	10
3割	0
皆無	0
無回答	1
計	17

質問1-③

選択肢	人数
はい	14
いいえ	3
無回答	0
計	17

2. この授業を受けている間、

- ①授業内で使用されたしまくとうばをどれくらい理解できましたか。
- ②しまくとうばを以前より意識していましたか。
- ③授業外でしまくとうばを使用する機会はどのくらいありましたか。
- ④しまくとうばによる実技指導は標準語での指導と比べて体得しやすいと感じましたか。

質問 2-①

選択肢	人数
ほぼ全て理解できた	2
8割程度理解できた	10
半分程度理解できた	5
3割程度理解できた	0
ほとんどわからなかった	0
計	17

質問 2-②

選択肢	人数
はい	16
いいえ	0
どちらでもない	1
無回答	0
計	17

質問 2-③

選択肢	人数
増えた	11
減った	0
変化なし	6
計	17

質問 2-④

選択肢	人数
はい	10
いいえ	0
どちらでもない	1
計	10

3. 今後について、

- ①しまくとぅばに接する機会を増やしたいと思いますか。
- ②しまくとぅばをもっと学びたい・使いたいと思いますか。
- ③しまくとぅばでの実技の授業をまた受けたいと思いますか。

質問 3-①

選択肢	人数
はい	17
いいえ	0
無回答	0
計	17

質問 3-②

選択肢	人数
はい	17
いいえ	0
計	17

質問 3-③

選択肢	人数
はい	16
いいえ	0
どちらでもない	1
計	17

4. 「琉球語基礎」、「琉球語Ⅰ」、「琉球語Ⅱ」を受講されましたか。(複数回答可)

選択肢	人数
琉球語基礎	3
琉球語Ⅰ	2
琉球語Ⅱ	1
無回答	11
受講なし	0

5. 授業の感想・意見、印象に残っている言葉などがありましたらご記入ください。

- ・しまくとぅばに接する機会があまりないので、とても勉強になりました。しまくとぅばでしか表現することのできないものがあることが分かりました。
- ・幸子先生に御指導いただきとてもありがたかった。うちなー口を通して、体感できたものがあるなと感じた。
- ・沖縄語でしか表現できないものがあり、勉強になった。
- ・授業内でうちなーぐちを使う事によって、頭に入りやすかったです。
- ・他流派を学ぶことで手や足の違いを見つけることができた。

- ・稽古の中で使う基本的なウチナー口を覚えることができた。授業前の話でも少しずつ会話でとり入れるようになった。
- ・普通の言葉での指導よりも、しまくとぅばを使ったほうがニュアンスがわかりやすいところがあったので、これからも機会があったら、しまくとぅばで授業や稽古をしたいです。
- ・清一先生の昔のお話を聞くことができおもしろかったです。
- ・清一先生から習うことは、より正しい、その場の様子など、技以外に学べるのでよかった。
- ・この教育事業を通して、しまくとぅばを使う機会が増え、仲間と会話も楽しくなった。
- ・島言葉を意識して使い始めると、日常会話でも同期と話せるようになってきました。授業中も島言葉と共通語を一緒に使うことで応用しやすくてよかったです。
- ・しまくとぅばでしか表現することのできない言い方があって、素晴らしいと思いました。
- ・金城清一先生の昔話などとても興味深い話が多かったです。

3-7しまくとぅば関連授業の取り組み

3-7-1「琉球語」(仲原 穰)

仲原 穰(沖縄県立芸術大学附属研究所 共同研究員/沖縄県立芸術大学非常勤講師)

実施期間：令和3年4月8日～令和3年7月29日(琉球語Ⅰ)、令和3年10月7日～令和4年1月28日(琉球語Ⅱ)、令和3年4月12日～7月26日(琉球語基礎)

授業回数：「琉球語Ⅰ」(15回)、「琉球語Ⅱ」(15回)、「琉球語基礎」(15回)

受講年次：「琉球語Ⅰ」 琉球芸能専攻10人(学部2年生4人、3年生6人)

「琉球語Ⅱ」 琉球芸能専攻3人(学部3年生3人)

「琉球語基礎」 合計39人、琉球芸能専攻6人(学部1年生6人：琉球古典音楽コース3人、琉球舞踊組踊コース3人)

(琉球芸能専攻以外の受講生：美術・工芸学部27人〔1年生7人、2年生11人、3年生6人、4年生3人〕、音楽学部6人〔1年生2人、2年生2人、3年生1人、4年生1人〕)

担当教員：「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」「琉球語基礎」仲原 穰

1. 科目について

①「琉球語Ⅰ」(前期2単位)

「琉球語Ⅰ」は、現在音楽学部琉球芸能専攻の2年生「必修科目」となっている。受講生は琉球芸能専攻の学生ではあるが、彼らは日常会話で琉球語を話せず、琉球語母語話者の日常会話をきちんと聞き取ることも難しい状況である。

今年度の「琉球語」の受講生は10人が受講した。このうち、過去に「琉球語基礎」を受講した学生は3人のみであった。それ以外の7人の受講生は琉球語関連科目群の科目を初めて受講する学生であった。

受講生の多くが琉球語の基礎を知らない学生であったため、今年度も基礎の基礎となる初歩的な内容からスタートせざるを得なかった。COVID-19に対する今年度前期開始時の音楽学部における対応としては、演習科目以外の科目は遠隔で実施するということがあった。演習科目に類する本科目の第1回の授業は遠隔で実施したが、受講生のなかに配慮を要する学生より「教室内の機器ではスライドが見えづらいので遠隔授業にしてほしい」との要望があったため、第2回より第14回まで遠隔にて授業を実施した。第15回の期末試験のみ対面で実施した。ほぼ遠隔での授業であったため、予定していた「授業計画」の遅れがあり、「到達目標」に届かなかった。

②「琉球語Ⅱ」(後期2単位)

「琉球語Ⅱ」は選択科目である。「琉球語Ⅰ」の進度に遅れがあったため、シラバスに掲載した「到達目標」に達することができなかった。前期に引き続き、すべての授業を遠隔にて実施することになったためである（「琉球語Ⅰ」と同じ理由）。期末試験は対面で行う予定であったが、COVID-19の第6波オミクロン株の蔓延によって沖縄県が「まん延防止等重点措置」の発令中だったため、急遽「遠隔試験」に切り替えた。

ただし、「特別講師」を招いて行う「しまくとぅば講話」が、その分に予定していた授業があったこともあり、到達目標の9割は達成することができた。特に「琉球語Ⅱ」の特徴でもある毎時間の終了時の「沖縄語スピーチ」は、第6回から第14回まで実施することができ、有意義であった（第1回～第5回までは日本語にてスピーチしてもらうなど準備期間にあてた）。講義終了10～15分前までに授業を終え、授業内容のまとめと感想を受講生全員に述べてもらった。第6回～第11回までは受講生の多くがコメントの多くを日本語で述べ、定型化した部分以外は沖縄語で述べるができなかったが、第12～14回になると沖縄語のスピーチの一部以外は、沖縄語の中級程度のスピーチとして成立する受講生も出てきた。受講生が3人であったため、一人あたりのスピーチ指導に時間を多く割くことができたこと、このうち2人が「琉球語基礎」と「琉球語Ⅰ」を受講した経験があった後で受講していたことなどが要因と考えられる（当初4人登録していたが1人が途中で登録を取り消したため、結果的に3人であった）。なお、口頭で発表したスピーチを48時間以内にTeamsの「チャット」、または、担当教員宛てにメールで送ってもらい、その送付状況も成績の評価とした（授業への参加度）。

③琉球語基礎(前期2単位)

「琉球語」に初めて触れる学生向けの科目が「琉球語基礎」である。受講者40人は、近年では最も多い受講数であったが、琉球語の名称や範囲、下位区分、琉球語の現状（消滅危機の度合いや沖縄県や市町村の取り組みの紹介など）を行い、単語を聞き取るための基礎となる発音の特徴について学んでから単語の語彙力を増やす取り組みを実施した。今年度も単語力の確認となる「ミニテスト」の実施や語彙のグループごとに覚える取り組みなどの取り組みを実施した。

また、今期より「リーディング」を取り入れた。沖縄語に翻訳された名文を担当教員が読み、受講生が聞き取る。その後、教員の発音を真似て、受講生に沖縄語の文を読んでもらう。

最後は指名した学生に1段落ずつ発音してもらい、発音、アクセント、イントネーション、プロミネンスにミスのある学生には適宜発音指導を行った。

本科目も全15回(期末試験を含む)全てが遠隔での授業であったため、リーディングも1回しか実施できなかったが、授業後のコメントシートでは非常に好評であった。

次年度はこのリーディングの回数を複数回に増やす所存である。さらに、レベル分けした沖縄語の文章を受講生自身で音読し、学習を深める「音読学習」も取り入れていきたい。

2. 本事業との関わりとコロナ禍による接点作りの難しさ

2-1. 「琉球語」関連科目と「特別授業」との関わり

本関連科目の受講生は、なかでも琉球芸能専攻の学生は、「琉球語」で紡がれた詞章を謡い、踊り、継承されてきた「琉球芸能」を学んでいる。必修や選択のメインの科目で体得してきた琉球芸能と「座学」に近い科目である「琉球語関連科目群」琉球語基礎、琉球語Ⅰ、琉球語Ⅱはまさに車の両輪に似ており、一方の科目の修練で理解できた内容に加え、もう一方の科目を修めることによって「一段深い習得」「日本語への変換なく味わえる楽しさ」を味わうことができる。

「琉球語」関連授業のうち、「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」の授業のなかで、特例授業の実技でご協力いただいている「特別講師」の先生方にご協力いただき、「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」の授業にて「しまくとぅば講話」を実施している。

ただし、琉球芸能専攻以外の学生にとっては、「琉球語基礎」で興味を抱き、より深く学びたい、

と思っても「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」を受講することは基本的には難しい状況にある（「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」が琉球芸能専攻の科目であるため）。

2-2. コロナ禍における接点作りの難しさ

本事業との関わりとして、過年度においては「琉球語Ⅰ・Ⅱ」の授業に実技で「しまくとうば実践」をご指導いただいている「特別講師」を招いて講話してもらっていた。その際、「琉球語Ⅰ・Ⅱ」の「しまくとうば講話」を過去に担当したことのない特別講師に講話を依頼してきた経緯がある。その理由として、この講話が「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」の受講生に限定せず、琉球芸能専攻の1年生～4年生の聴講を認めていたため、講話の重複を避けることが主な要因である。

このため、「しまくとうば講話」を開始して4年めを迎え、本事業に参加なさっている限られた特別講師のなかで、講話を依頼できる特別講師の先生方が限定されてしまった。限定された特別講師の方々のスケジュールや体調なども考慮に入れ、授業の進捗状況も含めて調整するのであるが、今年度はそれが前後期とも不調に終わってしまった。

次年度からは、過去に依頼した特別講師も候補に入れ、前期・後期ともできるだけ各2回の講話が可能になるように調整する所存である。その実現のためにも、次年度は本授業に参加しているすべての方々にも力を貸していただきたいと願っている。

3. 「琉球語Ⅱ」の受講後アンケートのコメント

3.1 「琉球語」の講義終了後に授業への感想をアンケート形式で答えてもらった。以下に紹介する。

① まず「この「琉球語Ⅱ」を受講後、受講前に比べ、変化したところ、成長したところは何ですか？」という問いに対し、以下のコメントがあった。

- ・日常生活で使える会話文などを学べたので、そこでかなり新しい知識を得ることができたと感じた。
- ・琉球語の文法については、基本的知識をベースに、徐々に応用的な部分が少しずつ理解できるようになりました。ただ、応用範囲も広く、特例的な文法も多く、しっかりと知識を保つことは難しいです。また、単語の種類も以前と比較すると大分身に付いてきたと思います。また、にがてな部分なのですが、首里語の発音については、まだまだ不十分です。繰り返し練習するしかないと思います。
- ・文の作り方の基本的な知識が身に付いた。また、母音変化についての基本的な知識が身に付いた。丁寧語や過去形や継続形などの文の作り方などの活用なども理解できるようになった。また、首里方言の発音の難しさについて実感することができた。単語の知識が以前より豊富になった。

② つぎに「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」を受講後に「琉球語」（または「しまくとうば」）を聞き取れるようになりましたか？」という問いに対し、以下のコメントがあった。

- ・少しずつではあるが、聞き取れるようにはなった。
- ・まだまだ不十分ですが、簡単な挨拶、会話が少し聞き取れるようになりました。
- ・簡単な挨拶文が少し理解することができるようになった。

3.2 必要性に関するアンケート結果

最後に「琉球芸能を学ぼううえで、「琉球語」は必要だと思いますか？」という問いについて、以下の5つの選択肢から選択してもらった。結果的に受講者3人とも「a必要だと強く感じた」を選択した。

- a 必要だと強く感じた。／b 必要だと感じた／c 必要だと思うが、そこまで強くは思わない。
- d あまり必要ではない。／e まったく必要だとは思わない。

4. まとめにかえて

今年度は琉球芸能専攻の学生のうち、「琉球語基礎」に1年生6人、「琉球語Ⅰ」に2年生4人、3年生6人、「琉球語Ⅱ」に3年生3人と多くの受講生が「琉球語」関連科目を受講した。特に「琉球語Ⅱ」の受講生3人は「琉球語基礎」から受け続けていた2人と「琉球語Ⅰ・Ⅱ」を連続で受講した1人であったこともあり、期末試験の結果をみると、3人とも受講前に比べて語彙力、語法ともに向上している。また、授業後コメントにより、人前で話すための前段階の演習までは終えることができた。今後は、実際に人前で何度か話す訓練を行えば、その場に応じた話しができるようになるだろう。今後も努力を続けてほしい。

今年度は「特別講師」を招いての「しまくとぅば講話」を前・後期とも実施できなかった。次年度の状況はまだ不安定で読めないところも多いが、可能であれば「琉球語」で2回、「琉球語Ⅱ」でも少なくとも1回は「しまくとぅば講話」を実施し、まずはリスニング能力を上げていきたい。

「琉球語基礎」は、本学の学生全員が「琉球語」について触れあうことのできる唯一の科目である。次年度も「リーディング」を継続するとともに、「音読」など新たなカリキュラムも試す予定である。「自ら学びたくなる教材」の作成にも取り組んでいきたい。

3-7-2「詞章研究」(鈴木 耕太)

講義概要

「詞章研究」講義は、前期に「詞章研究Ⅰ」、後期に「詞章研究Ⅱ」の内容で開催している琉球芸能専攻1年次の必修科目である。講義担当教員は鈴木耕太である。講義テーマは「古典音楽・琉球舞踊に深くかかわる「琉歌」について学ぶ」とし、本科目では沖縄の古典音楽や楽劇の詞章の基本をなす琉歌について、講義において詞章の語義・通釈・鑑賞を行っている。最終的に学生自身がこの琉歌形式になじみ、琉歌の韻律を体得し、琉歌の解釈が自力で出来るような知識と方法の習得をめざす。各講義のシラバスは以下の通りである。

詞章研究Ⅰ

- 第1回：琉歌および琉歌集についての概説(琉歌集というテキストについて)
- 第2回：琉歌および琉歌集についての概説(詠み歌と唄について)
- 第3回：琉歌および琉歌集についての概説(琉球舞踊に用いられる琉歌と本歌について)
- 第4回：琉球舞踊の琉歌の解釈①古典女踊「作田」
- 第5回：琉球舞踊の琉歌の解釈②古典女踊「かせかけ」
- 第6回：琉球舞踊の琉歌の解釈③古典女踊「柳」
- 第7回：琉球舞踊の琉歌の解釈④古典女踊「天川」
- 第8回：琉球舞踊の琉歌の解釈⑤古典女踊「本貫花」
- 第9回：琉球舞踊の琉歌の解釈⑥古典女踊「諸屯」
- 第10回：琉球舞踊の琉歌の解釈⑦古典女踊「伊野波節」
- 第11回：琉球舞踊の琉歌の解釈⑧古典女踊「苧引」
- 第12回：琉球舞踊の琉歌の解釈⑨古典女踊「本嘉手久」
- 第13回：琉球舞踊の琉歌の解釈⑩古典女踊「稲まづん」
- 第14回：琉球舞踊の琉歌の解釈⑪古典女踊「瓦屋節」
- 第15回：琉球舞踊「女踊」の琉歌の解釈 まとめ

詞章研究Ⅱ

- 第1回：雑踊の琉歌の解釈①「花風」
- 第2回：雑踊の琉歌の解釈②「浜千鳥」

- 第 3 回：雑踊の琉歌の解釈③「むんじゅる」
- 第 4 回：雑踊の琉歌の解釈④「谷茶前」
- 第 5 回：雑踊の琉歌の解釈⑤「加那よー」
- 第 6 回：琉球古典楽曲の琉歌の解釈①「かぎやで風節」(他、上巻に収録されているもの)
- 第 7 回：琉球古典楽曲の琉歌の解釈②「金武節」(他、上巻に収録されているもの)
- 第 8 回：琉球古典楽曲の琉歌の解釈③「特牛節」(他、上巻に収録されているもの)
- 第 9 回：琉球古典楽曲の琉歌の解釈④「十七八節」(他、中巻に収録されているもの)
- 第 10 回：琉球古典楽曲の琉歌の解釈⑤「茶屋節」(他、中巻に収録されているもの)
- 第 11 回：琉球古典楽曲の琉歌の解釈⑥「永伊平屋節」(他、中巻に収録されているもの)
- 第 12 回：琉球古典楽曲の琉歌の解釈⑦「散山節」(他、下巻に収録されているもの)
- 第 13 回：琉球古典楽曲の琉歌の解釈⑧「仲風節」(他、下巻に収録されているもの)
- 第 14 回：琉球古典楽曲の琉歌の解釈⑨「述懐節」(他、下巻に収録されているもの)
- 第 15 回：雑踊・古典楽曲の琉歌の解釈 まとめ

しまくとうば関連の取り組み

本講義は琉球古典語を学習することを目的としているが、琉球古典語は「首里ことば」の韻文体であるため「しまくとうば」と密接な関係を持っている。また、琉歌によっては口語体、すなわち「首里ことば」を用いたものもあるため、「しまくとうば」を学習することで本講義の理解度も深化する。今年度は新たな取り組みとして、琉球芸能専攻 1 年次の必修科目「詞章研究Ⅱ」において、「しまくとうば検定試験」の模擬試験を実施した。その内容は以下の通りである。

模擬試験の実施

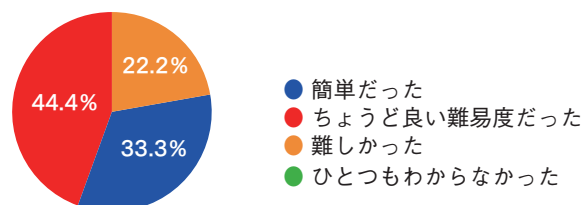
今年度は「沖縄県しまくとうば普及センター」へ昨年度のしまくとうば検定試験「9 級」の問題を提供していただき、琉球芸能専攻 1 年次を対象に実施した。試験内容はリスニング試験 (16 問) と筆記試験 (15 問) である。

実施日は令和 4 年 1 月 25 日 (金) とした。シラバスとしては「詞章研究Ⅱ」の第 15 回講義に相当する。シラバス内容の変更は第 13 回、第 14 回講義に学生へ周知した。

模擬試験受験者は 12 名、100 点満点中、平均点は 96.17 点であった。また、模擬試験を受験した学生を対象に、以下のアンケートを実施した。アンケートの参加は 12 名中 9 名。アンケート結果は以下を参照いただきたい。

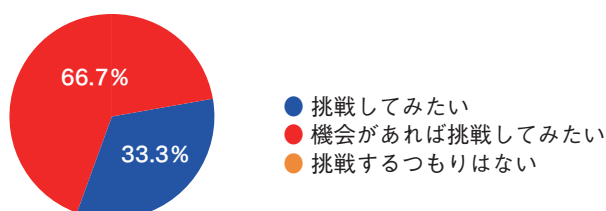
9 級の試験はどうでしたか？

9 件の回答



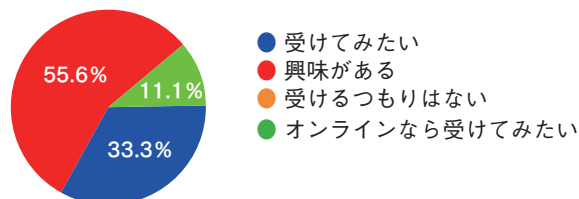
次回のしまくとうば検定にチャレンジしてみたいと思いますか？

9 件の回答



しまくとぅば検定試験の対策講座があればうけてみたいですか？

9件の回答



9級を受けてみた感想を書いて下さい。

- リスニングが何回も流れてくれて嬉しかったです。思ったよりも難しく、解けるか不安でした。8級を受けるには、もっともっと勉強しないと無理だと思いました。でも、楽しかったです。
- 楽しかったです。ありがとうございました。
- ただ単語を覚えるだけではなくて、文法や会話での使い方を勉強する必要があると思いました。
- 面白かった
- 助詞などが難しかった。
- 難しかったが、沖縄県外の自分でも分かるものもあり、体験出来てよかった。
- 思ったよりもできていて良かったです。
- 8級と次の検定と受けてみたいと思った
- 簡単と思いましたが、たまに難しいところがありました。初めてこういった問題をやりましたが、とっても楽しかったです。

模擬試験受験者の中には県外出身者もいた。しかし、結果として全員が合格点を取得した。今後も模擬試験を継続して講義に活用できるのであれば、前期に9級の模擬試験、後期は8級の模擬試験など難易度を変えて受験させてみたい。

3-8実践教育プログラム教材について

令和2年度のしまくとぅば実践教育プログラム開発事業では、特別講師を招いての講義が新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から前期は中止、後期からは2週に1回の開催となった。つまり、平成31年度(令和元年度)と比べると講義数が格段に少なくなってしまったのである。

本研究会では、このような状況においてもしまくとぅばによる実践教育を学生が事前、または講義の事後にふり返り学習をすることができるよう動画を用いた教材の開発を行った。教材開発については、これまでの講義動画を用いることと、これまで実践教育を行った際にまとめたしまくとぅばのキーワード、さらには平成30年度に作成した「琉球舞踊実技」のしまくとぅばのキーワードをイラスト化した資料などを元に企画した。

これらの資料から、これまでの蓄積してきた実践教育の内容、教育カリキュラムと照らし、教材は令和2年度に「琉球舞踊実技」「組踊実技」の4本、今年度に「琉球舞踊実技」1本を製作した。いずれも1年次を対象とした内容で、基礎的な内容とした。各教材の内容(概要)は以下を参照していただきたい。

各映像教材は、担当教員がしまくとぅばキーワード、動画の説明をしまくとぅばで話し、次に実際の講義風景の映像を流し、最後に担当教員による解説を入れる形を基本として収録した。映像にはすべてしまくとぅばの字幕を入れた。しまくとぅばの字幕は研究会の仲原譲、西岡敏が担当した。

3-8-1「琉球舞踊実技」(比嘉 いずみ)

琉球舞踊実技における教材は、舞踊におけるしまくとぅばのキーワードごとに作成した。令和2年度に「基本姿勢①」(キーワード:「ネーチリ イリレー、アギ イリレー」)、「基本姿勢②」(キーワード:「チブルヌ マチジカラ チビヌミーマディ ティーチ」)を製作した。今年度は「基本動

作①)(キーワード:「メインカイ ウッチャカレー」)を製作した。

「基本姿勢①」(キーワード:「ネーチリ イリレー、アギ イリレー」)は、琉球舞踊の姿勢の基本である体づかいについてレクチャーした教材である。体の下半身(丹田あたり)に意識を持っていき、歩む動作は、日本語での説明が難しいが、キーワードの「ネーチリ」や「アゲ」は、着物の「おはしより」を入れるように体の部分を意識することを説いている。実際の講義風景と後半部分の担当教員による解説で歩みを行う、または琉球舞踊の基本姿勢で注意すべき部分が的確に示されている動画である。

「基本姿勢②」(キーワード:「チブルヌ マチジカラ チビヌミーマディ ティーチ」)は、これまでの講義で「シングワヤ カネー」、「シン タティレー」など同じ表現のしまくとうばもある。これは琉球舞踊の基本姿勢の中で、体の中心部分に芯または軸を立てるイメージを持つことを説いたことばである。教材では「基本姿勢①」の内容を振り返りつつ、今回のキーワードを説明している。今回の姿勢を意識することは言い換えれば「体の芯や軸を保ち続けること」となり、舞踊に安定感が得られ、結果的に美しい所作表現の根幹となる。前回の「基本姿勢①」と今回のキーワードは連動している基本姿勢であり、繰り返し映像教材で学習することで、実際の講義の際に充実した舞踊表現を行うことができるようになっている。

「基本動作①」(キーワード:「メインカイ ウッチャカレー」)は、これまでの「基本姿勢」を確認した後、これらを踏まえて、実際の「歩み」の動きに関わる内容を説いたことばである。今回の教材は前2回の教材の発展したキーワードであるため、前2回のことばを意識し、体現しなければならぬため、前半部のふり返りの時間を多く割いている。基本姿勢のまま、前方に体重移動をすることで「メインカイ ウッチャカレー」の状態となる。琉球舞踊の「歩み」の重要性を解説した動画となっている。

3-8-2「組踊実技」(阿嘉 修)

組踊実技における教材は、戦前の名優たちの「芸談」を基本の教材として収録した。組踊はその表現に個別の流派はなく、名優ごとに「役どころ」の表現や考え方があり、それらを知ることが「役作り」の規範となっていく。実際の講義では組踊の詞章を覚え、唱えを体得し、その上でそれぞれの役の所作を覚えていくのだが、名優たちの芸談は語られることが少ない。今回作成した教材では、小波流琉球きからじ結家元の小波則夫氏の芸談を前編、後編に分けて収録している。

「組踊 芸談①:前編」では講義で話した、小波氏の幼少期に見てきた芝居の状況を中心に収録している。小波氏は十代から芝居の世界に入り、女形を得意としながら舞台の裏方、特に髪結いや着付けを行ってきた。渡嘉敷守良、玉城盛重、新垣松含の芸風の話、また、戦前の宮城能造、親泊興照、玉城盛義の踊りの話などをしまくとうばで語っている。学生への説明の際は、担当教員(阿嘉修)と鈴木が同時に現代語訳を行った。

「組踊 芸談①:後編」は、戦前の辻の娼妓達の着付けの方法や、芝居小屋における着付け、髪結いの方法を中心に語っている。特に大帯の結い方に関しては、現在は簡易的に着用することが多くなっているため、貴重な語りとなっている。小波氏は多くの舞台で着付けを行ってきた経験から、時代とともに変容してきた部分について話している。また、名優たちがこだわった着付けについての話など他では聞くことのできない貴重なことが多く語られている。

小波氏は2019年に逝去されたため、教材として収録された話はいずれも貴重なものとなっている。

4 首里系組踊勉強会

4-1 勉強会概要

この勉強会は令和2年9月12日から継続して行った。本年度は昨年同様、本学の施設で学外者を招いて使用できないという制限があり、4月から国立劇場おきなわを主とした稽古場として開催した。

本事業は、首里の士族たちが伝承してきた組踊稽古の方法を学び、かつ、勉強会の中では首里くとうばを用いてすべてを行う、というものである。このような芸能の享受方法は、ほとんど事例がないうえに、首里系の組踊の伝承は少なく、琉球芸能の技術伝承だけでなく、その「稽古」という文化を学ぶ上では貴重なものである。講師は知念績有氏を招聘し、組踊「執心鐘入」を約1年間かけて学び、披露するという計画を立てて実施し、本年度は昨年度から引き続く「後半」の部分である。稽古のうち、沖縄県の新型コロナウイルスの感染拡大による「緊急事態宣言」などで稽古場施設を利用できず、稽古を中止せざるを得なかった状況もあったが、令和3年11月28日に本学奏楽堂において成果発表会を開催し、第1回の首里系組踊勉強会を終えることができた。

講師の知念績有氏の経歴は以下の通りである。また、今年度における勉強会の実施詳細については下表を参照いただきたい。

講師略歴

ちねん せきゆう
知念 績有

(琉球古典芸能首里系組踊研究家)

昭和12年那覇市出身。昭和42年金武良章琉球芸能研究所に入門。昭和43年、名渡山ホールでの「日曜鑑賞会」にて「手水の縁」の門番役で初舞台。同年、「大川敵討」の母役も務めた。昭和46年、琉球政府文化財保護委員会の伝承者公演にて「二童敵討」の供(二)を務める。そのほか、金武良章琉球芸能研究所主催の「組踊の夕」などの舞台に出演する。また、平成3年からは「首里伝統芸能文化協会」、平成6年からは「首里組踊の会」を立ち上げ、首里公民館で首里系古典芸能の研究や組踊台本を首里系の唱えをとおして鑑賞する会の講師として活躍している。

令和3年		
6月27日	第10回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
7月4日	第11回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
7月17日	第12回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
7月24日	第13回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
7月31日	第14回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
10月2日	第15回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
10月9日	第16回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
10月16日	第17回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
10月23日	第18回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
10月30日	第19回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
11月7日	第20回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
11月14日	第21回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)

11月16日	第22回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
11月23日	第23回首里系組踊勉強会	(場所：国立劇場おきなわ)
11月27日	組踊勉強会発表リハーサル(奏楽堂ホール)	(場所：国立劇場おきなわ)
11月28日	組踊勉強会発表・収録(奏楽堂ホール)	(場所：国立劇場おきなわ)

勉強会は本学琉球芸能専攻の卒業生を中心に声をかけ、参加していただいた。現時点での参加者は以下の通りである。

新垣 俊道	新垣 悟	猪野屋 楓	伊波 瑠衣	伊良波賢弥	伊良波さゆき
入嵩西 諭	上門 夏生	大城 貴幸	大城建太郎	太田いずみ	大濱 麻美
嘉数 真希	神谷 武史	加屋本真士	金城 桂子	金城 真次	金城 裕幸
黒濱 美紀	島袋 奈美	高井賢太郎	田口 博章	棚原 健太	仲宗根朝儀
仲宗根朝子	中村 知子	仲村 佑奈	仲盛 良盛	林 杏佳	比嘉 一恵
宮里 和希	山城亜矢乃	和田 信一	山里 静香		

勉強会は、土曜日ないし日曜日の午前中(9時30分～12時)に行った。組踊の稽古の前に、基本として歩み(若衆・老人踊・女踊・二才踊)・舞踊「かぎやで風」「瓦屋節」「上り口説」・歌三線「かぎやで風」「金武節」「干瀬節」「七尺節」「散山節」「上り口説」をすべて行い、その後で参加者全員ですべて役の唱えを行い、これらが終わってから立ち稽古を行うという流れであった。

このような稽古方針は、まさに組踊を「総合的に学ぶ」ということにつながり、地謡を担当する受講者や立方を担当する受講者に対しても、意義の大きなものであったといえる。受講者からは新鮮な反応が伺え、これまで自身が受けてきた組踊の稽古と異なる内容であることが明らかとなった。本勉強会は次年度から第2回として他の演目を継続して勉強する予定である。

4-2 勉強会内容

本勉強会は、たんに首里系の芸能を学ぶという以外に、琉球芸能の稽古をすべて首里くとうばを用いて行うという新たな試みのもとに行われた。講師の知念績有氏は、毎回の指導だけでなく、質問や雑談までも首里くとうばで行い、受講生は首里くとうばに浸る(イマージョンする)状況下で稽古を行ってきた。受講生の中には沖縄県外出身者でしまくとうばの理解力が低い者もいたが、回数を重ねていくごとに、内容を理解して稽古に励んでいた。以下に、これまで行ってきた勉強会の内容を、昨年と重複する内容であるが、項目別に記す。

【歩みについて】

所作の基本となる「歩み」については、勉強会の初期から行った。首里系の歩みの基本は3種類あり、若衆踊と老人踊に共通する歩み、女踊の歩み、二才踊の歩みに大きく分かれている。知念氏は自信の作成した教本を用いながら、実際に歩みの要点を指導しておられた。

【舞踊について】

組踊の所作の基本となる舞踊については「かぎやで風」「瓦屋節」「上り口説」の3作品を毎回の稽古で行った。「かぎやで風」は戦前から伝わる手をご指導いただいた。「瓦屋節」は組踊の女役歩みと所作の基本に応用できるということであった。

【地謡について】

地謡は「運指(うんし)」の方法を中心にして基本となる「かぎやで風」のほか、組踊「執心鐘入」

に用いられる音曲（「金武節」「干瀬節」「七尺節」「散山節」）を毎回稽古した。組踊の音曲は歌われる場面によって、曲のテンポに緩急があるため、繰り返し歌われる音曲（干瀬節や七尺節）でも運指は基本的に同じであるが、個々に異なる表現であった。

【唱えについて】

首里系組踊の特徴は唱えにある。唱えは「ムヌユルグトゥ（物言る如、つまり普通に話すように）」唱えることを基本とするほか、「スイ」「シャ」「シュ」「ショ」などの発音は「中間音」という特殊な発音を行う。この唱えは、そのまま首里くとうばの発声に直結しており、知念氏の指導中に話される首里くとうばはそのまま唱えの教材となっている。

受講者たちは以上の項目を毎回の稽古で行っている。稽古にあたって、工工四や台本、組踊の基礎理論などの教材は、知念績有氏と高原（高江洲）氏によるものである。特に、工工四はひとつひとつ手書きで「運指」の「要どころ」が蛍光ペンで記されており、講師の技を伝えるための情熱には頭が下がる。本勉強会では多くの芸能に関する首里くとうばを蒐集することができたほか、琉球芸能を学ぶ時の文化的背景など、多くの芸術文化を学べる勉強会と言える。

5 「誇らしゃ しまくとぅば」講演会概要

昨年度まで本学奏楽堂において開催していた「誇らしゃ しまくとぅば」講演会は昨年度から続く新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、観客を集めて開催することができなかった。しかしながら、研究会で議論を重ね、本学関係者のみならず、「しまくとぅば」に興味・関心のある人々に視聴してもらいたいということで、今年度もインターネット上の動画配信サービス（YouTube）を用いて開催することとなった。

したがって、会場確保や登壇者の体調面、さらには沖縄県の「緊急事態制限」などを考慮したところ、通常開催していた時期（7月と11月）の開催が9月と3月の開催になり、大幅に時期を遅らせざるを得なかった。しかし、各講演を映像に収めて公開することで、本講演が今後、しまくとぅばの教材となりうる可能性が明らかとなった講演会となった。

第9回の講演会は劇団「でいご座」の座長の仲田幸子氏を招いて、「喜劇の女王」と評されたこれまでの沖縄芝居についてお話を伺った。聞き手は「でいご座」の座員であり、仲田氏の孫にあたる仲田まさえ氏と鈴木がつとめた。今回は仲田氏の体調や、収録が「緊急事態宣言」の期間中だったことを踏まえ、仲田氏の経営する「仲田幸子の店」で収録を行った。聞き手のまさえ氏のサポートもあり、家族の話や夫の仲田龍太郎氏との知られざる話、沖縄芝居に対する熱い想いなど、普段では聞くことのできない貴重な講話となった。また、講話に先立って、劇団うないの中曾根律子先生と久米ひさ子先生の指導による「中城情話」も収録した。

第10回の講演会は、講話者に沖縄県立芸術大学音楽学部琉球芸能専攻教授の高嶺久枝氏と沖縄県指定重要無形文化財「琉球舞踊」保持者で、本事業の特別講師を務めておられる渡嘉敷流守藝の會会主の金城光子氏を招き、「しまくとぅばと琉球舞踊」というサブテーマで両先生に語っていただいた。高嶺久枝氏からは3年間にわたる本事業での実践教育に対する感想やこれからの展望、金城光子氏からは自身の芸能と「しまくとぅば」についてこれまでの経験と、これからの展望を語ってもらった。聞き手は鈴木が務めた。また、講話に先立ち、お二人の「〇〇」を収録した。

上記の第9回・第10回「誇らしゃ しまくとぅば」講演会の内容は、以下のURL（沖縄県立芸術大学公式YouTube）で公開している。

5-1 第9回 芸能から受け継ぐ「誇らしやしまくとぅば」「喜劇の女王が見たウチナー」

収録日：令和3年9月15日（水） 14時～16時

会場：「仲田幸子の店」

講師：仲田幸子（案内役：仲田まさえ、聞き手：鈴木耕太）

演題：「喜劇の女王が見たウチナー」

なかだ さちこ
仲田 幸子

昭和7年 那覇市泉崎生まれ。
昭和23年 南月舞劇団同僚の仲田龍太郎と結婚。
昭和24年 高安高俊主宰の鶴劇団に入団。
昭和26年 玉城盛義、与座朝明主宰の新富座に入団。
昭和28年 真喜志康忠主宰のときわ座に入団。
昭和29年 島袋光裕、親泊興照らが主宰する珊瑚座に入団。
昭和31年 珊瑚座より道具をもらい受け、劇団「でいご座」とし、地方巡業に出発。
昭和37年 吉浦朝治主宰の朝日座と合併。
昭和38年 久高照吉主宰の俳優座へ加入。
昭和49年 劇団「でいご座」を再結成。現在に至る。
昭和57年 那覇市久茂地に「仲田幸子芸能館」開店
平成20年 那覇市松山に「仲田幸子芸能館」移転
令和2年5月 「仲田幸子芸能館」閉館
令和2年7月 那覇市久米に「仲田幸子の店」開店

第1部：歌劇「中城情話」名場面

○指導 中曽根律子 劇団うない代表・
沖縄県立芸術大学非常勤講師
久米ひさ子 劇団うない団員

○出演 沖縄県立芸術大学 琉球芸能
専攻学生

配役 里之主：砂川博仁
太良：堀川裕貴
ウサ小：國場海里
主：中曽根律子

地謡 歌三線：波平宇宙・森田敬太
笛：住田千裕
太鼓：久米ひさ子

沖縄を代表する俳優の芸道から見た時代の移り
変わりを「しまくとぅば」により伝えます。

演題 「喜劇の女王が見たウチナー」

講師 仲田幸子 劇団「でいご座」座長
案内役 仲田まさえ 劇団「でいご座」団員
聞き手 鈴木耕太 沖縄県立芸術大学准教授

前段 歌劇「中城情話」名場面

指導 中曽根律子 劇団うない代表・沖縄県立芸術大学非常勤講師
久米ひさ子 劇団うない団員

出演 沖縄県立芸術大学 琉球芸能専攻学生
配役 里之主：砂川博仁／太良：堀川裕貴／ウサ小：國場海里／主：中曽根律子
地謡 歌三線：波平宇宙・森田敬太／笛：住田千裕／太鼓：久米ひさ子

主催 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所

本講演会は、YouTubeで12月24日から配信します。
詳細は沖縄県立芸術大学芸術研究所ホームページまで
ホームページURL: <http://www.ken.okigeta.ac.jp/>

第9回
講演会

芸能から受け継ぐ「誇らしやしまくとぅば」

沖縄県立芸術大学しまくとぅばは実践教育プログラム開発事業

5-2 第10回 芸能から受け継ぐ「誇らしゃ しまくとぅば」「しまくとぅばと琉球舞踊」

収録日：令和4年3月23日（水） 14時～16時
会場：沖縄県立芸術大学 大合奏室（音楽棟4階）
講師：高嶺久枝 金城光子
演題：「しまくとぅばと琉球舞踊」

たかみね ひさえ
高嶺 久枝

琉球舞踊家・沖縄県立芸術大学琉球芸能専攻教授

- 1991年 沖縄タイムス芸術選賞琉球古典舞踊「第26回 大賞」受賞
- 1992年 沖縄タイムス伝統芸能選考会「琉球古典舞踊部門」選考委員
- 2005年 「第7回猿田彦大神と未来の精神文化〈研究・表現〉助成第一席」受賞
- 2006年 「1719年冊封使徐葆光が見た中秋宴」研究・復活公演
- 2009年 沖縄大学地域研究所研究員・沖縄国際大学南島文化研究所研究員
- 2015年 沖縄県立芸術大学音楽学部音楽科琉球芸能専攻教授就任
南風原町文化功労賞受賞
- 2017年 「沖縄県立芸術大学と南城市との包括的連携事業」企画・演出・出演
「渡嘉敷守良その芸風と特徴を考える芸能シンポジウム」コーディネーター
- 2019年 「琉球芸能専攻所蔵衣装・小道具・お宝展」企画 於：本学附属図書芸術資料館
「沖縄県立芸術大学 組踊上演300周年記念公演」企画・演出・出演
- 2022年 「飛び安里」関連事業「講演とシンポジウム」コーディネーター
「ウチナーグチ（沖縄語）練習テキスト」発刊

きんじょう みつこ
金城 光子

渡嘉敷流守藝の會三代目家元

- 2006年 沖縄県文化協会賞受賞
- 2009年 沖縄タイムス芸術選賞「奨励賞」受賞
- 2015年 沖縄県南部連合文化協会賞受賞
- 2019年 町制70周年記念与那原町文化協会文化功労賞受賞
- 2022年 沖縄タイムス芸術選賞「大賞」受賞

第1部：「瓦屋節」 踊り：金城光子
「かなーよう・泊高橋」 踊り：高嶺久枝

第2部：「しまくとぅばと琉球舞踊」
講師：高嶺久枝 金城光子

6 第7回・第8回「誇らしゃ しまくとぅば」講演会講演録

凡例

- ・本稿は令和2年度県芸大しまくとぅば実践教育事業／令和2(2020)年9月23日第7回講演会中曽根律子先生によるご講演(聞き手：比嘉いずみ：県芸大音楽学部准教授)・令和3(2021)年2月3日第8回の講演会(座談会形式)比嘉康春、比嘉聡の両先生による講話(司会進行ならびに聞き手：鈴木耕太：県芸大附属研究所准教授)の録音音声(録音音声を翻刻したものである)。
- ・講話にはここで言う「しまくとぅば」といわれる共通語が併用されているので、「しまくとぅば」についてはひらがなで表記することを基本におこなった。また漢字かな交じり文も主題の把握を容易にするために併用した。
- ・共通語の部分については、漢字かな交じり文で概ね表記した。
- ・講話中に出る氏名の明らかな方については漢字で表記した。(一部カタカナでの表記も)。
- ・講演中に出て来る外来語はカタカナで表記したが、「しまくとぅば化」した発音に合うように表記することを心掛けた。
- ・発語のあいだあいだで見られる「あー、えー、なー、うん、あんさーに」などの間投詞的な音声は、しまくとぅば講座の紙上再現という意味あいから、なるべく省略せずに表記することを心掛けた。ただし若干の漏れについてはご容赦ねがいたい。
- ・一部のしまくとぅばについては漢字で表記し、発音を()で括って初出にのみかなで表示した。以降の読みはおおむね同様であるが、異なった発音時にはその読みを同じように()で括りかなで表示した。なお、先にななを表示し、()の括りにそのうちな一読みに相当する漢字を補ったものもある。また、一部の発言には(注)を入れ、読者の理解を容易にするための説明を(注・)で施した。なお(補注・)は、関連すると思われる事項の説明のために挿入したもの。
- ・会話や伝聞の部分は「」で括って表記し、なるべく行頭に来るように改行処理をおこなった。発語や応答のあり方の把握を容易にするためである。
- ・文節の区切りとして句読点を用いたほかに、しまくとぅばを連続的に表記することによる語句の切り方の混乱を避けるため、一字分の空白□を間に入れた所もある。
- ・なお、特異な語彙や文節についても「」や『』で括って表示した。また、一部の特異な語彙については弁別を容易にするため“ ”で括って表記した。
- ・対話や講話の枠組みを作る為に各段の区切りとして1行の空きを入れた。(対話や講話自体は途切れることなく進行しているので、これは翻刻者の判断によるものである)。
- ・また各段の講話の展開にあわせ文節を目安に段中の改行処理も行っている。
- ・数字については稿本を横組みとしたために算用数字123・・・を用いた。
- ・現今では差別語として使用をはばかれるような不適切な語彙も、言語資料としての重要性を考慮し、削除せずにそのまま掲載することとした。

6-1 第7回 講話テープ起こし

翻刻：平良 徹也(県芸大芸術文化研究所共同研究員)
 沖縄語表記・分かち書きチェック：西岡 敏

——— 三線が演奏される中、中曽根律子、比嘉いずみの両先生が舞台中央に着席して対談が開始された ———

比嘉いずみ先生：県芸大音楽学部准教授(以下 比嘉：)

ぐすーよー ちゅー 拝(ううが)なびら。

「誇(ふく)らしゃ しまくとぅば講演会」、なまから、始(はじ)みてい いちゃびら。

今日の講師は、劇団うない2代目代表中曽根律子(なかそねりつこ)先生です。

律子先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

中曽根律子先生：劇団うない2代目代表(以下 中曽根：)

はいたい ぐすーよー、劇団うないぬ 中曽根律子やいびーれー、みーしっちょーてい(注 見知り置き) うたびみしえーびり。

比嘉：はい、えー、中曽根先生、あの一 うちなーぐちで私も質問が出来たらいいんですけど、まだ、うちなーぐち、勉強中で、質問は、やまとうぐちでさせて下さい。

あの一、まず初めに、えー、幕開けでご覧いただきました喜歌劇「楽しき朝」について、少し先生の方から、…、あっ、今日演じてくれたのは、えー団員の若手の、

中曽根：はい。

比嘉：えーっ、佐和田香織(さわだかおり)さん、古謝 渚(こじやなぎさ)さんですけど、え、このふたりが演じた「楽しき朝」の内容を、えーちょっと、ご紹介お願ひいたします。

中曽根：はい、えー うぬ げけー(注 劇は)、親泊興照(おやどまりこうしょう)さん…、あっ、先生ぬ 作られた、えっとう、「報い(むくい)」という…あの…

比嘉：「報得川」(むくいがわ)…—— 小声で反芻 ——

中曽根：あの「報得川良(むくいがーら)」の芝居のあの1ページなんですけれども、全然、芝居の、あぬー、劇と一関係なく、

比嘉：はい、

中曽根：この 場面びかー、あの一、とういあぎてい、あの一本立ち しみやーに、それでなま、琉球歌劇として、歌劇の ひとつ 寸劇んでい 言(い)やーに、なま、各劇団うとうてい さっとうる わざ やいびーぐとう、

比嘉：はい、

中曽根：うん、劇と一 関係、全然 ねーやびらん。

ウフッフー (少しはにかむように笑う)

比嘉：もう凄くあの一、若手が、あの一、うちなーぐちを流暢に、あの一、話しながら、又、歌いながら、えー、やってるな一 と。非常にあの一、見ていて頼もしく思うんですけど、どうですか、先生から見て、ご指導して、今の若い人たちのお芝居の雰囲気とか、あの一、発音とか、出来ていますか。

中曽根：あの一、特訓した その成果が、っんじと一いる ぐと一いびーん。

比嘉：うーんんん、

中曽根：ちゅーんで一 な一、な一 結構、前(め一)、家(や一)ううてい 稽古 そーしやかね一、あの一 だんだん、二人(たい)の 感情、あの一、っんじゅちかた一 出来(でいき)と一んでい、わんね一 思(うむ)と一いびーん。

比嘉：あーああ、

中曽根：ただ、な一く一てんぐわー んでい 言(い)るだきる やいびーる。…、

比嘉：はい、たいへんあの素晴らしい、あの一、内容だったと思います

中曽根：うん。

比嘉：はい。あの一、中曽根先生は、えーっとう、20代のころから乙姫劇団に入団されて、そして約50年あまり、えー、現在は劇団うないの、えー、2代目代表として、えー、活躍されてますが、えー、ここにいたるまでの、えー、乙姫から劇団うないまでの、その一中でのいろいろな、先生がこれまで経験した、ま一、あの一、エピソードですとか、あと、四大スターと呼ばれた、沖縄の、あの一、…

中曽根：はい、

比嘉：初代のあの一、スターの方々とか、ま一、またその中で、えーっ、沢山、いろんな方に出会ったり、いろんなことを経験されたと思うんですけど、ぜひそう言ったことを、少し、あの一、お話しお聞かせいただきたいと思います。

中曽根：だ一っ、わーが 入(い) っちからぬ 思い出んでい いしえー、あの一、ぬーがんでい 言一ねーや一。あぬ一、な一 だんだん 乙姫劇団が、あの一、テレビの 関係っし、だんだん こう 演劇んでい いる むぬ自体が、沈んで、しじでい 行ちゆる 時期 やいびーてーぐとう、んんん一 あんまり、わった一 先生(せんせー)の 間(はざま)先生、あんすか むの一、あんまり 言みそーらんたん。

比嘉：あーあ、そうなんですな。

中曽根：うん。いるいる 考(かんげー)てい、あの一、くった一んかい ていまぐわー とうらすしえー、ちゃんぐとう一っし、ちゃぬあた一い とうらしえー なま一、あぬ一 なまぬ 若者(わかむん)ぬちゃ一、うぬ 年代ぬ とういる 給料、ちゃぬあた一い やらんち、いっペー 気(き)に そーいびーたしが、あの一、なまぬ あんすとう、うっとうぬちゃ一んかい、うぬ 給料ぐとう一っし、分きてい とうらしぶさいびーしが、なま、テレビが あんぐとう一っし、普及するたみなかい、芝居ぬ だんだん う客(ちゃく)ぬ ひなてい、じぬん(注 金銭も) だ一 あの一、あんすか一 も一きゆーさん なと一る 事態 やいびーてーぐとう、で、しーじゃがた一、また、だんだん あぬ一、自分、どうぬ 1本立ちさ一に 仕事(しぐとう) そーいびーてーぐとう、

比嘉：はい、

中曽根：いっペー あぬ一、先生(せんせー)ぬん むちかさぬ いっペー で一じな 時代 やいびーてーぐとう、わった一とう うっとうぬ方(がた)とう うういしん、あぬ一、しーじゃ方(がた)が めんそーらん なていから、な一、ほとんど ちびから一 うっとう方(がた)と一る 暮(く)らちよ一いびーてーぐとう、うぬ 時分(じぶん)から一、もう、な一、先生(せんせー)の一、あの一、いっペー 哀(あわ)り そーいびーてーぐとう、うりが ちゃ一 肝(ちむ)に かかてい、んんん、なま ちきてい、「あぬ 間好子(はざまよしこ)が、うんぐとう一 なていや一。うんぐとう一 哀(あ)り っしや一」って、な一、わった一やね一、いっペー 肝(ちむ)ぐりさぬ、わんね一 特に、あぬ一、ううる うっとう方(がた)なかい、

しーじゃ やてーぐとう、一番 しーじゃ やいびーてーぐとう、あぬー、いるいる 先生(せんせい)かい、あぬー、話しーん さびたしが、まー、先生や 先生ぬ 考(かんげー)ぬ あていぬ くとぅどう やいびてーぐとう、あぬー、
「なーひん へーく 解散っし くいれー、先生 解散しえー しまびーてーるむんぬやー」んち、わんねー 言(い)やびたしが、

「いったーや 若さぐとう、仕事(しごと)ー とうめーいやっさん。」やいびー・・・、やしが
「うぬ しーじゃ方(がた)ー、仕事(しごと)ー、なまんち、仕事(しごと)ー なー とうめーららん 年齢ぬ やぐとうやー。ふんとー あんしん かんしん 哀(あわ)りすらー、なーくーてん 我慢さんちどう やんどーやー」と 言(い)ーたる、あぬ くとぅば 聞(ち)ち、なー、先生は もう、うんぐとうー、あんしまでい 哀(あわ)りそーてい、さんとー ならんがやーんでい 思(うむ)てい、あんすとう やいびーぐとう、どうーぬ 命(ぬち) かきとーてい 劇団 まむとーる っちゅぬ ううやびてい、うっとうぬちゃーんやー、むる、あん、うんぐとうーっし そーいびーてーぐとう、好子(よしこ)ーねーさのー、ほんとは、あの 前半や、いっぺー 大スター！。間好子！大スター やいびーたしが、後半に なていから、なー 哀(あわ)りっし、あぬ いっぺー 肝苦(ちむぐり)さいびーたん。それだけが、ちゃー 肝(ちむ)に かかとーん・・・(少し涙(なみだ)さみとなっていた)・・・なま ちきてい、

比嘉：はい、あの一、今回、先生からお借りした、あの一、旗揚げ公演50周年の、あの一、『記念誌』をこうあの一、見せていただきまして、ほんとに、あの一、間好子先生は、まっ、初代団長が上間郁子(うまいくこ)先生、そして2代目を、間好子先生がつかないで、ほんとに、あの一、沖縄芝居を心から愛していたって言うのと、あと、劇団員を家族のように思っていた、っていう所でほんとにもう、この、あの一、記念誌を見ながら、やっぱり、自然と涙が出る。

何故(なぜ)かと言ったら、ほんとに金儲けのためと言うよりも、みんながこう幸せになるためにって言うことを、常に意識されていたんだなー、と。

まあ一、劇団員が、そのあの一、まずは、あの一、暮らせるようにするって言うことと、あとは見に来るお客様が、やはり、お芝居を見て、すごく、あの一、心温まる、あの一、要するに、沖縄の芝居の中に、あの一、『演技の上手下手ではない、心を込めて演技をすれば、かならず、お客さんが分かって下さるものだ』と言うことを、常々(つねづね)、あの一、団員のみなさんにも指導していたって言うことを、読んでですね、あの一、ほんとにお芝居が好きで、だけど、いちばん大切にしたのは、そのお持て成しと言うんですか、見に来てくれるお客さんを、

中曽根：そう、

比嘉：いかに喜んでもらえるかって言うことと、その団員の中のみなさんに。お芝居を通して、やっぱり、人としてのあり方を教えて来たんだなって言うのが、それを見て、非常に感じたんでね。

その中でも、とつてもやっぱり、心に、あの一、ジーンと響いたのが、先生が大阪に、あの一、働きに二三年行かれて、で、戻って来た時に、あの一、えーことばに、かが、かがりん、ことばに、あの一、飢えていたって言うことばを、があって、そしてあの一、大阪から帰って来た時に、それとなくタクシーの運転手に、「ウチナーグチが聞けるのなんでもいいから、民謡でも、話しでもいいから聞かせてくれ」とすぐ言って、そのラジオで、沖縄のことばを聞いた時に、その沖縄の民謡を聞いた時に、まるで、母親のふところにいるような安心感をしみじみと感じた、って言うことばを見た時に、「あっ、ことばの力って、凄いなー」って、おかあさんに抱っこされているぐらいの温かさを感じたって言うのが、私は凄くビックリしたんですね。

そう言ったところで、ほんとにその「ことばの力」って言うんですかね、そう言うのを感じたんですけど、そう言うところを好子先生・・・、

中曽根：好子(よしこ)ーねーさんの一、あの一、けーてい めんそーちから、あぬ 車ぬ 中ううとーてい、「うちなーがーき(沖縄濁き)」。うちなーぬ くとぅばがーき。これ、「ががり」 じゃなくて、がーき。

比嘉：かーき？、乾いている。

中曽根：うちなーくとぅばぬ ぬーでいーから、あぬー、かーらちよーんって言う、

比嘉：はあーあ、

中曽根：欲しい！。

比嘉：はい、

中曽根：うちなーくとぅば、なー、ふーさんでい 言ちよーる 意味てー。うん、がーきー、してさ。

比嘉：がーきー、ですか。

中曽根：うん。

比嘉：はい、

中曽根：だから、うーんん、

比嘉：ことばによる濁き・・・

中曽根：タクシーぬ 運転手かい、

「にーさん。うちなー民謡 かきてい くいりー」

って言って、あぬー お願いさーい、民謡 聞(ち)ちやる ばすねー、あぬ、

「つくづく やっぱり、うちなーや まし やん。どうーぬ しまー まし やん」

って言うことを ありっし。

『これ、うぬまーまー っしえー ならん、ちゃーしん うちなーぬ くとぅば一、残さんとー ならん!』
でいーる、うぬ とうちに 決心っし、

『あの一、解散でいーる くと一 な一 かんげーらん。な一 一度(いちどう)、あの一、復帰っし んーだ
な!』

って言うのを、うぬ とうちに 決心し・・・、うん、

比嘉：ああーあ

中曽根：あの一 翌年(よくとし)から、あの一、リバイバル公演んでいる くとうんかい なてい、また 公演、
あぬ、する くとうんかい なてい、うりから 辞(や)みてい 行(つん)じゃる ちゆぬちゃん 集(あち)
までい いめんそーち、それで、だんだん だんだん 整(とうとうぬ)いてい、あんさーい、毎年(まいねん)
母の日や、な一、公演する くとうんかい 定(さだ)みてい、その間(あいだ)、あぬー えっと一、余興
たぬまりーね一、あま 行(い)ち くま 行(い)ち っし、こう言うふうにあんし そーてい、んーな
生活 そーいびーてーぐとう、くりが だんだん 重なり(の)常、だんだん 人数(にんずー)ん 多(お一)
く なや一い、あんさ一、安定っし いちよー あり そーいびーたしが、
やっぱり、あの一、な一 あの一、2000年 解散する 時期、完全に 閉団する じぶの一、な一、先生(せんせー)
ぬん 歳(とうし)ん とうてい めんそーちよーぐとう、あぬー ちよつと、もう 体(からだ)や な一
むたん なや一い、ちよつと 病気(さ一い)、しーゆーさん なてい、結局 もう やむを得なく、解散する
くとうんかい なと一いびーしが、うん。

とにかく、先生の

「ちゃーしん うちな一くとうば一 残(ぬく)さんと一 ならん」でい、

それ、ちゃー うれ一 言(ちよ一いびーたん。

比嘉：はい。

中曽根：うん、んん。

比嘉：えーとっ、そのまた、印象的なひとつに、あの一、この母の日公演ですとか、公演があるたびに、舞台あい
さつを方言ですとていことを意識されて、あの一、しないとイケない。で、そして、その舞台あいさつを方
言ですることによって、それを聞いたお客さんが、ぜひ、うちの公民館で、あの一、先生のうちな一ぐちの講座
をして欲しいとか、いろんな、ま一、コミュニティーで、先生その頼まれたとていことを、あの一、書かれてあつ
たんですけど、

で、その時の先生は、あの一、若い人に、え一、セリフをなんか覚え、セリフでもアクセントが違(う)ところでもあつ
てでも、そう言(つ)たところはどんどんしゃべっているうちに、あの一、直(な)せるし、

「先(ま)ずは話(わ)すことが大切(たいせつ)だ」って言うところを、あの一、話(わ)されていようなんですけど、そこらへんの、先生、
舞台あいさつでのなんか思い出とか、講演会(コウエンカイ)の思い出とか、なんかございますか。

——注 ここで講演会と後援会との混乱が生じ、中曽根先生は後援会のことを話すことになる——

中曽根：後援会。あの一 時分(ときぶん)は、あの一、か一ま 後半(ごはん) なていから 後援会(ごえんかい)や 出来(でき)やびたん。2代目団
長(だいにだん) なていから、間(ま)先生(せんせい)が 2代目団長(だいにだん) 継(つ)ちから、あの一 後援会(ごえんかい)んでい いし、あぬ、出来上(できあ)
が)いびーたしが、その 時(とうち)に、あの一、いちよう もう、後援会(ごえんかい)の みなさんかいん いっぺー
世話(せわ) なてい、あの一 やいびーたしが、

だけど やしが、いつの間(ま)にか、だんだん あの一、歳(とうし) とうてい めんせーぐとう、後援会(ごえんかい)の 方々
(かたがた)ん 何年(なんねん)何年(なんねん) しーね一、だんだん ちゆい ひち たい ひち(注 一人退(ひ)き二人
退(ひ)き) っし、あの一 だんだん、心細(こま)く なてい ちよーびたしが、間(ま)先生(せんせい) (はざませんせー)の一、ちゃー
後援会(ごえんかい)の みなさんかいや、あの一、いっぺー もう あの一、な一 ちぶるん 上(あ)がらんあた一い、
ちゃー 「ありがとうございませう。ありがとうございませう」る そーいびーてーぐとう、あんで、後輩(こうはい)
た一や、うっとう方(がた)一、また、先生(せんせい) かわいに、あの一 接待(せつたい)とていか、接待
んでいちゃんてーん、謂(い)一ぬ 接待(せつたい)や あらんど一。

比嘉：ウフッフッフー

中曽根：後援会(ごえんかい)のみなさんがいらっしやる時は、お茶(ちや)を・・・差し上げたりや・・・、

比嘉：お持(も)て成(な)し・・・、

中曽根：そう、お持(も)て成(な)しとていかや、うんぐとていそーいびーたしが、

比嘉：はい。

中曽根：あんすか一、先生の また 後援会(ごえんかい)は あの一、ぬーんでい 言(い)やびーがや一、あの一 もう、どう一
ぬ 体(からだ)ぬ 少しづつ、くーてんぐわー な一 くーてんぐわー な一、悪(わる)く なてい 行(い)
ちやぐとてい、どうく 出席(しゅっせき)さん なと一いびーたん、あとうからは・・・うん。

比嘉：これは先生、ファン(ファン)のみなさんの講演会(講演会)と別に、

中曽根：あれまた別(べつ)、

比嘉：あの一地域の、

中曽根：そう。

比嘉：地域のいろんな老人会(ろうじんかい)だったり、婦人会(ふじんかい)だったり、

中曽根：あの一 うれ一 あらんどとていさ一に、後援会(ごえんかい)んでい いせ一、あの一 みんな 有志(ゆうし)の 方々(かたがた) やい
びーたん。

比嘉：はい。

中曽根：うん、会社(かいしゃ)社長(しゃちょう)とか、会長(かいちょう)とか、そう言う方々(かたがた)が、

比嘉：はっ、はい(補注 ここで、コウエンカイが後援会(ごえんかい)のことだと気付(きづ)く)

中曽根：あの一、あの一、そーいびーてーぐとてい、うれ一 (補注 比嘉(ひが)先生の言(い)う講演会(講演会)は)まーんくいーかいぬ
講演会(講演会) やいびーたしが、(補注 中曽根(なかそね)先生(せんせい)語(こと)るところの後援会(ごえんかい)は)博多(はくた) (注 福岡(ふくおか)県(けん))の 井筒屋(いづつや)の 社長(しゃちょう)、

あんちゅが、あぬー、後援会長 そーいびーたんよー。井筒屋ぬ 名前、あー、わったーや 会長ぬ 名前
聞(ち)かさらんたしが、博多井筒屋の、あの一、会長が、後援会ぬ 会長 しみそーち、まー、うぬ、ま
ぎっちゅ(注 大物) やみせーたん、んーな。

比嘉：ほうーう

中曽根：うれー うれー また、芝居の 轟真(ひいき)は 轟真。轟真や 轟真で、あの一 サングワッチーぬちゃー
しーやー。その とうちぬー、また 那覇劇場ううとーてい、えつとー(補注 朝の)11時ごろから 集(あち)
まやーに、むる あぬー 轟真ぬ 方々が、ぬーやーくいーやー 持(む)ち寄(ゆ)てい 集まやーい、わっ
たーや また、6時から、あぬー だー、芝居や 6時 7時からる、うぬ とうちえー 始(はじ)まいび
てーぐとう、んかせー 7時とうか、8時近く なていからる 始まいたんよー。だから、うぬ えーだー、
あちょーいびーぐとう、わったーや また あぬー、お客さん 桁形(ますがた)んかい いいーち めんそ
やーに、いろいろ 話しー、弁当ん あきやー あきやー そーてい 話し。わったーや また、舞台ううと
てい、あぬ、幾通りかぬ 舞踊や 踊(うどう)てい 御目(うみ)掛(か)きてい、あぬー、で、時間 ないぬー、
「なー 時間 やいびーぐとう、化粧っし ちゃーびらううー」んでい 言やーに、んーな 退(ひ)ちゃーに
化粧しーが。うぬ えーだー、また 轟真ぬ 方々、弁当(べんと) うさがてい 持(む)っち めんそ
ちよーる 弁当。・・・

で、轟真や 轟真ぬ、あつ、後援・・・サングワッチ・・・ぬちゃーしー でいしが あてい、あぬ あれー
また、別(びち)に。だから また、後援会や 後援会の しんしー(先生)方と、あの一、年に 一度は
後援ぬ、あぬ 集(あち)までい、あの一、う持(む)てい成し すんとか、そう 言う、うんぐとうーが あ
いびーてーぐとうてー、うん。

比嘉：あーああ、

中曽根：なまー、現在や あぬー、まー、劇団うないぬ むんに なてい、うぬ ほーに 関(かか)わい かかと
いびーしが、やいびーぐとう、うぬ とうちぬー、あの一 もう、舞台(ぶだい)が はねーち あちゃーに、な、
芝居が 始(はじ)まいぬー、なー う客(きゃこ)ー すぐ 轟真ぬ 方々(かたがた)ー、ぬちゃーしー そ
みしえーる 轟真ぬ 方々、米(くみ)ん 投(な)ぎーい、すぐ 反物(たんむぬ)ん ぼんない 投げーい、

比嘉：ハッハッハー

中曽根：とーっ、花(はな 注 おひねりや金銭)ん 投げーい、もう 食物(かみむぬ)ん ぬーやーくいーや
すぐ 投げーぐとう、いっぺー あぬー 食事んかいや、あぬ、くとうかかん(事欠かん) とうち やいび
たん。

比嘉：あつ、困らない・・・。

中曽根：轟真ぬ 方々が うんぐとうーっし 持(む)ち寄(ゆ)してい めんせーぐとう、あぬ、いっぺー ありがた
いことに、あんすぐとう 食(か)むしなかいや ぬーん しわー ねーびらんたしが、
だんだん なー、芝居ぬ うとうるいていからる、後援、あぬー、ぬちゃーしーん さん なてい、うん。
だんだん 時代がやー、変(か)わてい 行(い)ちーぬー、うんぐとうー なやーに、それで いつの間にか、
なー、っんじー(注 出張)地方巡業とうかが、多(お)く なてい ちよーる ちむえーてー、うん。

比嘉：凄(さい)いね、あの一、まあ、先生。あの一、乙姫劇団のころは、ほんとに凄(さい)いあの一、企業の方々がバックアップ
をされて、あの一、支えられたって言うのは、非常によく聞(き)くんですけど、やっぱりそう言う人(ひと)たちを、あの一、
魅(め)了(りょう)する、もうぜひこの劇団、あの一、乙姫劇団を、あの一、支えて行(い)こうと言うふう(ふう)に、あの一、思(おも)わせるようなこと
て言うのは、えー、一番(いちばん)のこの要因(よきん)と言うのは、どう言(い)ったかた、・・・こと、

中曽根：あれはねー、やっぱりあの一、あの一四大スターが うういぬー まし やるばーよー。

比嘉：ああ、

中曽根：やっぱり、花形(はながた)が ううらん なてい、花形(はながた)が ううらん なてい 行(い)ちーぬー、結局、
あぬ、下(しも)っ端(は)ぬ うぬ うつとうぬちゃーだけ ないさやー。あぬー、先輩(せんぱい)たー 芝居 見(ん)ーちよ
ぐとう、物足(もの)たらないんでい いしが あるばーてー。やっぱり 力強(ちから)さが ないって 言うの、ある ば
てーやー。あの一、ずーっと 見(み)ーち めんそーちよーる う客(きゃく)に対して、先輩(せんぱい)方(かた) 分(わ)かいみせ
る ちゅぬちゃーが、
やいびーぐとう、あぬー、それに対して、あの一、それに対してと 言(い)ーしやかぬー、あの一、かん
し かんし っし しーじゃ方が ちゅい 退(ひ)ち、ちゅい 退(ひ)ち っし 行(い)ちゅる うちなかい、
うん、結局は、あぬー、うぬ 後援会(ごえんかい)の 方々(かたがた) 仕事(しごと)の 関係(かんけい)で ちゅい 退(ひ)ち ちゅい 退(ひ)ち して、
最終(さいしゅう)補注(ほしゆ) 最終(さいしゅう)公演(こうえん)に) めんそーやーに、いつの間にか しり こう なとーいびーん。

比嘉：あつ、時代(じだい)の中で、ほんとにあの一・・・、

中曽根：うれー なー 時代(じだい)の流れ(ながれ) やぐとう、仕方(しかた)ー ならん。

比嘉：うーんん。

中曽根：ないびらん、ちゃーしん。

比嘉：あの一、船越義彰(ふねごしよしあき)先生(せんせい)がこの『50年誌(ねんし)』に書(か)かれた時に、乙姫(おとぎめ)劇団(げくだん)の魅力(めいり)として、

「女性(にょせい)だけの劇団(げくだん)である」って言うのと、あと、

「舞踊(まひやく)の基本(きほん)がみんなしっかり出来(でき)ていた」って言うのと、

「いちように歌(うた)が歌(うた)えた」って言うのと、

「ほとんどが十代(じゅうだい)後半(こうはん)の女性(にょせい)だった」。でー、あの一、まー、えー、

「舞台(ぶたい)の演技(げんぎ)は、ほんとにすぐ出来(でき)るものではない」。

「若い女性(わかいにょせい)集団(しゅうだん)の歌(うた)と踊(おど)りが絢爛(けんらん)豪華(ごうか)で、舞台(ぶたい)を魅(め)了(りょう)した」と言うことばがあるように、

中曽根：はいはい。

比嘉：その当時のほんとにみなさんのもう、あのー、活力 生きて行く上での、もうこれを見たら、あー、ほんとにあのー、日ごろの、えー、仕事がかう捗(はかど)るとか、頑張れるって言うぐらい、もう、この舞台からもうエネルギーですとか、そう言ったのが、すごくあった舞台だったんだなーって、言うのを感じました。

中曽根：あのー わーが、乙姫劇団 初(はじ)みてい 見(ん)ちゃせー、あのー、中学ぬ、中学 まだ 1、2年のころかなー。あつ、中学1年、そのあと、中学か 高校に 懸(か)かるころの 間 だった。あのー 乙姫劇団でい いし、初(はじ)みてい 本部(注 旧日本部村渡久地)んかい ちゃーに、本部劇場ううてい 上演さる ばーに、初みてい 見(ん)ーち、もう、うぬ 芝居ぬ 美しさ、素晴らしさんかい、わんねー なー、くくる(心)ひ(惹)かさって、うんぐとーる 美(ちゆ)らさる 芝居ん あがやー。あぬー、からじぬ いっぺー 美らさたるばーよー。

比嘉：ああーあ、からじ!

中曽根：なー、からじ! あれ、すぐ、あれが印象的で、からじぬ 毛(き)ー、ちとうむ 落(う)ていらん、んーなつ、むる。女優さんたー・・・、(補注 ちとうむ/ちつとも)

比嘉：あれだけ演技やっても、

中曽根：うん、全然 落(う)ていらんばーよー、からじぬ。りっぱぐわー すぐ ピタッとう くっ付いて たっちかやーに。あのー うみないび(王女)、「王女御殿(うみないびうどうん)」 やいびーたん、わったーが、初みてい 見(ん)ーちちゃせー、

比嘉：はい。幻想劇の、

中曽根：うん、うぬとうちぬ 王女(うみないび)や うみないび(王女)ぬ からじ まぎまぎーとう 結(ゆ)ーてい、そして、あの あんさーに、腰元(こしもと)ぬちゃーや また、あのー くーてん あの うみんぐわみたい な からじぐわー 結(ゆ)ーやーに、あんさー、全部 身分ぬ 通りぬ 服装、からじぬ 結び方、化粧ぬ やり方、むる あるばーよー。

比嘉：あつ、

中曽根：これんかい わんねー、なー、魅力、みーひかさって(補注 魅了されて)、あんし 美(ちゆ)らさる 芝居ぬ あてーさやーんでい 思てい、うりからや ずーっと、乙姫劇団ぬ くとー 頭(あたま)んかい あたん。

やしが、高校 卒業して 那覇んかい っんじてい ちゃーに 仕事(しごと)する くとう なていから、那覇劇場んかい ちょーんでいーぬ 分(わ)かてい、あぬー、すぐ 仕事ん あわていてい、うぬ とうちまでー 山形屋(やまがたや)んかい 勤(ちとう)みとーいてーびーぐと、あぬ 6時に 終わいぬー、すぐ あわていーはーていーっし しこーやーに、芝居 見(ん)ーじーが んち、那覇劇場んかい。

あんしぬー 通(か)ゆやー 通ゆやー そーる うちに、あぬー、ちゃーしん 見る、見(ん)ーじゅるだき せー、肝(ちむ)ぬ ふがん なやーに、しー欲(ぶ)しく なやーい、

比嘉：抑えられなかった。

中曽根：んんん、なー 我慢 ならん なやーに、あぬー、へーり(這い入り)んち 行(っん)じゃしが、乙姫劇団かい。もう、あぬ とうちぬ 乙姫劇団ぬ 美らさー、ぬーでいん 言(ら)らんあたい・・・、

比嘉：はあーあ、

中曽根：ずーと ちぶるんかい、残(ぬく)とーたんよー。

比嘉：ふうーん。

中曽根：あんすぐと、あぬー 入(い) っち、入(っち) 行(っん)じゃーに、まあ、ちょーどう わーが 入(っち) 行(っん)じゃる じぶのー、あのー、あのー 2、3(にさん)、先輩ぬか、ちゃーん めんしえーたしがてー、あぬー、
「ぬーんち なま時分(じぶん)から 入(っち) ちゆーがやー」と言う ふーじーぬ 言(方)すし、わね 聞(ち) ちょーいびーたるばーよー。

比嘉：はあーあ、

中曽根：あのー、陰口(いんぐち)みたいにして、

比嘉：普通(普通)はだいたい、10代の早い時期からやってるのに、

中曽根：えーと、わんねー ぬーちん 大体 24才(にじゅうし) ないてーぐと 入(い)ーせー、

「なま時分から、入(っち) ちゆーがやー」んでい、また、

「あい、ぬーんち なま時分から 入(い)ーがやー」んでい 思(うむ)いたしが、考(かんげ)ーたぐとよー、あとうから 考(かんげ)ーたぐと、うぬ 時分から、なー だんだん テレビぬ 影響ぬ あてーぐと、あぬー、あんさーに、なー うぬ沈んで、

「しじでい 行(い)ちゆる とうちから、入(っち) ちゆーがやー」んでい 言(し)が、あとうから 分(か)たるばーよー、あん 言(ち)よーる ちむえーぬ、

比嘉：ああ、下火(げか)になっていたんですね。劇団は・・・、

中曽根：うんうん。で、好子(こうし)ぬーさぬん、また うぬ じぶのー、あのー 劇場(げきやう)かい 寝泊(ねどまり) しえー うういびらんたん。

比嘉：ああ、

中曽根：うん、あのー、あとうからは 別(びち)かい 家(や) 借(か)やーに、別(びち)から 通(かゆ)てい、時間 ないぬー 帰(け)てい、通(かゆ)てい めんしえーたん。劇場(げきやう)んかい。

比嘉：最初のころはみんなもう劇場で、一緒に共同生活、

中曽根：うんうんうん。

比嘉：釜(かま)の飯(い)を食べていた。

中曽根：そうそう、うん、

比嘉：だけど、もうあの一まっ、途中から・・・

中曽根：あの一、うれー やーふん、あぬー、うりんかい、こっち、っんまううとーてー 言らんしがてー、好子ねーさんかいや 好子ねーさんぬ こう(補注 事情があり)別(べつ)から 通(かゆ)てい めんせーんでい 言(い)る、あぬ、劇場から わかりとーる あれば、あの一 わけぬ あていよー、うん。くれー 差し控え させて くいみそーり・・・。

比嘉：はい、ちょっとそこは、あの一、はい。

中曽根：あんすくとう、好子ねーさん 時間 ないねー、帰(け)ーてい 行(い) っち めんせーたるばーよー。あんすくとう、あぬー、わったー あぬー、えー 先輩、2、3 先輩ぬ ちゅぬちゃー、「なまから あんし、入っち ちゅーるやー？」 「なまぐる時分から 入っち ちゅーがやー？」んち、

比嘉：律子先生が、

中曽根：あとから 分かいはびたん、わね、

比嘉：あーああ、

中曽根：ぬーんでいち・・・うぬよーな 事情ぬ あている、あん 言ーさやー・・・、

比嘉：うーんん、

中曽根：あんしん やっぱり、あぬ 好き やぐとう、ま、哀(あわ)りとは 思(うむ)わんたん。ぬーぬ 哀りや 思(う)まーん。もう ただ、芝居しー 都合(ちご)どう やる と言って、芝居が しー欲(ぶ)さ しー欲さぬ ふしがらん。

やしが 巡業も、な一、哀りっし、くぬ 公演 今日(ちゅー) 終(う)わいさやー。今日 終わいねー、すぐ 荷物(にむち) くぐ(括)にーんち、な一 すぐ、な一めーめーぬ むん、むる 舞台衣装から、どうーぬ 荷物 むる、あぬー、括(くぐ)にーんちゃーに、うぬ 夜(ゆる)ううとーてい 移動 やたるばーよー。

比嘉：うーんん、

中曽根：移動 やていん、あぬ 先方の 劇場んかい 行(っん)じゃーに、あま 行(い)ちーねー また、掃除(そーじ)。劇場ぬ 掃除。楽屋から 舞台から、全部 掃除。

比嘉：はい。

中曽根：だー うんぐとうーっし やていん、な一、うていちちゆる(落ち着く) じぶの一、な一、3時 4時(補注 午前)ごろ ないぐとう、うぬ 時分から、んーな すぐ 化粧 落(う)とうちやい。むぬん 明け方から むぬん 食(か)むたんよー・・・

比嘉：はあーあ、

中曽根：うん。だから、うんぐとうー 生活ぬ 移動する たんびに、うぬよーな 生活ぬ 続(ちじ)ちよーたしが、あぬー、好きだ ぬーん やれー、ぬーん 哀(あわ)りんでー 思(う)まーんたん、やしが。な一 もう 楽しい。だー あの一、旅んでいし っしえー なんだどう いくとう、な一 わんにん。あぬー やんばる(山原) やぐとう、ずーっと 山原んかい ううとーぐい、な一ふあ(那覇)んかい 高校 卒業して 出(っん)じてい っち(来)から一、な一ふあ 那覇どう 知(し)っちよーる。あんしえー、旅んでいしえー、むる まじ、行(っん)じえー んーだんぐとう、うんぐとうー 巡業 巡業っし、けーてー 楽(たぬ)しみ やたるばーよー、わんとうっしや・・・

比嘉：アッハッハッハー

中曽根：まーんくい 見(ん)ーち 眺(なが)みてい、うん。あんぐとうー やてーぐとう、あぬー あんし、うんぐとうーる 夜中(ゆなか)から 荷物(にもつ) かたみてい 移動っし、また あまんじ 掃除っしとうか、うんぐとうーや 全然 ぬーん 苦(く)とも ぬーんでいん 思(う)まーびらんたん。うん。

あの一、好子ねーさんが ううらんねー、劇場、な一 寂(さび)さぬ。な一、うぬ とうちから一、な一 後輩た一、うっとうぬちゃーびけーる、ううぐとう、好子ねーさんの一、な一 あの一 親分(おやぶん)てー。あの一、つくわでーそー(補注 子の大将) なやーに、

比嘉：ウッフッフッフー

中曽根：親分 やぐとう、好子・・・、雷(かんない)ぬ 鳴(な)いさやー、すぐ クワラクワラ すさやー、っんまんかい いいちよーる うっとうぬちゃー んーな、すぐ、クワラっし する とうち、ウワーツとう、すぐ 家具ん ぬんくい とうびくいー(跳び越え) 好子ねーさん めーかい まーてい、うんぐとうー し よ、うぬちゅが ううらんねーよー、あの一 恐(うとうる)さんてい いしが あたん。やしが、

比嘉：ああー、女性でありながら、みんなを守るボディガードも一人で、あの一、団長がやった。

中曽根：そう、好子ねーさんが ううらんねーよー、むる しかさる(補注 臆病がちになる)ばーてー。あんすくとう、

比嘉：はああー、

中曽根：あんすくとう、あぬー、いやいや 私が、わーが 初(はじ)みてい、乙姫んかい 入(い) っち、翌年(よくとし)、あつとー 1965年、64年に 入っちよーぐとう、65年に 初みてい、あぬー 先島公演、宮古(みやこ) 八重山(やえやま)ぬ 公演、うぬ とうちに 初みてい 旅 やくとう。うぬ とうちに、あぬー、宮古や、あぬー、ぬーん あいびらんたしが、あぬー、けーてー(却って) いいー 島 やっさーって、言う 感じだったけど、別(べつ)に ぬーん あらん。八重山 行(っん)じゃる ばーに、あの一、あの一、っえ、遊び人が 多(うふ)さぬ、

比嘉：ああー、

中曽根：うん、八重山んかい っち(来)あとう、荷物(にむち)、あぬ、トラックぬ 荷物 運(はく)ばんち、来(ちゃ)る とうちから、な一 すぐ 囲(かく)まーち、若い にせーたーが 囲まーち、みーちき(睨)とー

るばーよー。

あんすぐとう、わったー マーナー、マーナー大将(てーそー)や、初代会長は あぬー、マーナーんでき
わったー 言ーてーぐとう、

「まーん 見(ん) ーだんろー、知らんふーなー っしよー」

「まーん 見(ん) ーだんぐとう、すぐ 荷物(にむち) へーく 運(はく)ペー」

と言って、それで、わったーん すぐ、ぬーが やら 分からんしが、あわていーはーていー 荷物 かた
みやーに、劇場んかい 荷物 運ばー 運ばー っし、やたしが、うったーが、あの一、わったーが 荷物
運でいから、くんどー、楽屋ぬ くさーむていーんかい、あの一、台所、通用門、くまー ぬーんくい
分からん 屯(たむろ)そーたぐとう、うどうるちゃーに、あぬー、マーナーが 下(しちや)んかい、あんさー
に、あの一、トシおばさんでい 言みしえーる っちゆぬ、あの一 事務会計 する、めんしえーる っちゆ、
うんちゆ 当ててい、あぬ、好子ねーさん あぬー 下(しちや)んかい いいちよーてい、あぬー 構(か
めー)とーるばーてー。

比嘉：うん

中曽根：「うったーが っんまかい ぬー しーが ちゆーがやー」んでき 言やーによー、

あんさーに、あの一、(以下は男、好子で会話表示)

男「はいさい」んでき 言ちやぐとう、

好子ねーさんが、

好子「ぬーが、いったー っんまかい ぬー しーが ちやが」って言いながら、

男「おおをー あぬー ぬーん あいびらんしがてー」・・・、

好子「いったーや、あぬー、っんまー ぬーんち 分かとーみ？ っんまー、あぬー、芝居ぬ 楽屋どう
やんどー！」

男「おー、分かとーいびーんどー」

好子「分かとーらやー、わらばーたーん 多(うふ)さる あぐとう、なま わらばーたーる やぐとう し
かむとーん。しかれー ならんぐとう 帰(け) ーてい とうらしえー！」

って言ったぐとう

男「うーんん、ぬーん さびらんろー」って、

好子「ぬーん さびらんていん いったーが、っんまから うろろろ しーねー、うったーや しかむぐとう、
わったーや っちゆぬ っくわ(子) あじかとーぐとう、っちゆぬ いいなぐんぐわる あじかとーぐとう
やー、うったーんかい むしむぬくとうぬ あいねー、あぬー 親(うや)に対して 申し訳(もーしわけ) ー
ねーらんぐとう、なー、っんまから 帰(け) ーてい、なー、にーさぐとう 帰(け) ーてい とうらしえー！」
って言って 追っ払って、あんすぐとう、やしが、うったー また、なーだ 従(したが)わん、

男「うー、うー」んでき 言やーま、帰(け) ーいたんよー。

帰ーていから、うぬ 翌日(よくじつ)、親分(おやぶん)が めんそーやーに、あぬー、わび(詫び) しーが
ちよーたん、うん

比嘉：はーあー、

中曽根：「ちぬー、うったーが、わったー むんぬ ちゃーに、いっペー ぐぶりー ないびてい、なー 言(い) ー
ちきてびーぐとう、二度(にどう)とう さびらんぐとう、なー・・・」

ちゃーんとう 礼儀正しく、親分や あぬ、詫びっし めんそーやーに、で、たまーに、

「はいさい」

「はいさい」

んでき 言やーに、あの一 マーナーたーとう ゆんたくーぐわー しーが めんしえーたん。うぬ とう
ちからー なー、親分とう、い、あぬ、ちゃーに 見(ん)じーが、たまーに、めんしえーたんよー。やくとう、
好子ねーさんの一、すぐ、うんぐとうー むの一、すぐ かんしっし、めーだち(前立ち) すたんよー。

比嘉：—— 笑いで、受けている ——

中曽根：要するに、前(めー)んかい、立(た)ちゃーにやー、

「ぬーが、ぬーしーが ちやが！」 すぐ・・・

比嘉：お芝居、お芝居のあれが、生きてるんですね、

中曽根：あんすぐとう、好子ねーさん、なー、んーなが 頼(たる)がきーるばーてー、

比嘉：あーあー、

中曽根：頼りにするわけさ。アッハッハッハ

比嘉：凄い！・・・

中曽根：凄いよー、だから。いっペー 凄い っちゆ やたん。

比嘉：ふうーんん。

中曽根：あの一、字(じー)ぬ 凄く 達筆 やたん、また。字(じー)ん。字(じー)ぬ 達筆 やぐとうやー、
あの一、うれー たーがが 言(い)みそーちゃら 分かいびらんしが、好子ねーさん 字(じー) 見(ん)
じやーにやー、

「はっさみよー、っちゆ うしえー 字(じー) やっさー」んでき、

比嘉：っちゆ うしえー、うしえーる 字(じー)、

中曽根：「っちゆ、うしえーてい」んできやー、うぬ 字(じー) 見(ん)じやーに、

比嘉：あんまり上等すぎて、

中曽根：言うぐらいだったからね。そう、・・・

比嘉：もう見ている人が、ちょっとこう ひるむって言う感じなんですね。

中曽根：凄く 達筆 やいびーたん。

比嘉：へーえー、

中曽根：それに、勘が、速い！。

比嘉：はあーっ、

中曽根：すぐ覚えるんです！。見てすぐ、もの覚える。

比嘉：ほうー、

中曽根：舞踊でも。一二回踊ったらもうすぐ覚えているわけ。

比嘉：あ、はあー、

中曽根：うんぐとうー っちゅ。あんすぐとうる 舞台(ぶだい)ん、うんちゅが する わざー、あの一 もう 仇(かたき)であろうと、喜劇であろうと、二枚目(にまいめ) やていん、あの とうすいぬ 役 やていん、ぬー やていん、もう、さん(注 不為の意)でいちゃー ねーらん、あらゆる わざ、むーる、あの一、こなち 行(い)ちゅん。

こなち 行ちゅんでいねー、ぐぶりー やいびーしが、な一、ぬー やていん さびてーぐとう、わった一、わんねー な一 また、好子ねーさん、うぬ わざ 見(ん)じゃーに、ちゃー みーちきーさーに、あんすぐとう うぬ とうちに 好子ねーさん、あの一、好子、間(はざま)団長2代目や、好子ねーさん、うぬ とうちまで 2代目 継ぐまでは、あの わった一、わんねー

「ねーさん ねーさん」とうしか、わった一 っしえー ううらんぐとう、

「好子ねーさん 好子ねーさん」

好子(よしこ)ーねーさん・道子(みちこ)ーねーさん・初枝(はつえ)ーねーさん・大城光子(おおしろみつこ)ーねーさん、この 四大スターが、あの、する くとう、ちゃー すぐ、あぬー 舞台ううてい、みーちきとーたんよー。むる 特長ぬ あぐとう、あぬ、セリフぬ 使い方から 動き方、っんじゅち方から むる 特長が ある。個性ぬ あやーに、

比嘉：うん。

中曽根：だから、くりびけー ずーっと みーちきとーたんよー、わんねー。

やいびーぐとう、うんちゅたーが、あぬー すばうとーてい、わんねー、見(ん)ーちゃる 御陰(うかじ)に、ほーげぬん(注 方言も) ちか(使)ゆーすい。

比嘉：ああーあ、

中曽根：うん。こう セリフん 言ーゆーする くとう なてい、お陰で、うぬ たみ、お陰でどう、わんねー なままでい 生(い)ちちょーいびーる。

比嘉：はあーあ、

中曽根：んへっ、“うない”とうっし、

比嘉：見(み)ーなり 聞(ち)ちなり(注 なり：慣れ) って言う、あのことば通りに、最初から流暢にウチナーグチが、(補注 なれー/習い)

中曽根：んーんんー、

比嘉：出来たわけではない。

中曽根：ないる むの一 あらん。第一(だいいち) わんねー 山原(やんばる)る やっさい。やぐとう 山原くとう ば すたんよー。わんねー 山原くとうば すてーぐとう、ちゃー、あぬー、しーじゃ方(がた)んでい いしやかねー、な一ひん 年配ぬ 年上(とうしうい)の 衣装係の おばさんとか、あの、三味線 弾(ひ)ちゅる おばさんとか、うんちゅたーがよー

「うれー 山原くとうば っしやー、律ちゃんの一。」ちゃー 言ーしや 聞(ち)ちえー うういしが、あぬー、うり 聞(ち)ちゃーに ひがむんでい いしえー 絶対 さんばーよー。また、

比嘉：あーあ、

中曽根：アハッ、さんぐとう さん、あの 島静子(しましずこ)ねーさん。先輩、

比嘉：はい、

中曽根：引っ張ってい 行(っん)じゃーに、劇場 自由劇場(補注 あげぼの劇場)ぬ くさー(後方)や、あぬ、ぬーがら 草(くさ)っ原(ばら)ぐわー ふーじー なんとーたん。

比嘉：うん、広っぱ、はい。

中曽根：そして、みじ(水)ぬ くーてーんぐわー 浮(う)かどーたぐとう、水草(みずぐさ)ん あやーい。それで、かーま、くま 離(はな)りてい あがたんかいる 家(や)ん あてーぐとう、で、くまうとーてい あびていん、ぬーん あらんでーぐとう、わんねー、シイちゃん(静子)ねーさん 引っ張ってい 行(っん)じゃーに、

「シイちゃんねーさん セリフ 習(なら)ーち くいみそーれー」

って言って、あんちゅから 方言、あぬ、イントネーションとうか 習やー 習やー っし、そーいびーしが。あぬ だ一、初みてい ある程度 わざ こなする くとう なてい、初みてい あの一、な一。「今帰仁由来記(なちじんゆれーち)」 って言う 劇ぬ あてい、うり 3部作 やたん よーふん。3部作 あてい、あの一、くりぬ 中(なか)に 仇(かたき)が、初みてい 仇(かたき) しみらさりやーに、仇(かたき) しみらさったる ばーに、あぬ一、初枝ねーさんとう、あの一、玉城初子(たまきはつこ)ねーさんが あの一、夫婦で、うぬ 城(ぐ)しく)から 逃(ひん)ぎてい 行ちゅんでい 言やーに、綱(ちな) うりてい 行ちゅる 場面ぬ あるばーてー。だから、うり みーちきやーに、んー あぬ、

「逃(ひん)ぎれー 逃(ぬ)がすんでいる 思(うむ)とーるい」 ってー セリフ、セリフぬ ばーに、あぬー トウジぬ 名(な)ー 呼(ゆ)ぶん。

「マヂルー（真鶴）」って 言って、「マヂルー」って 言って 呼(ゆ)ぶし やしが、
うぬ、「マヂルー」んでいし 呼(ゆ)ぶし、
「マディドゥー」

比嘉：ハッハッハー（小さく笑う）、なんですか？

中曽根：しば(舌) かんちらし(注 舌を噛みそう)、
「マディドゥー」

「マヂルー」んでい 言(い)ーゆーさん。

「マディドゥー」。

「マディドゥー」んでい 言(い)ーやーにやー、

あんしん なー 笑(わら)ーらん。笑てー ならんどー。ふんとー 真剣(しんけん)、なー 初みていぬ
仇役(かたきやく) やくとう、うん。

「マディドゥー 逃(ぬ)ぎれー 逃(ぬ)がすんでいる 思(うむ)とーるい」と言ってや、すぐ 綱(ちな)
切(ち)ーる とうくまぬ あしがよー、終(う)わていからや、

「マディドゥー」んでい 言(い)ーま、笑てい・・・て・・・

アッハッハッハー —— 両者ともに笑いあう ——

比嘉：叱られるんじゃないで、笑われたんだ。

中曽根：みんな 笑う。あんすぐとう 笑(わら)いぐとう、あぬ はんちげーいるばーよー、(注 発奮)

比嘉：あーあ、

中曽根：笑われたのが、かえって、

比嘉：逆に、逆に次はもう絶対ミスは、

中曽根：うんうん 逆に、次はやらんといかんと言うのがね、ことば 直(なお)さんとー。ことばんでー 直(なお)
さんとー、へーく 直(の)ーさんとー ならんでー、山原くとうばっしえー 芝居 ならんし やさ。

山原くとうばっし 芝居 ないしえーやー、「奥山の牡丹」の、あぬ、普天間権現(ふていまぐんじん)ぬ
場面、あまや なー 山原くとうばっし っしん ないるばーよー。あんすぐとう ちゆけーのー、あの一、
清子(きよこ)ーねーさんとう わんとう、っんじゃっさったる くとうぬ あるばーてー、あぬ、山原人(や
んばるっちゆ) 二人(たい)が、むる ありん 山原んでい、清子(ね)ーさんが いいなぐんぐわ さいに、わ
が すー(主) さいに そーしがてー、っえーっ、っしんでい いーねー しーかんでいー すたさ。

比嘉：あつ、逆に、普通、

中曽根：だー、「使(ちか)り」んでい 言(い)られーからーやー、使いぐりさぬよー。もう、うぬ とうちからー、な
芝居ぬ セリフ、なー 結構 慣(な)りてい ちよーる 時分(じぶん) やぐとう、

比嘉：ふうーんん、

中曽根：あつたに「使(ちか)り」んでい 言(い)れー、使いゆーさん なんとーたん。なー 笑ていてー。でーじどー
あの一 慣れんと。慣れって言うのは、大変だね。

比嘉：そうですね、ほんとにあの一、お芝居の凄いところは、あの一、ま、日常、いま会話のシマくとうばが、凄く
やっぱり、あの普及しようと頑張っているところなんですけど、お芝居の中にはその昔の階級、あの一、王族、
士族そしてまた、あの一

中曽根：普通のさむらい、

比嘉：商人、

中曽根：商人、百姓とかね、行商人、うん。いろいろあってね、

比嘉：それにまた、それぞれまた、あの一 那覇(なふあ)んちゆとか、

中曽根：首里(すい)んちゆともあるし、

比嘉：その各地方のものが、どんどんこう入って来て、それを全部 役者はこなしたんですよね。

中曽根：あの一 芝居や、だいたい、あの一 那覇(なふあ)くとうばとう 首里(すい)くとうばだきしか、ねーら
んでい。

比嘉：うん、

中曽根：芝居うとうーてい、使(ちか)いしえーやー。あんすぐとう あぬー、すいくとうばとう なふあくとうば
しか、だいたい 芝居や 使(ちか)らっとうぐとう、うぬ ほかぬ 地方(ちほ)ぬ くとうば 使(い)んでい
いしとう、特殊な 芝居ぬ 時にしか、使(つか)う、使(ちか)いるばーてー。

あぬー いちゅまん(糸満)くとうば 使(い)んでいーねー、「糸満(いちまん)マギー」とうか、うんぐとうー
わざ。うん、あんとうから また、あの一、小太郎(注 大宜見小太郎)さんなんか 使(い)る 読谷山(ゆ
んたんやま)てー・・・、あまぬ くとうば。

比嘉：はい。

中曽根：あー言ったこと、読谷どう やていー、小太郎さんが 使(い)る 「一本松」(注：「丘の一本松」)。だー、
ああ言った

比嘉：北谷(ちゃたん)。

中曽根：北谷くとうば、だからこう言った特殊な場合に、方言、うぬ シマぬ くとうばん 使(ちか)ーりーしが、

比嘉：うん、

中曽根：普通は、あぬー、首里(すい)くとうばとう 那覇(なふあ)くとうばしか 使(ちか)ららん、芝居や。

比嘉：でも、凄い、そう言う、使い分けて、あの一、最初はむつかしかったと思うんですけど、あとは慣れて来るともう・・・、

中曽根：慣(な)りれー、どうーぬ シマぬ くとうば 使(ちか)いゆーさん ないん。

中曽根・比嘉：ソフッフッフー —— 共に笑う ——

比嘉：可笑しいですね、凄いですね。でもあの一また、前に話しを聞いた時に、そのことばも違うけど、例えば衣裳

の着方、ま、先程話されたからじでも、その階級によって、全然この“張い(はい)”の出し方とか高さとか全部この違いが 昔はそう言う生活の中にあつたのを、お芝居ではそれを再現されていると言うところでは、

中曽根：うん、

比嘉：今、踊りの中でも、あんまりそう言う違いがない中で、やっぱりお芝居をなさって来た先生方は、そう言ったことも、ちゃんとこう受け継がれていると言うところでは、今、こう、・・・

中曽根：あぬー、なまぬ、なまぬ、結局は 若者(わかむん)ぬちゃー と言うより、あの一、“うない”ぬ しんか やていん、あぬー、からじとうか、うんぐとうー なーだ 分からんばーよー。

比嘉：種類があることを、

中曽根：そう、あぬー、ちゃんとう 形(かたち) とういゆーさんばーてー、だっ、あぬー、ちゅーぬ あぬー、ナーギーぬ あり やていん、(注 本日実演した喜歌劇「楽しき朝」の演者：古謝 渚さんのこと)

比嘉：渚さん、をんな役の、奥さん役の、

中曽根：あり やていん 百姓(ひやくしよー)る やぐとうやー、くまー あんすか まぎく 結(ゆ)ーらん、百姓は。すぐ、からじ さばちゃーに、すぐ うんぐとうー うんぐとうー さーに、すぐ ひっくるみている んかしえー 結(ゆ)ーいてーぐとう、

比嘉：とうっちきー、

中曽根：百姓んでい いしえー、うん、すぐ なー、うんぐとーる ないてーぐとう。すぐ うりんかい すぐ ひっくるみてい、うんぐとうー やくとう、このくらの、うっぴぐわーぬ むんしか ねーらんばー。かんぶーいいなぐ やていん っんまー なーか。だけど、いいきがー、また、あぬー、っういーんかい あざらんぐとう さぎてい、なーひん、

比嘉：ああ、かたかしら、

中曽根：うん、さむらいじゃない。サムレーどうん やれー、っんまんかい 巻芯(まちじん)ふーじーん 入っちゆしがやー、百姓や なーひん さぎーん

比嘉：うーんん、

中曽根：からじ。あんさーに、あぬー、ジーファーんでー ぬーん しーぐれーや あらんばーよー。

比嘉：あーあ、

中曽根：やしが やぐとう、芝居ねー、なるべく 百姓 する ばーねー 「ジーファー すなよー」と 言って、

比嘉：ううーんん、

中曽根：って、いいなごー あの一、きー(木)ジーファー。いいきが やていん すらー、キージかんざし、やってからぬ・・・あぬ 金具(かなぐ)。あんぐとうー 使(ちか)やーに、すぐ、どうーくるさー 貫(ぬ)ちゅたんよー。

比嘉：ちゃんとしたジーファーではなく、もう、とにかくこう、

中曽根：金銀でなく、うん、くんぐとうー ジーファー あらん。すぐ なー やーぬ 道から 拾(ひる)てい、木(きー)削(きず)やーに、くりしる かん(金)ジーファーとうか うんぐとうー すてーぐとうてー、んかしえー、芝居や。うん。あんすぐとう、うったーん、なーだ まだ うんぐとうー 慣(な)りてー ううらんぐとう、うん。
「なるべこー 百姓 する ばーねー、木(きー)ジーファー 使(ちか)りよー」と 言って、ちゃー 言ちよーるばーよー、うん。

比嘉：お芝居の時は、じゃーほんとにあの一、ことばだけじゃなく、演技だけじゃなく、そう言うあの着物の着方、その身分の表し方、歩き方、そう言うやっぱり、あの、人としてその昔あつた、あの一、そのままこう舞台の中で出来るだけ、

中曽根：あんしーねーやー、わざん しーやっさるばーよー。実際、百姓 なとーる 気分 ないるばーてー、

比嘉：ああ、

中曽根：うんぐとうー 恰好(かっこー) しーねー。

比嘉：うん。

中曽根：んかしどうん やれー あんぐとうー じょーとーぢん(上等衣)ち ねーん。んーな ちーじゃーはじゃーる やるやー。(補注 継ぎ接ぎだらけの着物)

比嘉：あーああ、

中曽根：ちーじゃーはじゃーる 着(ち)ーるやー。あぬー、農家ぬ あぬー、村(むら)あしびーとか、うんぐとーる ばーねー、ちんぐわー 上等(じょーとー)ぐわー ちゅくてーし、

比嘉：一張羅(いっちょーらー)

中曽根：年に1度 ちゅくいんとうか シチグワチ(7月)とか ソーグワチ(正月)。うんな ばーにる 着(ち)ーるやー。ひーじー(平生)や ちーじゃーはじゃーる 着(ち)ち 歩(あ)っちよーる はじろー。ふんとー百姓や。うん。

比嘉：あーあ、

中曽根：こんな、うんぐとうー ちゅらぢのー、ふんとー 着(ち)ーし、たたーさるばーよー。ウフフー(補注 たたーしゃ／分に過ぎるようす)

比嘉：だんだん、こう全部、きれいになって言うところに、どんどんまとまる・・・

中曽根：むる 美(ちゅ)らすがいっし、すーぶー(勝負)さーに、美(ちゅ)らく 見(み)しーる たみに うりしか かんげーらんばーてー、んーな。うん。

比嘉：そうなるねー。はあー(この部分はささやくような小声であった。)

でのほんとにあの、

「この沖縄の民衆にとっては、忘れること出来ない沖縄芝居。ねーなんか、年を取るごとにその思いは増して来る」って言うお客さんの、そのことばだったり、

あとはこの舞台を見たお客さんが、

「なー ちゅーぬ 芝居や グソーぬ チトゥ (後生の苞)とう なたさ」(注 チトゥ/みやげ)

中曽根：うーんんん

比嘉：って言うことばを、私はそれをこのあの一、団員の方から聞いた時に、

「ああ 沖縄芝居って、ほんとにお金に代えられない凄いう、あの、ものがあるんだ」

そして、この年寄りの方は、こう死ぬことを恐れるのではなくて、

「死んだ時に、そのおみやげ話が出来る。今日は話題を、この舞台からもらった」

って言うこのことばを聞いた時に、

「凄いなんだなー」と、その時にとても感じたんですね。

ほんとにこの一、あの、ウチナーンチュにとって、沖縄芝居のあの一、心の拠りどころと言うか、そう言ったのが、このお年寄りの、

「グソー (後生)のチトゥ (苞)とうなたさ」って言うことばの中に、私は凄く感じて、

やっぱりその感じさせるのもやっぱり、乙姫から受け継いでいるその間先生の、

「心で演じなさい」と、

「形をやろうじゃなく、とにかく一生懸命、このやれば、お客さんは、演技はどんなに下手であっても、心があればつながる」と言う、・・・

中曽根：そうです。うん、

比嘉：そこがお客を非常に魅了したのかなー、と思ったんですけど、

中曽根：うん。

比嘉：そこは、

中曽根：あの一、えっと一、ぬーんでい 言(い)がや一、あぬ一、芝居よ一、芝居 そーちーねーや一、あの一、若さる えーだ一 分からんば一よ一、むる うんぐと一る くと一。

比嘉：うん。

中曽根：うんぐと一 昔(むかし)ぬ くぬ、うちなーくと一うばぬ 大事(だいじ)さんでい いしえ一、分からんば一て一。歳(とし) 行(い)ちゅしんで一 よ一ふん、あんしえ一、如何(いか)に 大事(だいじ)や一や一んでい いしが、分(わか)てい ちゅーん。

比嘉：はあ、

中曽根：うんぐと一る くと一うば一、ねーらんさ一。ね。あんすぐと一、この く一 (小)さる 琉球(りゅうきゅう)んかい、うっさぬ 芸術(げいぎゆ)ぬ あん。あしえ一や、組踊(くみおどり)と一うか、あぬ 舞踊(まひやう)、世界(せかい)かい ねーらんしえ一 うんぐと一や。あんすぐと一、うぬ 歌劇(かげき)と一うか、うんぐと一 ねーらんぐと一、うっさぬ わざを、あぬ一、ただ、なままで一 よ一ふん、ただ、さんと一 ならんでいち、そーいびーたん。やしが、歳(とし) 行(い)ちゅしんで一よ一、くりが 如何(いか)に 大事(だいじ)な むん や一や一んでいしがよ一、だんだん、分(わか)てい ちよーいびーたん。

比嘉：んんんん、

中曽根：くり ねーらん なちえ一、うちなーや あぬ一、うちなーが、うちぶり(零落れ)てい 行(い)ちゅん と一 言う 感じで、

比嘉：あはーあ、(息を飲み込む)

中曽根：うちなーんでい 島(しま)が、ねーらん なてい 行(い)ちゅる 感じで、

比嘉：うん、

中曽根：ちゃーしん 方言(ひやうげん)、残(のこ)さんと一 ならん。くりが 琉球(りゅうきゅう)んでい 国(こくに) (補注 邦)ぬ、あぬ ほんと 大事(だいじ)な と一くる やくと一うて一、

比嘉：うーんん、

中曽根：もちろん、あぬ、芸術(げいぎゆ)、あぬ、舞(まひ)一や一ん、大事(だいじ)。組踊(くみおどり)ん、大事(だいじ) やしが、うぬ くと一うば自体(じたい)や、まーにん ねーらん。くれ一 なー 琉球(りゅうきゅう)ぬ くと一うばる やぐと一、くれ一 ちゃーしん 残(のこ)さんと一 ならんで一、

比嘉：ふうーん、

中曽根：もう 歳(とし) 行(い)ちゅしんで一よ一、くりが 分(わか)てい ちゅーるば一よ一。あんすぐと一、うぬ 後輩(こうはい)た一んかいよ一、なー 最近(さいきん)から一 すぐ あびや一 あびや一 するば一よ一。

「りっぱぐわー 方言(ひやうげん) 使(つか)りよ一」ぬーぬん と言って、

「いったーや一や一、あぬ一 セリフ 習(なら)一しーね一 むる うり(補注 スマホに) と一うってい

行(い)つん)じゃーに、家(や)ううてい、勉強(べんきやう) すんでい いしが・・・」

比嘉：録音して・・・

中曽根：「・・・そーみ」。

あんさーに 次(つぎ)ぬ 稽古(けいこ) 来(き)一ね一、ぜんぜん 覚(う)びらんぐと一 ちゅーるば一よ一、

「いったー なて一 ねーらんしえ一。ぬ一 勉強(べんきやう) そーが」んちて一。

「録音(ろくおん)や 入(い)りらちよーてい、いったー うり 聞(き)ち 稽古(けいこ) そーみ」って、

あんせ一、録音(ろくおん)や 入(い)りらちよーてい、ど一、

「家(や)ううてい 勉強(べんきやう) さびーぐと一」んでい 言(い)や一ま、持(も)つち 行(い)つん)じゃーに、ちゅー

る たんびに、ひっちー 壺(いち)から くりけーし、あんすぐとう、
 「入(い)りーらち くいれー」
 「入(い)りらん」
 わんねー すぐ はいんよー。
 「んーんー、くとうばー 耳(みみ)から 入っち 聞(ち)けー。耳から 入っち 聞けー。書きなさい。す
 ぐ 止(とう)みれー」んでい言って、
 うんぐとうー っしるよー、最近 もう、近(ちか)ぐるからよー、くとうば くふあく(補注 強く/固く/
 厳しく) なてい ちょーん、

中曽根・比嘉：アッハッハッハー、—— 共に笑う ——

比嘉：それは、先生の思いも、強くなっていると言うことで、あの一、

中曽根：もうー

比嘉：ほんとに勉強して欲しい、学んで受け継いで欲しいと言う心ですよ。

中曽根：あの一 なーっ、だ一、近頃(ちかごろ)の、あいつ、一部の ひとどう やしがて一、一部んかいどう
 言(い)ちょーんど一、うれー んな一。若者(わかむん)ぬちゃーや、な一 むる うぬ くり、くぬ 機械つ
 し 慣(な)りや一に、

比嘉：携帯

中曽根：な一 話(はな)しん さん。口(くち) 言ちえー お互いに 話しん さん。あぬー やくとう、口や か
 な一ん ないるば一よ一。(補注 かな一ん/叶わない/うまく言えない)

比嘉：あーああ、

中曽根：ゆくん 使(ちか)いゆーさん ないるば一て一。

比嘉：うーんん、

中曽根：あんすぐとう、わんねー うぬ わらば一た一が、うんぐとうー そーし、見(ん一)じーねーや一
 「あいえーな一、くぬうち、くぬ 世(ゆ)ぬ中(なか)から、むる ち一ぐ一、むぬ 言(い)らん ち一ぐ一
 ないる はじ やっさ一 人間(にんじの)一」

比嘉：アッハッハッハー (と、声を立てて笑っている)

中曽根：いつもそう思う。うり 見(ん一)ちょーち一ねー よ一ふん。

比嘉：本当ですねー、

中曽根：あんせー むの一 言らんぐとう、一生懸命 うり そーさや一、うりさ一に 会話 すしえー・・・、は
 あ一、行(ゆ)く行(ゆ)くは くとうばー ねーらん ないる はじ やっさ一って、思うさ。

比嘉：思う。悲しくなる。もう、本当ですね。もう今はお家の中に居ても、

「今日の夕飯、何が食べたい？」って、
 こうメールでやるって、聞いたりするんですね。

だけど、ほんとに沖縄のこのいなかに行ったら、まだあるんですけど、おじいちゃんたちが、例えばこうゲー
 トボール場に座っている人が、道から歩くおじいさんに、

「まーんかいが？」

「くまんかいよー」

って、なんて言うんですかね。何気ないことばなんですけど、

中曽根：そうそうそう、

比嘉：話しをする、って言うところに、

中曽根：あんしえー んかしえー っや一やや一、わらば一た一、わった一が わらびぬ くら一、お一え一 すさ
 や一、すぐ うふっちょ一、たい、てい一 入(い)りらんろ一。(補注 肩入れしない)

あの一 いっぺー ひどい あの一 お一え一 する むん やれ一、

「っうえーっ!・・・」すぐ ぬらい。

比嘉：アッハッ

中曽根：「・・・おーらんどー! すぐー」

「ぬー やが うんぐとうーっし、お一え一 お一え一 すんな一」

って、た一が やていん ぬらいるば一て一、

比嘉：あーああ、

中曽根：悪(わ) っさる くとう しーね一。なま一 あね一 あらんしえーや一。むの一 言(い)ららん
 しえ一、っちゆぬ 子(つくわ)んかい。あんせ一、だから あんさ一に、やぐとう、あっさ一 んかしが
 如何(いか)に いい 時代 やたがや一んでい いしがよ一、ふんと一 分かいる。

もう た一が やていん、むん習(なら)一し すんでい いして一。

比嘉：あーああ、うん、

中曽根：「わっさしえー わっさんろ一」んち、な一 あんぐとうーや、な一二度(にどう)とう、くんぐとうー 時代
 や ねーらん はじ やっさ一んでい 思(うむ)いん。

なま一 むる 親(うや)ぬる っんじてい ちゆーるむんぬ、「ぬーが っちゆぬ っくわ(子)、ぬらいる」っ
 て 言って、

比嘉：うーんん、

中曽根：あんすぐとう、うぬ、あぬ一、先生(せんせ)た一 やていん、わった一が く一さる ば一にや、
 先生た一、コーガー (補注 げんこつ)、コンとう、ちゃ一 打(う)ちゆたん。やぐとう むる コーサー
 る くわーすたるや一。た一ん うりに対して、ぬ一 親(うや)んかいん ぬ一んでいん 言らん、告げ口
 ぬ一ん さん。こんな、うんぐとうーがる、あたい前(め)一 やるんでい 思(うむ)と一ぐとう、先生た一

すぐ ココンる やたんろー。やくとう なまんでー、すぐ うり 手(ていー) っんじゃすしや、すぐ
でーじてーやー。

比嘉：ウハハハハハ、ほんとですね。みんながやっぱり愛情があったから、この叩かれてる本人も「ああ、こう言
うことをやっちゃーいけないんだね」と、すぐ自分でも反省するし、あの・・・

中曽根：あんすとう。手(ていー) っんじゃさりーんでい いしえー、うぬ ただ、くるさりーんとしか、うまー
んばーてー、

比嘉：あーああ、

中曽根：うん、なー 習(ならー)ちどう ううんどー、あぬ、うすていどう ううんどー。「うんぐとうー すな！」ん
ち うすていどう ううんどー。と言うのは、そのままでは、分からんばーてー。

比嘉：うんんん。

中曽根：なー 手(ていー) っんじゃしーねー なー くるさりーん。やしが、まー 先生にゆってー、うりん
あえー すしがてー。あぬー、ひどい おーえー、くるし方(かた)ん あいや すしが、あんすとう、なま
ぬ 先生たーどうん やれー、わらばーたー ゆくん だから、うんぐとうー っし、うぬ、なまぬ 先生たー
やていん、若さる とうちから あぬー、親(うや)が うんぐとうー っし 見放(みはな)ち 育(すだ)
ていとーぐとう、あぬー あたい前(めー)んでい 思(うむ)いるばーてー 結局は。あんすぐとう、うん
ぐとうー すしえー、たーん くるすしえー あたい前(めー)んでい、思(うむ)いるばーてーやー。うん。

比嘉：あーああ

中曽根：親(うや)ぬ 習(なら)ーちえー ねーらん 証(あ)げ(すーく) やんばーてー、すぐ まま しみとーぐとう、
うりだきを ふんとーんでい、思(うむ)とーんばーてー。うん

比嘉：あー、んんんん。

中曽根：あんすぐとう、どうしぬちゃー むる 集団(ぐ)っし、くるちえー ううい、すしえーやー、あぬ あれー、ふ
んとー なちかさんでい 思(うむ)いっさー、うんぐとう すしや、

比嘉：むかしのみんなで育てるって言う時代が、

中曽根：やんどー、うんんん、

比嘉：ほんとよかった。あたり前・・・

中曽根：うりが ふんとー やたるばーよー。

比嘉：そしてあの、家族が、あのー、おじいちゃんも おばあちゃんも、かならず お家(うち)に居て、

中曽根：まじょーん ううぐとうやー、うん。・・・

比嘉：親に叱られても、おじいちゃんが、おばあちゃんが、

「いえー いえー 泣くなよ」って言う、こうやっぱり、その家族の中の役割が、それぞれこうあって、

中曽根：なまー なー、家族 むる バラバラに 暮(く)らちよーぐとう、うんぐとうー する あれが ねーらんばー
よーやー。

比嘉：ふうーんん。

あの、この子育ての中の、あのーまた、エピソードで、間先生が、あのー、ある子どもが集まっているところで、
なんか、うちなーぐちで話された時に、その(補注 学校の)先生が、

「あっ、ここでは、日本語でしゃべって下さい。沖縄の方言をしゃべらないで下さい」

って言うことを注意されたと、でもその先生がまた見えなくなって、間先生はそれでもやっぱり、その頃から
講演会、あのー、いろんなところで、うちなーぐちで挨拶、もうやるようになって、

この子どもたちに、うちなーぐちで問い掛けたら、

「この子たちの心が開いているのが見えた」って言うんですよ。

だから、子どもたちはことばの意味が分からなくても、このおばあちゃんが、何を言っていると言うのが、しっ
かり理解出来るし、そうやっているうちに、だんだんこの子たちも慣れて来るって、だから、うちなーぐち
の不思議さを、その間先生もおっしゃっていて、で、たまたま、その 私たちも今、ハワイ語の復興を例に、
参考にしなが、沖縄のうちなーぐちも、どうにか復興したいと言うことで、今、研究会をみんなで頑張っ
ているんですけど、そしたら、そのハワイの先生も同じことを、言っていたんですね。

中曽根：うーん。

比嘉：自分の親が、あのーある時にあの、スーパーかどっかで、ハワイ語で話せる人がほんとに少ない中で、ハワイ
語で話してる横顔を見た時に、もう何とも言えない幸せそうな顔で、あのー、友だちと会話をしていたと。そ
れを見た時から、あっ、この自分たちの生まれたこのことばと言うのは、

『自分たちの、あの、に しかないこのことばには、やっぱりその、すぐくこの人の心をこう温かくする』・・・

中曽根：そう、温かみのあるでしょ、自分のシマのことばって言うのは。ほんとに違うんですよ。うん。

比嘉：ふうーんん、

中曽根：あのー 普通語では、あの 話し すしとう、また あぬー、えっとー うちなーくとうばで、話し す
しえーやー。こっ、うぬ うちなーくとうばんでい いーしんかい、あぬー 優しさとう 温かみぬ ある。
うん。あんすぐとう、どんな、ちゃっさ ぬらーっていん、ぬらーっていんよ、いくらか、あぬー、通じる
ふしが あるばーてー、っんまんかい。

比嘉：ああー、

中曽根：心(くくる)んかい、通じて 行(い)ちゆしが あぐとう、あぬー、あんすぐとうる わったー じぶのー、
あぬ、うふっちゅんちゃーが ぬらていん、あぬー 別(べつ)に、

「おかー、ありが ぬらいたんどー」

「あぬ おじさんが、すぐいたんどー」とうか、

比嘉：うーん、

中曽根：そんな絶対言わなかった、あの時分や。うれー あたり前(まえ)んでい 思(うむ)とーくとう、
隣近所(とうないきんじょ)ぬ ぬらいしん・・・

比嘉：うーん

中曽根：あた前(め)んでい 思(うむ)とーぐとう、あぬ 方言でい いしえー あぬー、幾通りん 使(ちか)
い方(かた)ぬ あぐとう、

比嘉：うん、

中曽根：ていーちぬ くとうばんかい、いめー (意味は) 幾(いく)ちん あぐとう、深い。深(ふか)さるばーよー。

比嘉：あーああ、

中曽根：沖縄(おきなわ)ぬ 方言や、あんすとう、くまうてい くんぐとうー 言(い)ちゃんてー、あぬ うりが
また、びちぬ 方向ぬ 意味あいにも 取れる。とうらりーるばーよー。

比嘉：ふうんんん、

中曽根：あんとう、いろいろ とうい方(かた)ー あぐとう、うちなぬ くとうば。うん。

あんすとう、うぬ、分かいる っちょー、分かいる っちょー、それ、うちなぬ くとうば 分かいる っ
ちょー、これ、あの一ぬんでいん、ちゃんと 通じて 行(い)ちゅん。うん。

比嘉：あーああ、心とことばが、ほんとにこうセットになって、同じことばを言っても、

中曽根：言っても、うんうんうん、

比嘉：あっ、いま怒られているんだとか、いま褒められているんだとか、今、注意されている。いろいろこう、

中曽根：うん、あいびーるばーよー、うちなぬ くとうばなかいや、

比嘉：あー、それで、あの一見たお客さんが、

「たーが ぬーんちん、やまとうぐち テレビゆかー、うちなぬちっし、うちなぬち 芝居や、一番 や
ん！」って言うそう言うことばが出て来るところは、

中曽根：うれー、あん やん、たしかに あん・・・うんうん

比嘉：それを分かっている方が、そう言うことばが出て来るんですね。ほんとに凄いあの沖縄のうちなぬちの、あ
の一、温かさって言うか、あの一、心の文化とも言ってますね。

沖縄芝居のうちなぬちぬ心の文化として、末永くこう、沖縄芝居も残して欲しいって言うのは、やっぱ
りそのことばが残って行くって言うのが、うちなぬち芝居の中にはあるって言うところが、非常に大切にしたい
って言う思いになっているわけですね。

中曽根：そうそう、やくとう、うちなぬ くとうばや むる あぬー“ちむぐくる”(肝心)に、通じて行くんでい
いーねー、心の中に沁み込んで行くんでい 言(い)し、うれー。

比嘉：はあーあ。

中曽根：“ちむぐくる”、うちなぬ “ちむぐくる”んでい いし、方言や、うーんん。

比嘉：そうですねー。

あと、あの一まっ、先生が、このえー、劇団うないの2代目を継がれてから、まー、演出、まっ、常に舞台の演出、
立ち方もしながら、演出もかけながら。

その時に、まーあの一、

『ひとりひとりの個性を引き出して行くって言うのが、その演出の力だ』

っておっしゃったんですけど、まあ、そこらへんで、こう苦労したことですか、その沖縄芝居をこう舞台に
上げる時に、一番大切にしているものとか、そう言ったものがありましたら、

中曽根：あの一 私は、好子(よしこ)ねーさんのー うんぐとうー やたん、適役って言う、かんはずよー、
適役って言うのを、あんちょー とうやーに、役(やく) 決(き)みーたんよー、てーげー。

比嘉：この人に合う。

中曽根：くりんかい あたとーしえー うり(補注 この人)。こうやって、うんぐとうー っし 役(やく) 当(あ)
ていてい 行(い)ちゅてーぐとうてー。あんすぐとう、うり、好子(よしこ)ねーさんが すし 見(ん)ちょーぐとう、
わんにん 初みてい 分かたるばーよー。うぬ 「うない」 っしから・・・

あぬー、『芝居や、ただ しみてー ならんさやー』んでい、

『たーにん、たーにん しみていん、うむこー ねーらん』でい、

うりが 分かたるばーよー。

比嘉：うん。

中曽根：うぬ わざー、うれー、あんすとう わんねー ちゃー、劇団員ぬ 若手、うんぐとうー うりが しよー
しぎま、こんな こんな、あの一、動きとか うんぐとうー、たまーに 見(ん)ちょーんよー。見(ん)ちょー
てい、容姿とか、あぬ うんぐとうー 見(ん)じーねー、ああー、うれー うぬ 方(かた)んかい 行(い)ちゅ
さやー。あっ、あれー あぬ みやらびぐわーどうん やれー 上等(じょーとー) やつさーとうか。うん
ぐとうー っし むる 見(ん)ち、てっ 決(き)みてい 行(い)ちゅるばー。

あんし、あんしが、決(き)みたる 本人が

「なまー、ならん」でい いーねー、ないるまでい 待(ま)ちゅん。

私、わんねー しみらん、たーにん。

比嘉：あーああ、もうイメージが、この役・・・

中曽根：うりしか ううらんでい 思(うむ)れーからーやー、2、3年、ちゃん抛(な)ぎとーていん さん。

比嘉：あーああ、

中曽根：うりが 成(な)いるまでい。

比嘉：このイメージを大切にするんですね。

中曽根：うん。

比嘉：出来る出来ないではなくて、この役に合ったこの人の雰囲気、

中曽根：あんすぐとう、あぬ ちゅげーのー、あの一 くりどう やしがやーんでい 思(うむ)てい、くりが、長期、あの一 出られない、っんじらんてい いる 時期ぬ あたぐとう、わーが 決(き)みたる っちゅぬ っんじらんていち、別(びち)ぬ っちゅんかい しみたるばーよー。

しみたしが、やっぱり違う、

比嘉：はあーあ、

中曽根：違(ちが)いんろー、ちゃーしん。

比嘉：やっぱりこう、自分のイメージしたこの図に、ちゃんとやっぱり、叶う、あの一 舞台を作るって言うのが、

中曽根：あの、わんねー また、あの一、あの一、自分(じぶん)、どうーぬ イメージん 大切(たいせつ)に すしなかい なー、お客(きゃく)さんが ちゃーし 喜(ゆるく)ぶがやーんでいち、うり ちゃー う客(ちやく)ぬ くとう、あり そーさやー・・・

比嘉：はあーあ、

中曽根：う客(ちやく)が、ちゃーし 受(う)きとういがやーんでい、うりっし すぐ、考(かん)げーいるばーよー、うん。

比嘉：はあーあ、

中曽根：あぬー、しみやーに、あんせー、

「うむこー ねーらんさー」んでい 言(い)りねー、じゃーふえー やっさー、

「うりんかい 当(あ)たらんやー」とうか、う客(ちやく) 言(い)る っちゅん うるばーよー。

比嘉：あーああ、

中曽根：「うりんかい うぬ 役(やく)ー、当(あ)たらんやー」んでい、言(い)る っちゅん めんしえーるばーてー、

比嘉：もうたくさん見て来ているから、

中曽根：なー 眼(み)ーん ちゅーとーぐとう、

比嘉：はあーあ、

中曽根：乙姫ぬ 芝居 見(ん)ちよーぐとう、あんすぐとう、乙姫、あの一、めんせーる っちよー、むる 乙姫しか ちぶるんかい ねーらんぐとう。乙姫ぬ 印象でしか 見(ん)だんぐとう、うん。やくとう、あぬー、わんねー、お客(ちやく)が ちゃーし 受(う)きとういがやー、あぬー、ちゃんぐとうー 思(うむ)いがやー、くんぐとうー 考(かん)げーがちー、どうーぬ 決(き)みてーる 役(やく)んかい、

比嘉：うん。

中曽根：当(あ)てい嵌(は)まてい 行(い)ちゆるばーよー、うん。

比嘉：はあーあ、

中曽根：くり いっぺー、わんねー 大事(だいじ)に そーるばーてー。

比嘉：あーああ、

中曽根：だから どうーくる なままてい、あぬ、当(あ)てい嵌(は)みてーる ちゅぬちゃーが、あぬ、結構、あぬ、いいー あぬ あり、わざ そーぐとう、ああ、まちげー(間違い) ねーらんたさやー、と思うことが、

比嘉：ふうーんん

中曽根：幾通りも ああ言うことがあって、うん。やくとう その 思(うむ)いぬ とうーいんでいち、どうーぬ あぬ あれ 曲(ま)ぎらんぐとう、信念 曲(ま)ぎらんぐとう さーんでいち、意地強(ぢゅー)さぬ、わんにん いじゃー(意地やー) やくとう、また、がーじゅーさぐとう、

比嘉：いやいや、でもこれは、ほんと代表として、で、あの一、先生の責任感の強さと、あとやっぱり、間先生も同じようなことを、あの一、

『芝居のお客様が見て面白って言うことが大切』、

『それぞれにあった適役が大切』って言うことを、

中曽根：そうそうそう、

比嘉：常に、やっぱり、これだけ沢山の劇団員の中から、『あつ、じゃー、この役はこの人だ』って言うことを、常々 やっぱり、日頃の生活の中から、

中曽根：そうそうそう、うん

比嘉：いろいろ この「しよーしぎま」って言うんですか、それを役と、ちゃんとこう嵌めて行った、って言うところ・・・

中曽根：あんすぐとう、好子(よしこ)ねーさん 側(すば)んかい ううとーてい、ずーっと 解散するまで ずーっと、あー、まーし(補注 逝去)みせーるまでい ずーっと、解散するまでい ずーっと、まじよーん やてーくとう、側(すば)んかい ううてーぐとう、だから、好子(よしこ)ねーさんが しみせーるくとー、むる 分かいるばーよー、てーげー。

比嘉：はあーあ

中曽根：あんと、創作 しみせーねー、好子(よしこ)ねーさん、創作 したたか あるばーよー。あんしが、芝居ううとーてい 創作、あぬー、作(つく)いねー、あぬ とうちまでー、ビデオんでい いしが ねーらんぐとう、むる 使い捨て やるばーよー・・・

比嘉：舞踊ですか？

中曽根：舞踊！

比嘉：ああ創作の場合、ひえっ、

中曽根：創作。なー あんちよー(注 あの人)は)、むる 創作る っし。あぬ、めーぶよー(前舞踊)、あの一、しみてーぐとてー。あの一、創作 ちゃっさん あたる はじ やしが、テープぬ あれー とうらりー たしがやーんでい 思(うむ)いるあたい。

比嘉：ひえっ、

中曽根：やしが、だから、あんすぐとう、わんねー 好子ねーさん 側(すば)ううとーてい、創作ぬ 仕方ん むる見(んー)ち ちょーぐとう、ああ 次は ぬーぬ 手(ていー)ぬ っんじーさやーんでい いしが、すぐ分かいるばーよー、ねーさん むのー 見(んー)ちょーてい、うん。

比嘉：あっもう、これの次はこれだ、みたいなのが、雰囲気が、

中曽根：ちゃんぐとうー ちゅーさやーんでいしが 分かいるばーよー。うん、あんすぐとう、いっペー どうーぬ 勉強 などーん、うん。

比嘉：はあー、もう何度かこう乙姫に伝わる、あの、創作舞踊をさせてもらったんですけど、今、私たちがやっているあの、古典舞踊を主(おも)にやっている私たちがは、なかなか想像が出来ない、あの、手が出てきたり、反対に回ったり、もう凄くやっぱり自由なこの表現を、あのー、お芝居の中でやってるなー、と凄く感じました。

中曽根：はいはい、だから、舞踊研究所の ちゅぬちゃーが めんそーち 入っち っちからやー、あぬー。乙姫の 踊り 舞(も)ーらすやー、全然分からないって、やりきれない。しーゆーさんたん、うん。

比嘉：へえーっ、

中曽根：受け取るの、乙姫劇団、うないの芝居、踊りって言うのをね、受け継ぐまでにはね、結構、年数かかりました。

比嘉：そうですね。

中曽根：うんうんうん。・・・

中曽根：あのー、あのー、いずみさん(補注 聞き手のこと) あのー、乙姫でも、うないでもいい、あのー、踊(おどり) しーねー、音(おと)に あーらん はーえー ないんでい いし、疑問に 思(おも)わんていー？

比嘉：音(うとう)に、あーらん、

中曽根：音に当たらん動き、あの っんじ方(かた)とうか、

比嘉：はいはい、小走りして、そして最後のところで、ちょっと当てるとうか、

中曽根：疑問に 思(うむ)いたらやー？

比嘉：はい。

中曽根：あぬー、くれーやー、あぬ、あくまでも 芝居から ちょーる やり方。

比嘉：はい、

中曽根：あぬー、舞踊 やていん、芝居ぬ ばーねー かんなず、あぬ チラシが 入(い)ーんでい いし！。「ばしんとうい(鷺の鳥)」舞(も)ーていん、チラシ 入りーん。うれー ぬーがんでい 言ーねー、「ばしんとうい」や よーんなー やしえー、調子が。だから、う客(ちゃく)んかい、よーんなーそーる 舞踊 見(み)して、あぬー、んーな だらだらっし 舞(も)ーてい そーる 舞(も)ーやーが、うりが すぐピクッと 引(ひ)っくり返(がえ)して、とうまたまーちー(十又松)とうかんかい、ハツとう する むん。うれー う客(ちゃく)ねー、あのー サービス。

比嘉：あーっ、如何に喜んでもらうか、

中曽根：そうそうそう、うりから ちょーる むん やるばーよー。

比嘉：はあーあ、

中曽根：八重山(やえやま)んちゅぬ、
「ぬーんち、あぬ 『ばしんとうい(鷺の鳥)』んかい、チラシ 入(い)ーがやー」
っておっしゃるのを、聞いたんだけど、

比嘉：はい、

中曽根：聞(ち) ちゃぐとう、あのー、あのー ぬーが、“ゆいゆい”ぬ いいなぐわらばーよー、ぬーんでいいたが、

比嘉：えーっ、山川(やまかわ)まゆみさん。

中曽根：まゆみさん。あぬ 時(とうち)ねー まゆみちゃん、そこで 司会 そーたるばーよー、八重山(やえやま)んじ。あのー、そーてーぐとう、公演 まじょーん やてーぐとう。あのー、ありん 分からんぐとう、くんぐとうー 分からん、

「あっ、ああー、分かひびらんさー、わんねー」んでい、言(い)ちゃんてい。

「だー、だー、わーが ううるむんぬ、返事(へんじ) すたるむんぬ」んでい、言(い)ちゃしがてー。

あれー 芝居から、っんじとーる あのー、なれ(補注 慣れ・習い)。

あの、あれ 静(しず)かな むん 見(み)しーねー、う客(ちゃく)ぬ にーぶい(注 眠い) すんとうか、にりーん(注 飽きる)とうか、あい、うぬ あとう すぐ パツとう はねーちゅし 持(む)っち 行(い)ちーねー、う客ん 喜(ゆるく)ぶん。だから やくとう、うちゃこー 喜(よ)ばする たみ(為)ぬ 芝居。

比嘉：はあーあ、

中曽根：うりが 第一(だいいち) 考(かんげ)げーらっとうーるばーよー。

比嘉：そう言うので、チラシに

中曽根：うちゃこー 重点に、

比嘉：考えている、

中曽根：芝居んでい いしえー、そう。あんぐとうー なんとーるばーてー。

比嘉：うーん、

中曽根：あんすとう、芝居ん 踊(おど)りん、あぬー、よーんなー よーんなー やしがやーんでい 思(うむ)ていん、また、あぬ、サーーとう っんじてい ちゃーに、くまから、ていー(手) よんなー っんじやすんとうか、うんぐとうーんでい、音(おと)に あーち、よんなー よんなー っんじてー うむこー ねーらん。

そう言った うんぐとうーが あぐとう、芝居ぬ 舞(も) ーやーや、音(うとう)に、音(うとう)に、あぬー、
1拍(ぱく)の踊りで2拍、ひとつ、1拍を半拍子で持って行ってやるとか。

比嘉：チュヒサ、チュヒサ(注 一歩)(補注 足運び)

中曽根：チュヒサ、うんうん、

比嘉：チュヒサ ぬげー、(注 脱)

中曽根：ぬげー、あんさーに また、あぬ、チュヒサに たらーんねー、

比嘉：ちゅびょーし(1拍子)、ぬげー

中曽根：ちゅびょーし・・・えーと、

比嘉：チュヒサ？

中曽根：えっと、ひとふし、つまりひとふしを タヒサ(注 2歩)しち 歩(あつ)き とか。うんぐとうーが ある
ばーよー、うん。(補注 1拍を2歩で)

比嘉：ほんとにこのあの一、地方(じかた)もそうですけど、『どこからでも歌が出せる』。うたむち(歌持ち：補注 歌
の出し入れ)も一つとかではなく、半分だったり、ちょこっとだったり、

中曽根：うん、うん、

比嘉：で、踊りも。私も凄く苦い経験がある。「馬山川(ばざんがー)」のあの一、美男役をした時に、「♪きゅや うみ
んぞとうよー」で、中心まで来ないといけないんですけど、場所は那覇市民会館。歌とリズムで合わせたら、
全然真ん中まで来ないから、「走りなさい」って言っても、走れないですね。そしたら琉球民謡でもう、「♪テン
テン テン」で、もうリズムでしか歩く練習してないから、そう言う体のリズムが取れなくて、
「いったーや、最高賞 とうていん、くりん ならんなー」
って、指導者に怒られたことがあるんですよ、

比嘉・中曽根：アッハッハッハー —— 共に笑う ——

比嘉：ほんとうやって、チョコチョコチョコと歩いて、そしてあの一普通にこうやると言うのが、

比嘉・中曽根：アッハッハッハー —— 共に笑う ——

比嘉：凄く難しかった思いがあって、で、そのあとから、「金細工(かんじえーくー)」もさせてもらった時に、あの、
「歩(あつ) ちゃがちー 舞(も) ーれー」、
要はあの、トントンで止まるんじゃなくて、
「歩(あつ) ちゃがちー、ずーっと 体は、もう、波(なみ)ぬ 返(け) ーいるぐとうっし、舞(も) ーれー」
って言う表現ですね。お芝居舞踊の方から習った時に、凄いなーと思ったんですよ。

中曽根：だからそこが、芝居とあの一舞踊家の踊りの違いなんですよ。舞踊している人たちのね。

比嘉：ううーんん、

中曽根：あんすとう、疑問に思われているから、あの一それ、いつかは説明しないといけないな一思っていたけど、
あの一この間、あの一、あそこで、国立でやった時、あの歌劇保存会の琉球歌劇保存会の時に、「馬山川(ば
ざんがー)」やったんだけど、そんな時に、ある子があの一、二枚目出て、二枚目出てからすぐ、チョコチョコチョコ
と出て来たもんだから、あの

「いったーや、喜劇る そーるい？」って言ったわけさ。

二枚目なのに、そんなに大きい場所でもないよ、あそこ。あの一、あの 市民会館ぬぐとうっし まぎーどう
ん やれー、はーえー なたい、っやーが なま 言(い)んねーし、はーえー なたい 行(い)ちゅしが、
あぬー あんすか まぎこー ねーらんむんぬ、

「♪きゅやー うみんぞー」と言ったら、すぐ うぬ、チョコチョコチョコ つんじてい 行(い)ちゅぐとう、
「っえーっ、待(ま)てーいえーっ。いったー あぬ、喜劇る そーんなー。喜劇どうん やれー、分(わか)いん。いっ
たー 二枚目どーやー。二枚目どうん やれー、ちゃんとう 舞(も) ーれー。舞(も) ーてい 二枚目らしく、
舞(も) ーてい。『♪テン、タウン、テン、タウン、テン』 音(うとう)んかい あーち、つんじれー」って言っ
て、とうか、

比嘉：あーあっ、

中曽根：「ああ、そうですか」んでい。

あんすぐとう、あつたー ぬーが はーえー なたい、しなだだつた とうくるぬ ある はじんでい、思(う
む)いるばーよー。

比嘉：ふうーんん、「こんなしなさい」

中曽根：ちょうど、っやーが 言(い)んねーっし、あぬー、市民会館 まぎー やくとう、当(あ)たらんぐとう
はーえー ないたん。とー うんぐとうっし、つんじてい ちゅーたぐとうやー、
「あぬー とうかさんどー、うんぐとうー しーねー、いったー 二枚目どう やんそーてい、ちゃんとう
舞(も) ーてい つんじれー。舞ーいぬ ひさ(足) っし、つんじてい くーわ。」ってさ、言ったけどね、

比嘉：あーああ、

中曽根：うんぐとうー、場所(ばしょ)にゆってい 違(ちが)いるばーよー、やり方が。

比嘉：うーんん、ほんとにこの臨機応変に、柔軟に、こう場所、大きさだったり、そう言うところに合わせて、い
くらでも、こうあの対応出来ると言う凄く幅が広いですよ。あの音楽にしても、立ち方にしても、凄くそう言っ
たところは、

中曽根：だから面白いですよ。あの、あんすぐとうる あぬ えー、あの舞踊家の先生方が あの一、一時(いちじ)
芝居かい、むる あの、

比嘉：はい、

中曽根：打(う)ち込(く)まーに、芝居 そーてい 習(な)いがとうか、ちょーたせー。

芝居もやったり、そーしえー。なま やていん、あの一、芝居 そーみしえーる っちょー めんしえーし

がてー、ずーっと、うん。

比嘉：はい。

中曽根：うん、だけど、芝居ぬ むのー、これ、“くーち(空気)”

比嘉：“くーち”？

中曽根：“くーち” 習いがんち、

比嘉：あーああ、

中曽根：うったー、めんしえーるばーよー、うん。

比嘉：うーんんん、“くーち”って言うと、先生、あの、この間の取り方、拍子の取り方を、“くーち”。“くーちもーいー”あの・・・

中曽根：そうそう、はい、うんうん。

比嘉：よく矯(た)めたり、

中曽根：あのー あんた、伊舎堂のおばさん(注：伊舎堂正子)、先生(せんせい)がてー。あのー、「谷茶前(たんちゃめー)」あぬー、舞(も)ーたぐとう、わったー じゃないけど、わったー あらんしが、たーがら 舞(も)ーたぐとうよー、

「ぬーんち 田(たー) くなーすんねーっし 舞(も)ーてい、っんじてい ちゅーが」、

比嘉：田(たー) くなーす。田んぼござす。

中曽根：田んぼこなす、・・・「♪テントウテントウテントウテントウ」っし、っんじてい ちゅーぐとう、

「田(たー) どう、くなーちよーる うったーや」ってね、伊舎堂のおばさんがよー、あんちゅたー、なー、んかしからぬ 役者 やしえーやー。大ベテラン やぐとう、

「はっさよー、田(たー) くなーちよーていん 舞(も)ーやー するばーい？」って言って、

比嘉：ヒッヒッヒッヒッ

中曽根：「ちゃんとう 音(うとう)ぐわー とうやーに、っんじれー しむるむんぬ」ってよー・・・

比嘉：あーああ、

中曽根：だー わったーや、うんぐとうー ヒサや、喜劇にしか ねーらんぐとう、

比嘉：あーああ、

中曽根：わったーや。わったー ちゃんとう、

「♪テントウッ テントウッ テントウッ テントウッ」っしどう っんじてい ちゅーぐとう、伊舎堂ぬおばさんが、あん 言(い)ーたん。「なるほどねー」んち、わったーん すぐ

「あー、んちゃ、うりんかい 田(たー) くなーしんてい 言(い)ーさやー」って言って。うんぐとうーっし、先輩たーが あびーし 覚(うび)ーるばーよー、わったーや。

比嘉：あーあ、面白い表現ですね。

中曽根：だから、しーじゃ方が 言(い)しえーる くとうばよー、聞(ち)ちよーちーねー うむさんろー、うん。

比嘉：ほうー

中曽根：イヒェッヘッヘッヘー

比嘉：いいですねー。もう、凄い

あとあのー、先生方が良く、あのー乙姫でもそうだった みたいですけど、

『稽古の大切さ！ 要は、稽古をやれば、本番は何も恐くない』って言うことを、先生からお聞きして、

中曽根：そうそうそう、

比嘉：大切だなーって、今はほんと、間に合わせで、何とか本番まで、手順を覚えてやるって言うようなことが多い中で、やっぱり、

『むかしから、乙姫は練習の時から、本番のように演じる。』そしてなんか、前に聞いたことがあるのが、あのー、兼城道子(かねしろみちこ)先生が、あのー、青年会館ですか、東京でなんか、あの、「ハンドーグラー」(注 「伊江島ハンドー小」)やった時に、リハーサルなんですけど、あのー、ほんとにあのー、タッチュー (注 城山岳)に登って、こうもう 自害するところで、もうあのー音響照明の人が、もうビックリするぐらい、あの真に迫ってたから、

「『えっ、今日、練習ですよ。こんなに力、入れないで下さい。』って止めるほど、練習から常に本番同様のことをやってた。」って言う話を聞いて、やっぱりそれは常にそう言う稽古を、の形・・・

中曽根：あのー、乙姫の先輩たちは、の場合は、あのー、あの時分はみんな競争で、四大スターがいるから。お互いに競争があって、やっていたかも知れないんだけど、私たち時代から、もう 先輩たちは、ほとんど稽古お芝居に出なくなっている時代だから、あのーそこまでは、あんまりなかったんです。またあのー、間先生も、あのーもうそんなに教え、教えなかった。あのーただ私が、それを感じたのは、あのー、立裕先生(注 大城立裕氏)の作品の、あのー、『それぞれの花風(はなふう)』。あれあのー、幸喜(良秀)先生が演出家。

あの時に、あのー、みんな若手だけだったから、その、うぬ ばーに、あのー、何回(なんかい)ぬん 何回ぬん、演出かける幸喜先生が、納得(なっとく) 行(い)ちゅるまでい、しみらさったるばーよー。あんすとう 他(ふか)ぬ ちゅぬちゃーや、なー、稽古(けーこ) しーが ちよーしが、まじよーん ちよーしが、うぬ 一場面(ひとつばめん)ぬ、あぬ、たみなかい 何回ぬん すぐとう、稽古ん さんぐとうっし、うぬ 日(ひー) 終(う)わいる ばーん あたんよー。

比嘉：はい、

中曽根：あんすぐとう、わんねー うり、うぬ 稽古、うぬ 稽古 終(う)わてい 本番 行(い)ちゅさやー。稽古 うっさ そーぐとう、本番や ぬーん うとうるこー ねーらんばーてー。

比嘉：あーあ、

中曽根：あんさー、うぬ 稽古 そーる その、うぬまめぬ 気持ちさーに、舞台(ぶだい) 入(い)らりーい、あぬ 本

番に 入っち 行かりーたるばーよー。

「あっ、くれー 上等(じょうとー) やっさー。ぬー うんぐとー しーねー、たーが やていん ないっさー」って言って、うっさ 稽古 しみらりーねー、んちゃ たーが やていん、舞台(ぶだい) 立ちゆーすっさー、と思ってね、あん 思(うむ)いたんよー わんねー。

比嘉：うん、

中曽根：あんすっ、大事(だいじ) やさやーんでい 思(うむ)てい、あんすとう、稽古 する。そして、何回も 何回も こう、なんけーん 繰り返(け)ーし すしる ふんとー やさやーんでい。あんしーねー、お互いに えーていどうーさー(相手同士)、気持ちん 通じーん。呼吸ん 合(あ)い、あんすとう “くーち”ん また、ありが あまんかい 行ちーねー、どうーや あまんかい 行ちゆん。こう言う うんぐとー うんぐとーぐとーが、あぬ、立ち居振る舞いも、約束(やくすく) さんていん ないるばーよー。

比嘉：あーああ、

中曽根：っんじゅちゆーするばーよー、うん。(補注 動くことができる)

比嘉：もう息遣いが分かるから、自然にこう体が動く。ああー、

中曽根：ありが っんまんかい っち(来)、どうーや あんし っんまんかい 立っちえー ううらんどー あくとう、あんしーねー っんまー あちゆしえー。あんすとう、うりが あまんかい 行ちゆるむん やれー、どうーや よんなーよんなー っんまんかい っち、うんぐとーぐとーわーして、うんぐとー あぬ、むる 何度(なんど) やていん ないるばーてー。

比嘉：ううーんん、んん。

中曽根：うっさ 稽古 せーからー、あんすとう うれー いいー 方法 やんでい 思(うむ)てい、わんにんなー、あぬ、幸喜先生ぬ 稽古、あぬ、演出 そーる 稽古ぬ やり方、あぬ、うったーんかい、なまーなるべくって言って、稽古 長(なが)れー しみとーしが、うったーん また、いちゆなさる あくとうてー、何時(なんじ)から まーんかい また 行(い)かんとー ならんでい いしが あぐとう、思(うむ)いるぐとー、純(じゅん)に 稽古 ならんどー なまー、なかなか、うん。

比嘉：うーんん、そうですねー、でも稽古の大切さがほんとにあの一分かりますね。本番だから、リハーサルだから、練習だから、ではなくて・・・

中曽根：あんし せー ならん。

比嘉：常に全力でやるところに、その人のこのなんて言うんですかね、可能性ですとか、あの発見で、また、

中曽根：そうそうそう、

比嘉：広がって、この人も幅が広がって行くって言うのが、

中曽根：あの一、稽古や 稽古 やぐとー、本番でいせー 都合(ちご)にゆってー 絶対 通(と)うーらん。

比嘉：うん、

中曽根：本番ううとーていや、すんでい 言ちやんてーん、ちゃみしか ならんばーよー。あんすとう、失敗 すしが 多(うふ)さるばーてー。

比嘉：ふうーんん、

中曽根：あぬー、あんすとう、本場ぬん 稽古ぬ とうちから、

『本番ぬ 思(うむ)いるぐとー、どうーぬ 感情ぬ まま っんじゅちぶさる(注 動きたい) ままに っんじゅけー(動け)』と言って、あぬー、しみー しーどうん しえー、

『あっ、くまー っんじゅかんしえー まし』

『くまー っんじゅかんしえー ましろー』って言ったら、あんさーに、

『くまー っやー むのー いひ くーてーん(注 少々) やりすぎ やっさー』とうか、あんし 注意 ないるばーてー、

比嘉：ああーあ、

中曽根：あんしが、うんぐとー さん ぐとーさーに、すぐ 稽古 やぐとー、「あぬやー ぬーさん くいーさん くいーさん」って言って、はい うっちゃー うっちゃー(補注 手抜き)して、あんさーに、本番 なくてい すんでい すさやー。あぬ 要(い)らん むんぬ 入(い)ってい ちゅーるばーよー、どうーくる。要らん むんぬ 入ってい ちゃーに、

「あいやー いひゆーなー やっさー」とうか、うんぐとー 入っち ちゅーるばーてー。

衣装 やていん あん やるばーてー。前(め)ーや 衣装(いしょ)ん あたんよー。衣装 やていん ちゃんとう、うぬ っちゅに 当たいるぐとー 衣装ん っんじゃち、準備(じゆん)し 置(う)ちきとーていん、ほんにのー(注 本人は)、本番 うり 着(ち)らんぐとーさーに、びちぬ むん 借(か)てい ちゃーに、着ちやるばーてー。あんすとう、うりが 全然 当たらん 衣装 着(ち)やーに、

比嘉：うーん

中曽根：あんせー んーちゃ、わんねー っちゅからん 言らりーい、

「いえー、ぬーんち あれー あぬ 衣装 着(く)してーが、」って言って、

「すみません。衣装 っんじゃちえーしが、気に入らんみたい やいびーん。」でいちゃー、詫(わ)び さしがてー。出したものをね、っんじらん、好(し)かんだー、「好(し)かん、びちぬ むん 欲(ふ)さらー、「欲(ふ)さん」でいれー、っんじゃすんでー。

「よー、おー」んち、とうやーにやー、

本番 なたくとう、全然 違う、違う 衣装 着(ち)ちよーるばーよー。

比嘉：はあーあ、

中曽根：うんぐとーん あぐとーてー、あんすぐとー ぬー やていん、本番 するぐとー、衣装 っんじゃちやらー、っんじゃち とうらちやらー、くり 見(ん)じやーに、

「先生、うんぐとうー、あのー なーひん ちゃんぐとうーが 着(ち)ーぶさん。」でい 言ーどうん しえー、
 「あたらんどー っやー くぬ 役(やく)ねー」って、“ぶんじゅり”よー。“ぶんじゅり” っんじとーてい、
 “ぶんじゅり”んでい いしえー なー まーから やていん う客(ちゃこ)ー ちゅーん。うんぐとうー さつとーる じゅり やさやー。あんすぐとう 衣装や ちゃっさ やていん あん、ふんとーや。現実に 言ーねー。あんしが、あしが、うりぬ うりんかい 合(あ)ーさーに、あぬー、っんじやちゃぐとう、
 「地味！」んでい 言やー 着(ち)らんばーてー。
 「地味」んでい 言やーに 着らん。
 “あからふたらーむん” 着(ち)ち ちゃーに、本番 着(ち)ちゃぐとう、わんねー うどうるちてー、
 「はー、あきさみよーなー でーじ(注 ー大事) なんとーんやー」んでいやーに、
 あんさーに、終(う)わていから 言(い)らりやーに、
 「申し訳・・・すみません。」んち、わんねー なー 侘(わ)びっし、あんさー、
 「ぬーんち っやー、っんじやちえーる 衣装 着(ち)らんたが？」んでい、とー 笑(わら)てい
 「たーから 借(か)たが？」んちゃとう、
 「たーから 借たん。」
 「ああ、あぬ っちゅが むんどうん やれー、分かいさ。」んち、わんねー 言(ち)やるばーよー。
 あんちゅが むんどうん やれー、うんぐとうー 衣装 持(む) っち ちゅーし
 ウフッフ・・・(控えめに笑う)
 もう大変だから、いろんなことがあるから、ぬー やていん 本番 するぐとう、っし、みしてい くいり んでいし、っんま やるばーよー、うん。

比嘉：うーんん、

中曽根：あぬーてー、上手(じょーじ)下手(へた)ぬ 問題(むだ)じゃない。あらん、下手 やていん、あぬー、稽古(けいこ) 何(なに) 回(かえ)り しみーどうん しえー、感情(かんじ)が出て来る。気持ちも出て来る。あんしーねー、自然(しぜん)とう セリフ(せりふ) うぬ 感情(かんじ)に乗(の)って、ちゃーんと出て来る。

「あひぐわー」どうん やれー、「あひぐわー」 ——補注 下げ調子(したてい)で心配(しんぱい)ぎみに——

「あひぐわーあ」どうん やれー、「あひぐわーあ」 ——補注 揚げ調子(あげてい)で明る(あかる)く——

こう言った感情(かんじ)に乗(の)って、セリフ(せりふ)の打ち(うち)方もある。あんすぐとう、稽古(けいこ)すれば稽古(けいこ)するほど、いいー (注 良(よ)い)むん やしが うったーや うりが、分からんばーよー。

比嘉：うーんんん、

中曽根：あぬ、下手(へた) やていんてー、大勢(おほせ)ぬ 中(な)に ちゅい(一人) 目立(めだ)ちゅしが、っんじてい ちゅーる ばー、かんなじ。

比嘉：ふうーんん。

中曽根：くーてんぐわー 違(ちが)いいるだきっしんよー、目立(めだ)ちゅるばーてー。

「あぬ あれー、うりが すしえー うむさっさー」とうか、

「うれー おい、上等(じょーとー)ぐわー やっさー」とうか、かんなじ 眼(み)に 付(つ)ちゅんよー。

比嘉：うーんんー、

中曽根：あんすぐとう、大勢(おほせ)、その他(その他)メンバー っんじーねー、かんなじ わんねー、うったー ちゅいなー ちゅいなー っんじゅち(動き) み(見)ーるばーてー。っんじゅち方(かた) 見(み)やーに、あぬ 「ぬーんち、むる ゆぬ っんじゅち方(動き方) すが、なーめー まし やるぐとう っんじゅち まー (注 動(うご)いて見よ)」と言って、あんし

「むる 一(ひと)齊(せい)に あまんかい 行(い)ちーねー、あまんかい 行(い)ちゅん」

「くまんかい 寄(よ)り」んでい 聞(き)ちーねー、くまんかい 下(う)りてい

「うんぐとうー さんぐとう、あまんかい 行(い)ちゅしん ううん。くまかい うちゅしんううん。くんぐとう、むる どうーくる 思(うむ)いるぐとう っんじゅち まー」と言って、こんなしてしないとよ。なー うったーや、言(い)らんてー うぬまーまー。

中曽根・比嘉：アッハッハッハ —— (共に笑(わら)い合う) ——

中曽根：どうーぬ 思(うむ)いるぐとう、ただ 思(うむ)いるぐとう、りっばっし っし くいれー しむんてー、考(かんが)げ)ーてい しえー しむしが。指図(さしず) さん かじれー、指示(しじ) さん かじれー、うぬまーまー よー っんじゅ (動き)ちよーる。

比嘉：今私(いま)なんかも同感(どうかん)なんです。けどやっぱり、言(い)われたことしか出来ないって言う、ほんとにもう、あのー

中曽根：そうそう、

比嘉：凄(すご)くそこら辺(あたり)の幅(ひろ)がないと、引き出しがないって言うか、でもやっぱり、お芝居(しばい)の中では、自分で考えて、自分でどこの方にいた方がいいのか、何をしたらいいのかっていうのを考えて、動きなさいと。

んでー、自分が持っているものをどんどん全部出した中で、はいじゃー今度(こんど)これを使って、これをやりなさいって言うのを、演出(えんしゅつ)の方が、あの自分の持っているいいものを決めてくれる。だからあるものもないものも全部出して見て、

中曽根：そう、

比嘉：って言うところでは、常に本番(ほんぱん)同様にリハーサル(リハーサル)からやってみないと、この人(ひと)の中に何が(なに)いいものが、光(あ)るものがあるのか分からない、って言うところでは、いろいろやっぱり、

中曽根：そう、あん やんどー。だから、あんすぐとう、「本番(ほんぱん)に すんでい いしやかねー、稽古(けいこ)から ちゃんとう っし まー」って、言うの。

比嘉：うーんん、

中曽根：あんさーに、あんしーねー、かんなじ、あー くれー、次(つぎ)ぬ ぬーがらぬ また ありんち、うりが っんじゅちかたー、使(ちか) ーりーさーって言うのが、出て来るわけ。

比嘉：次の、あの、あれに取って置けるんですね。

中曽根：なまー、うれー あぬー うれー なまー 当たらんとう、うりとう やれー、あぬ わざとう 当たたいさやーとうか、うんぐとうーが っんじてい ちゅーるばーよー。発見が、うん。出てくる。っんじてい ちゅーぐとう、あぬー、うったーんかい 自由に っんじゅち くいれー しむしがる、

中曽根・比嘉：ウッヘッヘッヘッヘー —— (共に笑い合う) ——

比嘉：そうですね、もう先生の頭の中には、今だけじゃなくて、次の舞台、また次の舞台も、あつ、じゃー今度、この人を活かすためのこの、あの一、劇をしようと、

中曽根：劇もまた、

比嘉：しようとかって言うものも、どんどんこう膨らんでくるわけですね。

中曽根：うりが 楽(たぬ)しみ、わんねー。アッハッハッハ

比嘉：あはー、素晴らしい！

中曽根：うりが 楽(たぬ)しみ やしが、だー、どんどん 進めて 行ちゆる ちむえー やしが、くぬ コロナ(補注 新型コロナウイルス)の所為(せい)で、所為(せい)さーに、むる あがからん。

比嘉：ああ、アッハッハッハ

中曽根：しみー欲(ぶ)さし、いっぱい あしがる。

比嘉：そうですね。

中曽根：ふんとー しみらんとー ならんしが、

比嘉：ほんと今年(注2020年)は、ことごとくもう舞台が無くなって行って、あのうもう、そう言う時代がほんとに来るとは、誰も予測もしない。

中曽根：ふんとーやー、

比嘉：ような時代になって、でー、これをまた先生、『50年誌』の久米ひさ子さんのことばに、「移り変わる激しい時代の中で、舞台を通して、観客に夢を与えることが出来る仕事として、大きな喜びと誇りをもっている。」って言うことばがあったんですね。

ほんとにお芝居をやっている方々は、その、人に喜んでもらえる仕事を出来るって言うことに、自分が誇りを持っていると言うところに、素晴らしいなあって、凄くこう感じたんですね。

もうほんととあの一、中曽根先生にとって、この沖縄の芝居の魅力って、一番やっぱり、先生が思っいらっしゃるのは、どんな風なことなんですかね。

中曽根：あの一沖縄芝居って言うのは、あの一先ず、その国の、あの一なんて言うのか、歴史が一番大事ですよ。その琉球と言う、あの一島の、国の歴史。それとあの一、どう言う民族が暮らして、どう言う生活をしてるかって言うの、くりが 一番 大事。

なまぬ あぬー 生活の 仕方とか、あの一 うれー 百姓(ひやくしよー)や、くんぐとうー 生活そーたんでいせー、また ちぬ(衣)ん、ちん うんぐとうーっしる 着(ち)ちよーたる。が、あの一、さむれーや うんぐとうー 清(ちゆ)ら衣装 着(ち)やーに、ぬーさんくいーさん。こんな、うんぐとうーぬ 比較ぬ あしえー。

比較ぬ あしが、うりやかねー、あの一 くとうばんでい いしが、一番 大事。“ちむぐる”んでいしが 沖縄ぬ くとうばんかい、全体 ひっくるみてい、“ちむぐる”んでいしが あるばーよー。

比嘉：はい。

中曽根：沖縄(おきなわ)ぬ くとうばんかい。

比嘉：はい、

中曽根：うぬ ちゆくとうば(注 一言) 言(い) ーるだきっしん、あぬー、相手(えーてい)ん 心(くくる) やわらちゆん、うん。あんさーに、あぬ なちかしく 思(うま) ーりーん、昔ぬ くとうが。うんぐとうーがあぐとう、“ちむぐる”んでい 言ーしが あぐとう、うちなぬ くとうばなかいや。くり 大切(たいせつ)に っし 行ちゆしえー、芝居ぬ 中(なか)んかいしか ねーらんばーよー。わんねー、うん・・・

比嘉：はあーあ、

中曽根：芝居ぬ 中どうん やれー、“ちむぐる”んでい 言ーねー、うちなぬちゆぬ くとうばとうか、あぬー、普通 使(ちか)いる くとうばー あらん。

あぬ 普通 使(ちか)いる くとうばー、あぬ、

「えー ひゃー。いったーは ひゃー」(補注 ぶっきらぼうな言い方である)

とうか、うんぐとうーっしる 使(ちか)いせー。なま、わらばーたー、

比嘉：はい。

中曽根：あねー あらんぐとう、

「えーっ えーっ えーっ っんまんかい っち まーっ。」

「とー っんまんかい いいち まーっ。」(補注 やんわりとした言い方)

とうか、うんぐとうーっし、やわらさる くとうばが、うちなぬ ふんとーぬ くとうば やるばーよー。

あんすぐとう、くぬ うぬ うりだきさーに、“ちむぐる”んでいしが でき(出来)てい ちゅーるばーてー、うちなぬ くとうばんかいや。

うちなぬ 島(しま)や ふんとー 島、あの一 情けの国。

比嘉：うん、んんー、

中曽根：愛情、愛のある島。

比嘉：うーんんんー

中曽根：あんすとう、“ちむぐくる”ん もう たっぷり あるば一て一、うちな一ぬ、琉球(りゆーきゆー)んでいる島や。

あんすとう、くぬ “ちむぐくる” 大切(たいせつ)に っし、くり 大切に 芝居かい、絶対 崩さないように、持(む) っち、あぬ、乗(ぬ)してい ちゃー 乗してい 行かなや一んでい 思と一るば一て一。とう一てい うった一んかい、“ちむぐくる”んでい いし ゆー 知らさんと一 ならんしが、な一だ、な一だ、まだまだ わんね一 なら一しえ一ゆーさんぐとう、まだ 半分る なら一ちえ一る、はんぶぬん(注 半分も) なら一ちえ一 ね一ん はじろ一、わんね一。な一ひん な一ひん なら一さんと一 ならんしが。うん。

いっぺー 大切んでい 思と一ん。うん。

比嘉：はい、

中曽根：“ちむぐくる”、一番、“ちむぐくる”。うん

比嘉：うーんん、

中曽根：あぬ、芝居 見(み)るだきっしん、心(くる)ぬ やわらちゅん。

比嘉：うん、ほんとに、あの一、

中曽根：ふんと一、うちな一ぬ 芝居、うちな一くとうばぬ 芝居 見(ん一)じゆるだきっしん うとうすい(お年寄り)方(がた)や、な一、

「はっさみよー な一、でいきと一たんどー」

と言って、あん 言らり一し、いっぺー っうい一りきさん(補注 とても愉快だ)。

うとうすい方が、や一、喜(ゆるく)ば一に、

「はっさよー 出来(でいき)と一たんどー」んでいち、喜(ゆるく)でい 帰(け)一てい めんしえ一し、うりだきが 楽(たぬ)しみ やいび一ん。

比嘉：はあ一あ、日常会話の中にない、また、お芝居の中にあるこの“ちむぐくる”が、そのお芝居の中にある。あの一これをですね。

先生、あの一、名護市民会館でやった「むかし子守や一節(んかしくわむや一ぶし)」の、あの一、舞台を見た方が、中曽根先生のあの「むかし子守や一節」の歌を聞いていると、もうここ(補注 胸のあたり)が締め付けられるような思いだっけ言う方が、もういつも、言うんですよ。

中曽根：うん。

比嘉：あれ、もう1回見たい、あの歌を聞きたい、って言うのがあったんですね。

中曽根：うん。

比嘉：先生、ぶしつけではありますけど、「むかし子守や一節」のあの一場面のセリフか、歌かを、ちょっとこちらで1回、あの一、ご披露できないですか・・・

中曽根：あつ、つくわむや一ぶしの・・・

比嘉：はい。あの一、

中曽根：なんか、最後の場面、

比嘉：子どもの、あの一・・・

中曽根・比嘉：アッハッハッハ —— 共に笑う ——

比嘉：あの歌がね一、凄くね一 忘れられないって言う方の、あのお年寄りのことばが、

中曽根：うーんん、

比嘉：もうあの場面を思い出すだけで、ここがなんか締め付けられるって言うか、温かくなるって言う方が居て、

中曽根：ふうーんん、ありがたいです。アッハッハッハ一

比嘉：今ここで、即興でお願いしても、

中曽根：即興で？

中曽根・比嘉：アッハッハッハ一 —— 共に笑う ——

比嘉：いいですか？

中曽根：んん一、かなみ かなし一 だよね。・・・

うん、分かりました。

え一とっ、どうしようかな。どんな・・・

うーんと すわってていいかな一・・・

比嘉：はい、セリフからでもいいですし、歌からでもいいです。

中曽根：〈セリフ〉 かなし一、すーが うたいどうんさ一

わしらんぐとうし いちまでいん

うびと一てい とうらしよ一 かなし一

〈歌い♪〉 1 んかし一 くわむや一ぶし一い

ぬ一 さ一ま くぬ とうちに一い

う一た一てい一 むてい くいたる一う

ひ一とう一ぬ な一さ一き一

2 うみわらび一 しか一ち一い

な一ま一どう うみしゆ一る一う

ん一か一し わん むた一る一う

ひ一とう一ぬ な一さ一き一い

——補注 切々たる思いのこもったセリフと歌の実演であった。——

中曽根： これで、いいですか。
 比嘉： ああああ —— 会場から拍手起こる ——
 素晴らしいです。
 中曽根・比嘉： アッハッハッハー —— 共に笑う ——
 比嘉： なんかい思い出しました。アッハッハッハー、
 あの場面を、アッハッハー・・・
 ああでも、ほんとにあの一、凄いことばだけじゃなくて、このことばのこの中にこもったあの、親の心とか、
 ほんとに優しさがこう伝わって来る。アッハッハー、
 あの一、歌とセリフですね。ほんとに凄いなーと思います。

—— 迄 対話 ——

比嘉： はい、あの一今日は、お客さんがいない中で、まっ、何名かの観客の中でなんですけど、このようにあの中曽根律子先生の、まあ、乙姫そしてうない迄、約50年余りあの一、沖縄のお芝居に関わって、で、いろいろな若手をこう指導して来て、ほんとに沖縄のお芝居が、沖縄の人たちにとって、あの一、こころの拠りどころであり、“ちむぐくる”であり、これを残すことが、うちなーんちゅのほんとに、あの一、大切なものを残せるって言うところを、あの一、おっしゃって下さって、まーこれを今また、若い、あの一、みなさんに伝えるって言うところで、ほんとに私たちも一つでも多く、その先人の残してくれた文化を受け継いで行きたいと思っておりますので、先生も是非、今後ともご指導、ああ、よろしく、あの一元気なかがり、ぜひよろしく願いいたします。
 今日はほんとにありがとうございました。

中曽根： にふえーでーびたん
 比嘉： いっぺー にふえーでーびる

—— 対話 完 ——

6-2 第7回講演会アンケート集計結果

日時：令和2年11月15日
 (YouTube 配信)

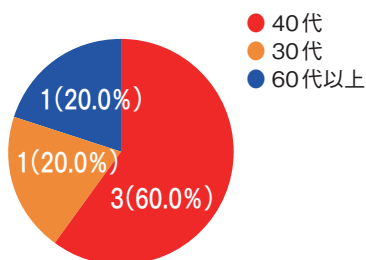
講演会タイトル：芸能から受け継ぐ「^{よく}誇らしやしまくとうば」

視聴回数：ダイジェスト版2,860回完全版43回

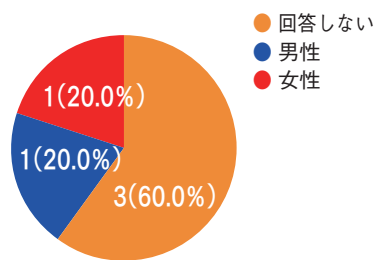
期間：令和2年11月15日～令和3年6月30日

アンケート回答数：5件

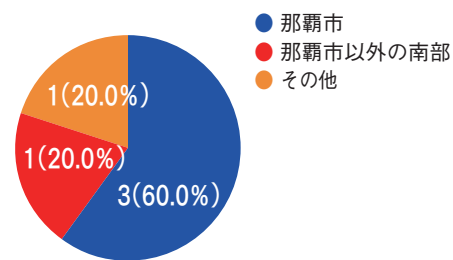
1. 年齢



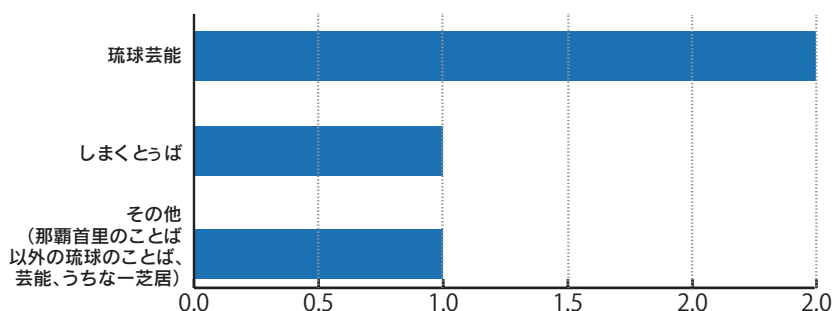
2. 性別



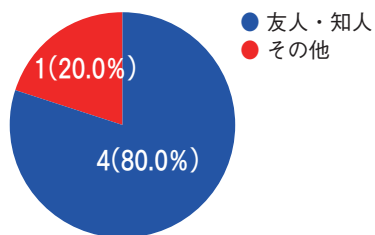
3. お住まいの地域



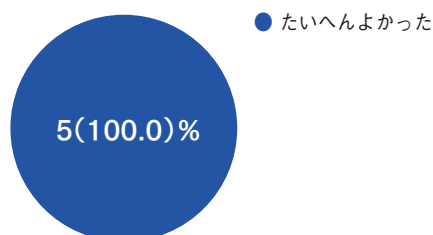
4. 興味ある内容 (複数回答可)



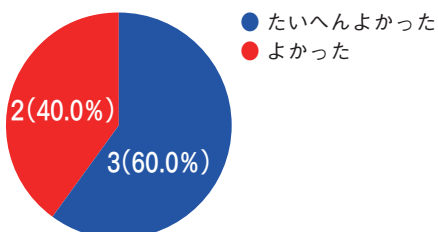
5. このイベントをどのように知りましたか？



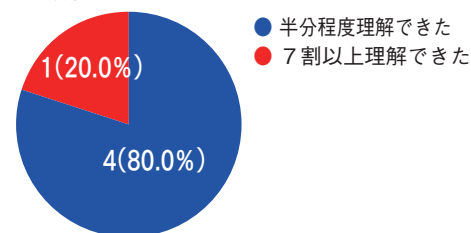
6. 講演はいかがでしたか？



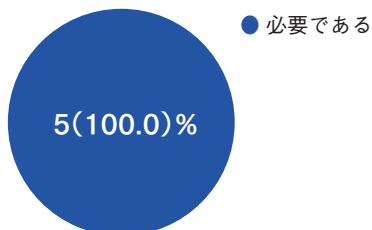
7. 前段の芝居「楽しき朝」はいかがでしたか？



8. 今回使用されたしまくとぅばをどの程度理解できましたか？



9. 本学の琉球芸能専攻におけるしまくとぅば実践教育事業についてどのようにお考えでしょうか？



10. 本事業および今回の講演会についてのご意見ご感想（今後の講演会に出演してほしいひと）などがありましたら、お書きください。」

- ・ YouTube動画に書き起こし字幕を付けてほしいです。簡単にできます。
- ・ 芝居のうちなーぐちと講演会の字幕をやればさらにいいと思います。日本語の字幕はいらない。うちなーぐちの字幕が必要。勉強してる人たちに役に立つと思います。

6-3 第8回 講話テープ起こし

翻刻：平良 徹也(県芸大芸術文化研究所共同研究員)
 沖縄語表記・分かち書きチェック：西岡 敏

ー 舞台中央左より、鈴木耕太、比嘉康春、比嘉聡の3氏が客席方向に向き着席、座談会形式で会は進められたー

鈴木耕太：(以下 鈴木)：ぐすーよー ちゅー ううがなびら。えー 沖縄県立芸術大学 ぬ 鈴木耕太(すずきこうた) なとーいびーん、ゆ(良)たさるぐとう うにげー (お願い) さびら。
 えー ちゅーや、「誇らしやしまくとぅば」ぬ 第8回講演会 ぬ ごよーし(ご様子) 御目掛(うみか)きやびら。えー くぬ 講演会や、沖縄芸能(うちなーじーぬー)ぬ 第一人者ぬ 先生方(しんしーがた) う招き そーてい、えー 芸能(じーぬー)ゆんたく、えー 1時間ばかり、えー 御目掛(うみか)きやびら。えー わんねー ちち役(聞き役)んかい えー しみらっとーしが、えっ シマクトゥバ またウヤメクトゥバ(敬語) すっとうん(補注 ちっとも：少しも) ねーびらんくとう、えー ヤマトググチ また ウチナーヤマトググチ えー 継ぎ接ぎ っし うとうどうき(お届け) さびーぐとう、ぐぶりー やしが えー ちちわきてい くいみそーりよーさい。
 えー まじえー あのー 両先生方んかい う話し ゆんたく さびーしが、えー 両比嘉先生 やいびーぐとう えー ぐぶりー やしが う名前 でい えー 呼ばせていただきたいと思います。えー 康春先生(やすはるしんしー) それから 聡先生(さとしんしー)。
 えー うぬ えー 先生(しんしー)から まじえー、くーさる じぶのー (註 時分は) えー ご様子(よーし) ですね、えー 康春少年。えー まーでい(何処で) すだてい(育て) えー まーなーふあんかい っんじていとか、芸能とか 村踊りとか そのような う話し 聞(ち)かしみせーりよーさい。

比嘉康春先生：(以下 康春)：とー あんせー わんからやー。

鈴木：はい、康春しんしー さい。

康春：はい、・・・ 比嘉康春んでい 言(い)ちよーいびーん。見知(みーし) っちょーてい うたびみせーびり。えー わんぬ 生(っん)まりや えー やんばるぬ 東村ぬ 有銘(あるめ)。

鈴木：あるめ(有銘)

康春：んー やぐとう 学校や 有銘(あるめ)小中学校。小中学校じぶん(時分)のー どうしぬちゃーとー むる あー ウチナーグチ。当時や ほーげん(方言)んでい い(言)たしが。

鈴木：方言(反芻している様子)

康春：うりしる むる 話(はな)し すたる。やしが、あー 学校ぬ ちゃー(補注 いつも) 校訓んかい “共通語励行(きょうつうごれいこう)” んでい クトツバが あやーに、

鈴木：んんん

康春：学校し、むるし 共通語 使(ちか)ら んでいぬ くとうぬ あてーぐとう、しんしー めー(前)ううてー 共通語。やしが、どうしぬちゃーとー、方言 まんちゃーひんちゃーっし、んぐっし(補注 うんぐとうっし： そのように) ちかとーたん。

えー いっぺー あぬー 失敗談ぬ あしが、校長先生(こーちよーしんしー)が、花壇ぬ 花(はな)ぬ 手入れ そーるばー。だー うぬ とうちに わんぬー えー、 「校長先生(こーちよーしんしー)。なに してるばー かー？」

鈴木：—— 思わず吹き出して、笑いをなかなか押さえられない ——

康春：んでい、言(い)ちやぐとう。

「ばーかーとは なんだ。ばーかーとは・・・『何をしてるんですか?』って 言いなさい!」と、めーごーさー(註 げんこつ) くわーさつたる くとうぬ あんよー。うん。あー うんな くとうしー えー まー どう しぬちゃーとー 話し そーたん。

えー わったー 時分ねー、えー な 方言札(ほーげんふだ)や ねーんたしが、

鈴木：あつ、ねーらんたん。

康春：えー、あぬー、すぬ 何年間めーまでいや あたん はじ やしが、わったー ばー なー ねーんたしが、 やしが、うぬ 黒板ぬよー 教室ぬ 黒板ぬ 右(みぎ)はじぬ とうくまかい、

鈴木：うん、

康春：ちゅー(今日) 方言 ちかたる っちゅ(人)んでい 言(い)やーに 書(か)ちゆる 欄ぬ あぬばー

鈴木：ううーう

康春：だー っんまかい かななじ ちか(使)たる なー(名)が なーちゃ(註 翌日)までい ぬくとーぬばー

鈴木：ううーんんん・・・

康春：うん。やくとう くれー ぬくとーくとう うー うぬ たみなかい

「うれー ちゃー すが?、消(ちゃ)ーすしや ちゃー すが?」んでい 言(い)やーに てーつ、あんさー に がんまりさーに、うしるくぶー(補注 盆の窪：後頭部うなじの窪み) ばんみかちやい、

「たつくるさりーんどーひゃー、っやー 使(ちか)たんやー」んでい 言(い)やーに、わんぬー うんな あぬ 日(ひー) すごちよーいびーたん。

鈴木：ううん・・・

康春：やしが 家(やー)ううていや、あぬー おばーが ううてーぐとう、おばー とー むる うちなーぐちさーに。やしが わったー いいきがうやー(父親は)、役場ぬ、あぬ、職員 そーてーぐとう、役場ぬ 職員でいれーから 共通語励行ぬ 推進者 やくとうやー。やぐとう おとーとう おかーとー むるし、えー ヤマトウグチさーに 話しー すたしが、やしが、おばー、あるいは ちよーでーぬちゃー、むる、あつ ちゅけーとうないぬ っちゅん、むる うちなーぐち。当時や ほーげん(方言)んでい っゆ(言)たしが、うりし 話し そーいびーたん。うんな あー しまくとうばぬ ぬーな 環境 やいびーたん。

鈴木：環境・・・はいはい。

えー ちじえー(次は) 比嘉聡先生(しえんしえー) ゆたさるぐとう うにげーさびら。

比嘉 聡先生：(以下 聡)：いいぬ 名(な)ー(註 同姓の) 比嘉 やいびーしが 聡(さとし)んでい 言ちよーいびーん。ゆたしく うにげーさびら。

えー わんが くーさる 時分でいる、わんぬー っんまりや 久志(くし)ぐわー やしが なまぬ 名護市。久志ぐわー(字久志) やしが、ほとんど あぬー 生活 さしえー なー なーふあ(那覇)。学校 っんじたんでい いしん なーふあ。

鈴木：シティボーイんでいち、うー

聡：ほとんど なーふあすだち(那覇育ち) なとーいびーぐとう。えー わったー 時分や うちなーぐちんでい 言(い)らん、方言(ほーげん)でいる 言(い)たる。

鈴木：方言(ほーげん)。

聡：「方言 ちかてー ならんどーやー」んち、学校んじ うすまさ 言(い)らったしが。あんしねー、まー わったー 先輩(せんぱい)までいや あぬー “ほーげんふだ(方言札)”

鈴木：方言札

聡：「方言札」んでい いしが あたん はじ やしが、わったー じぶのー なー ねーらんたん。

康春：ああ、

聡：学校んじや あぬ、この 週訓(しゅーくん)でい いしが、校訓(こーくん)でい い(言)ーがやー、

鈴木：週訓

聡：この「方言を 使わないように しましょう」

康春：あたんやー —— 頷くようにふっと漏らす ——

鈴木：使わないように

聡：とか、まっ あぬ、康春しんしーたーん 私も なま あのー 話し てーげー にちょーんやー。

康春：うんうんうん

聡：うぬ 時分 あぬ 「方言を 使わないように しましょう」。
「うちなーぐちえー ほーげん ちからんげーやー」んでいち、あのー、そう言う教えでしたね。だから、うちなーぐちんでい いしえー わったー なーふあんちゅや あんすか ちかてー ううらん。

鈴木：ううーんん

聡：やぐとう あぬー、わんかい なー うちなーぐちんでいーしえー 似合(にーあ)らんしが、ちゅーや なー うちなーぐちぬ 芸歴ぬ 話し しえーんでい い(言)ーぐとう うり オッケイ(OK)し っんまかい ちゃ(来)しが、なー えー 芸歴ぬ 話やねー ちゃっさ やていん ないしが、うぬ うちなーぐちし あびーしがよー、うりが なー でーじ なとーさやーんでい うむ(思)いしが。
えー くーさる じぶのー まー なーふあ。学校ん なーふあ。中学校 むる なーふあんじ っんじてい、えー 方言でい いしや えー ちかてー ううらんぐとう、なかなか あぬー うやぬちやーん 方言 ちかーらん。わったー おばーん ううたしが、おばーん あんすか 方言や あびらん。えー うぬ なー 第一(だいいち) うぬ 家(やー)んじや うぬ 方言 ちかてい 話しー さるくとう ねーらんぐとう、なー ちゅーや 方言講座 やしが くねーてい くいみそーり。えー わったー 方言が とうーいが すら(註 通用するの)か) ぬーがら 分(わ)からんしが、えー くーさる じぶのー ゆー、あのー、わねー おばーんかい 良(よ)く あのー 芝居(しばい) んー(見)じーが、

鈴木：ほうーう

聡：まー、芝居 んー(見)じーが ゆー そーてい い(行)かったんやー。うれー なー 幼稚園がら ぬーがら まー 覚(うび)てー ううらんしが、うぬー、わったー 家(やー)ぬ 近(ちか)くんかい、あぬ、あけぼの劇場んでい いしが あてい、

康春：ああー

鈴木：あけぼの劇場

聡：その 芝居小屋、で、ゆー あのー 芝居 見(ん)じーが そーてい 行(い)かったぐとうやー。やっぱり うぬ 辺(へん)ぬ うぬ サンシンぬ 音(うとう)、太鼓(テーク)ぬ 音(うとう)、っんまりかーが、えー、うふさっ まぎー なてい えー まーがらんかい 覚(うび)とーたんが あらんがやーんち えー なま うみー(註 思い)ねー そう感じます。
な うちなーぐち ヤマトグチ えー 交互に あびーぐとう えー くねーてい くいみそーりよー。

鈴木：うん

聡：えー 幼少時代は まー 大体 やんばるに 行って、やんばるかい 行(っん)じ あぬー どうしぬちやー いちゆくぬちやーとう 遊(あし)だるくとうしか 覚(うび)てー ううらん。えー くらーぐわー(雀小) とうたい、えー かー(川)んじ 遊(あし)だい、海(うみ)んじ 遊(あし)だい、やんばるぬ イメージんでい いしや なー うんねーる くとうしか、まー わんねー ねーらんよー。ほとんど なーふあぬ 生活 やいびーぐとう まっ なまから えー いるいる 話しぬ っんじやびーんでい 思(うむ)いしが、芸談 やれー話し さびーぐとう、えー くーさる 時分ぬ 話しや あんまり 覚(うび)てー ううらん うっさし しむがやーさい

聡：うーうっ、

康春：くぬー 小中学校や むる えー まー うちなーぐち やたしが、高校 っんじ、高校だったら 辺士名高校、

鈴木：辺士名 また かーまんかい(補注 そんな遠くに)・・・

康春：うん、あまー 国頭村、それから 大宜見村、東村。っんまから しーとう(生徒)ぬちやー 集(あち)まてい ちゅーしえー。あんしえー むる シマジマ 村々(むらむら)ううてい くとうばぬ 違(ちが)いぐとうよー。

鈴木・聡：うんうんうん・・・

康春：うぬ 方言ぬ 通(つー)じらんばー。

鈴木：あっ はー・・・

康春：やぐとう 高校 行けーからー くんどー なー ヤマトグチびけーしえー

鈴木：あっはー

康春：んーな うんな とうくまん あたん。

鈴木：ああー この 辺士名高校んかい えー 行ちゃびーがやー えっ、寮に 入(いっ)てい(入って[いっち])?

康春：うん わんねー 寮んかい 入(いっ)ちよーたん

鈴木：寮んかい・・・

康春：うん、わんねー 寮んかい 入(いっ)ちよーたん、三年間、

鈴木：うううう、寮生活ぬ なーかんかい 標準語?

康春：いや。むる 標準語

鈴木：ああ

聡：小学校から うぬ どうしぬちやーが むる まじゅん 方言 ちかたんでいしえー。わったー どうしぬちやーや なー 方言 ちかいていしえー ううらんでーぐとうやー。

鈴木：んんんん

聡：なーふあんじえー(註 那覇では)

康春：あんしえー どうーぬ シマぬ とうないぬ えー 東村ぬ なーかううていん、川田(かーた)とうか 平良

(てーら)とうか、
鈴木：うー うー う (註 返事の「はい」に同じ)
康春：っんまとうん くとうばぬ 違(ちが)いしえーやー
鈴木：うっ、
康春：バスが 来(く)んでい 思(うむ)いねー 川田(かーた)ぬ むん 「きっちー すんし さしが ひゃー きゃー すがやー」とうか、
鈴木：あっはっはっはー
康春：「きゃー きー きゅー きえー こ」とうかねー
鈴木：「きゃー きー きゅー きえー きよー」
聡：ほんと・・・
康春：「はんめー わーらんとー はじ はちよー」ってから。「ぬー やん？」、「くりびげーん 分(わ)からん 恥(はじ) かちよー」
鈴木：んんーんん
聡：いっぺー むちかさん、
康春：うんな くとうばが あのー 高校の 場合や むる なーめーめーぬ シマぬ ちゅぬちやーとう 話しぬ ばー(註 する場合) うんな くとうばが とうびかやーに でーじな あぬ 不思議(ふしじ)な 世界(しえかい) やたん。
鈴木：ううーんん
聡：うんねーる 話し しーねー わったー うれーまさんよーやー。わったーや うんねーる あぬー うちなーぐちえー ちかてー ううらんぐとう、わったーが ちかたしえー、うぬー 「方言 ちかてー ならんどーやー」んでい い(言)ち しーねー、うぬ “方言札”んでい 言(い)しや ねーらんしが、ちゅ(人) 打(う)たっち しーねー
「あがー」んでい 言(い)しえーやー、
康春・鈴木：ううう、ふっふっふ —— 同意を示して小さく笑う ——
聡：「方言 ちかいたんやー」んち、—— 康春・鈴木、さらに笑いを強める—— こんな世の中でしたよ。
康春：わん とうじ(私の妻)や また、奥(註 国頭村)ぬ 出身 やぬばー。
鈴木：ほうー、
康春：奥(うく)や なー ゆくん なー また、あぬ、くとうばぬ かわいくとう、あぬー 話しぬ ならん。とう じん 使(ちか)いよーさん、聞(ち)ちよーさん、
鈴木：うーんん
康春：やぐとう なまちきてい わったー 家(やー)ううてー とうじとう、あるいは あのー くわぬちやーとう うちなーぐちんでい いしえー あぬー ちかーららん。話しぬ ならんぐとう。
鈴木：はあー、話しが・・・ —— ふと漏らす ——
康春：わーが 使(ちか)らなやーんでい 思(うむ)いねー とうじが 分(わ)からんぐとう
鈴木：うううう。じゃー 比嘉康春家は あー 多国籍・・・
康春：ふっふっふー —— 発言を笑いで受けている様子 ——
鈴木：やんばるぬ 多国籍・・・
康春：多村籍(たむらせき)かも 知らん・・・うん
鈴木：えー まー ちねー(註 家庭)ん なんとん。
えー なんか あの あれですね、(補注 私は)日本語交じりながらじゃないと ちよっと話しが続かないんですけど。
同じ時期に(補注 お二人は)生まれて、えー 育てているのにもかかわらず、この やんばると その なーふあとう また しまくとうばぬ 使(ちけー)よー、ま、方言の ちけーよー(補注 ちけーよう[様]:使い方)が なんか違うって言うのはものすごく感じるなーと。
で、まー、僕ら世代、僕は四十(歳)なんですけど、わったー しでー(世代)や あのー、方言や むる あのー 「はごー」(註 下品ないし汚い)」という言い方をしていたんですよ。
「方言 使(ちか)いねー うれ “はごー” やくとう 使(ちかー)らんどー」って 言っているのが、方言だったんですけど、言(ゆ)ってる人が。
だからやっぱり、日本語励行が少しまだ残っている時代だったのかなーと思っています。
今はもう、しまくとうばーは やっぱり 芸能 それから、まー、えー。ま、文学もそうですけど、うちなぬ 文化そのものが、やっぱり、しまくとうばで成り立っているところが大きいので、やっぱり あのー 使えなくても 間違っても使いたいと思って いまこのように、えー 一番 あの 康春先生もむずかしい。「あー うれー むちかさんどー。日本語や ないびーしが、しまくとうばんかい 芸歴 ゆんたく さびーくとう いっぺー むちかさん」とか。
それから聡先生にも無理を承知で、えー、お願いしておりますので、ちゅーや、えっ、この時代ごと、時代によって、これまでは、ま、八十代の先生方に そー(註 生粋の)うちなーぐちし えー 語(かた)てい、えー、頂いたんですけども、まー、ウチナーヤマトウグチって言うのも、まあ ひとつの文化、時代のことばかなと思っておりますので、ちゅーや まー、「しまくとうばし 語(かた)びら」んかい あびとーしが えー うんぬきとーしが えーまー ウチナーヤマトウグチ えー ひんちやーまんちやーしち えー ししみ(進め)やびらんでい ち 思(うむ)とーいびーん。
じゃー えっとー 次にお話しー なんですけども、あの くーさる じぶのー その 芸能(じーぬー)との話して あげばの劇場であったり、それから 康春しんしーや えー おそらくですが 村芝居(むらし

ばい)とか、
 康春：うん
 鈴木：有銘(ありめ)の、あの、村芝居が あー、あいびーたしが、その どうーや あぬ ウタサンシン しち
 えー とぅか、また 太鼓(テーク) 習いがやーんでいちえー 思(うむ)た 頃(くる)ぬ 話し 聞(ち)か
 しみせーぶり よーさい。

康春：おー わんねーよー。えー くれー てーげーぬ 人(つちゆ)が んーな 経験 そーぬ はじ やしが、わ
 んねー あぬー 高校時代に 長距離さーに 腰(くし) やまちゃーに、
 鈴木：うんうんうん
 康春：あんさーに 卒業 すしとう まじょーん うぬ 腰(くし)の 治療 すんでい 言(い)やーに、大阪ぬ っ
 うえーき、あぬ っうえーか。っうえーか たゆてい っんまかい 治療 しーが 行(っん)じゃん。あまく
 ま 病院んじ、
 鈴木：うーんん
 康春：あんしが、えー うちなー 初(はじ)みてい えー 離(はな)りーくとう、
 鈴木：うん、都会 っんじてい・・・
 康春：寂(さび) っさん あい、わんねー また うぬ 時分(じぶん)のー 大学ん ポトン そーくとう
 鈴木：うーうー
 康春：なー 初(はじ)みてい 挫折感でい いし 味(あじ)わやーに なー いっぺー 落(う)ちくどーたぬばー
 鈴木：挫折と 腰痛み(くしやみー)、ウフッフッフー
 康春：あんさーになー 大阪 行(っん)じょーしが、うちなー 懐(なち)かさぬ。ちょーどう うれー おばさんぬ
 おうち、うち(家)、家(やー) やたんよー。っんまかい 古典音楽ぬ レコードが ていーち あたん。
 鈴木：あっはー
 康春：やぐとう うぬ 家(やー)ぬ ちゆぬちゃーが ううらん なていから、なー あぬ 故郷(くちよー)ぬ ぬー
 がら 香(かじゃ)んでー しーぶさぬ
 鈴木：うーっ
 康春：うぬー レコード 掛(か)きたれー、なー 「かじゃで風(ふう)」ぬ 掛(か)かてい ちゆーせー。あんし
 うれー 村芝居とうか やー。
 鈴木：うー
 康春：あぬー すーじじゃー(祝いの座)ううてい やんばるぬ。っんまううてい ちゃー 聞(ち)ちよーぬ 歌
 (うた) やぐとう、くぬ やんばるぬ すぬー ちゆぬちゃーぬ ゆるくどーぬ 顔(かお) 村芝居とうか
 うぬー エイサーとうか あのー とぅしびーいわいとうか、うぬ ふーじーぬ ゆるくどーぬ すぬ 村(む
 ら)ぬ 風景ぬ 浮(う)かでい ちゃーに 涙(な)だ) なー ポロポロてー なー。
 鈴木：うーーおー
 康春：あんさーに うぬ とぅちに わんねー あんすかなーまでい えー ウタサンシノー 好(し)ちや あらん
 たしが、うぬ ばーに
 「あはっ わんねー うちなーんちゆ やさやー」。
 鈴木：うー
 康春：くり なま 言(い)ーねー、「ああ、アイデンティティ・・・
 鈴木：おっほっほほ
 康春：・・・目覚(みじゃ)みたん」んでい わんねー なま えー 思(うむ)とーん。
 鈴木：あああーんん
 康春：あんし 思(うむ)とーん。やぐとう うちなーんかい あんし 肝(ちむ)さーじゃーとう する あぬー ウ
 タサンシンぬ あてーさー。うれー 早(へー)くなー あぬ、えー 腰(くし) のーちから、ああー う
 ちなーううてい サンシン 習(なら)わなんてい 思(うむ)いしが、なー 腰(くし)ん ちゃー ならわん
 しむさ、すぐ うちなーかい 帰(け)ーやーに サンシン 習(なら)れーやーんち、んでいー あんし
 やんばるかゝい 帰(け)ーてい、
 鈴木：うん
 康春：くんどー おとー(親父)かい、
 「なー わんねー 大学受験ぬ 勉強ん ぬーん さん。わんねー サンシン 習いくとう」んち 言(い)ちゃ
 くとう、
 「やるむん やらー どうーくるし 儲(も)きていから どうーぬ 銭(じん)さーに 習(なら)れー」んでい
 鈴木：んんん、あああ
 康春：あんさーに また なーふあぬ いいなぐしーじゃ アパート 頼(たゆ)てい 行(っん)じゃーに っんまをう
 てい アルバイト しながら んんん あんし 古典音楽研究所 かめーたるばー、
 鈴木：へえー、
 康春：やしが、やんばるから 出(っん)じてい ちゃーき やくとう、
 鈴木：うー
 康春：履(は)ちゆしぬ ねーんせー、しまじょーり(島草履)。ちぶるん プサブサー、
 鈴木：わっはっははは
 康春：で Tシャツ。んーぐし(補注 そんな身なりで) ある とぅくまかい 行(っん)じゃん。名前ん 言(い)
 れーから 分(わ)かいしが なー うれー 言う くとぬ ならんしが、でーじな 弟子ぬ 多(うふ)さぬ
 しんしー やみせーたん。あぬ わん 見(ん)ーちゃーに ちゆばちなかい、

鈴木：うん
 康春：「えー、新人(しんじん)のー 採(と)うってー ううらんさー」んでい 言(い)やーに
 鈴木：はっ
 康春：やぐとう よっぼど くぬ しがい(身なり)ぬ 悪(わ) っさたん はじろー、うん。
 鈴木：うん、うれー ひんすー (貧相・貧乏)、ひんすーすがいつて言うか、ウフフフ・・・
 康春：あんし うりが あていから、つんまううてい「あつはー」んでい 考(かんげ)ーてい、やっぱり 立派(りっぱ)に しくち(仕口・仕事)ん 就(ち)ちやーに、あんし なりふじん(補注 なりわいと装い) 立派(りっぱ) さんでー うれー 古典音楽んでいしえー 習(なら)らん はじ やてい
 鈴木：うん
 康春：あんし つんまから わんねー えー たまたま NTT、NTTぬ 試験 受(う)きたくとう
 鈴木：うー。
 康春：なー うふえー 受験勉強 そーてーぐとう
 鈴木：うー
 康春：ふー、うりぬ うかじ(御陰)なかい とうーてい ねーらん。うん。
 あんさーに ちょーどう 1972年 復帰(補注 日本)ぬ 年(とし)ぬ 12月1日(じゅうにがついっぴ)、
 ちょーどう 入社 する くとうかい なやーに。でー 暫(しばらく)く さーに 仕事(しごと)ん 覚(うび)
 ていから 慣(な)りてい ちやる 時分(じぶん)に ゆぬ シマぬ 先輩(せんぱい)が 安富祖竹久(あふそたけひさ)んでい いぬ まぎしんしー(補注 大先生)ぬ 古典音楽研究所かい かゆとーてーぐとう
 鈴木：あつ、うぬ 人(つつゆ)や、NTTぬ ちゅんちやー あらん?
 康春：んんん、うれー あぬー 名護鉄工所ぬ・・・
 鈴木：うほー、名護鉄工
 康春：わったー いいなぐしーじゃぬ 同級生 やたるばー。うん人(ちょ)ー 琉大ぬ 郷土芸能クラブううてい⇒
 聡：あ、また まじょーん・・・ ——補注 聡氏もこの頃の琉大郷土芸能クラブの一員だった —— ううう。
 康春：⇒サンシン 習(なら)てい、あんし 安富祖先生 めーううてい 習(なら)とーてーくとう、くぬ 人(つつゆ)かい うにげーし、先生(しんしー) 研究所かい つんじやーに いっぺー ちゅーじゅーく うにげー
 さーに あんし 入門し 許(ゆる)さったん。うりが 昭和48年ぬ 4月8日(しがつはちにち)、
 鈴木：ああー
 康春：ヨンパチヨンパチ、
 鈴木：はいはいはい、ヨンパチヨンパチ、
 康春：やぐとう くんどう 49年目。
 鈴木：覚(うび)ー やっさんやー
 康春：とー くりが わんぬ サンシン 始(は)みたぬ なるびち(註 経緯/いきさつ)
 鈴木：ううーわー・・・はい、初(はじ)みてい やいびーたん。うれー あのー 大阪ううとーてい あの 聞(ち)
 ちやる、あぬ、ちちゆる レコード 誰(た)ぬ 歌(うた)んかい、
 康春：うれー 幸地亀千代(こうちかめちよ)んでいぬ 人(つつゆ)ぬ
 聡：あーきさーみよー —— 小声でつぶやく ——
 康春：「かじゃでい風(ふう)」 やたん。
 鈴木：あの頃から もう 野村流、
 康春：うれー 野村流とうか うぬ むる 分からん
 鈴木：うんうんうん
 康春：やぐとう わねー わったー 先生、安富祖 ゃしが、
 鈴木：う、う、
 康春：野村流る やがら 安富祖流る やら 分(わ)からん。
 鈴木：うー
 康春：しんしーぬ むる 「安富祖流ですか？」んちゃぐとう、目(み)ん いへー グルグル そーたんよー。
 鈴木：あはっ、うううう 野村の 安富祖先生・・・
 康春：うぬ あたい 分(わ)からんたん。
 鈴木：ううう あーああ、その十八九って言うか、その高校生、高校おわってから、丁度、その、今の芸大生、一年生ぐらいの年(とし)に、その アイデンティティーんかい みぞみ(目覚め)、みー ひらち えー 古典音楽ぬ 世界(せかい)んかい 入(い)、あのー・・・
 康春：ぬーんち くぬ アイデンティティーに 目覚(めぞ)めたんでい 言(い)ちやがんでい 言(い)ーねー
 鈴木：うん
 康春：わんねー NTTんかい 入(い)しえーやー。NTTんでい 言(い)ぬ とうくまや なー くぬ ヤマトウぬ、からぬ 社員ぬ 多(うふ)さたぬばー。
 えー わったー まんぐらいまでー うぬ ヤマトウーんかい うちなーんちゅ うへー (多少) 馬鹿(ばか)に さりーたんよー。
 鈴木：をーああ
 康春：ううー あんしーねー ちやーしん うったーかい 負(ま)きてい ないみんでい 言(い)やーに、
 鈴木：うー。
 康春：わんが サンシン する くとうん、うへー あぬー こー うしえーぬ(補注 見下す) とうくまが あてーぐとう、
 鈴木：わおーをー

康春：うんにーかい 反抗 すんでい 言(い)やーに、しくち(仕口)ん うったーかい 負(ま)きてー ないみ
とうかやー、

鈴木：うー。

康春：うんな きむち(気持ち) っんじやーに、ゆくん サンシンかい くれー 極(ちわ)みわる やっさーんでい
言(い)やーに。

鈴木：うれー 社風かも 分からないですね。

康春：うーんん

鈴木：このNTTの社風、NTTんでいしえー りゅーちゅー(琉球)芸能の、あの、なんて言うんですかね、いっペー
貢献 そーる 会社んでいちえー 思(うむ)とーいびーん。えー・・・

康春：あんとうちえー いっペー まぎさぬ 会社 やてーぐとうやー、

鈴木：うううう

康春：やぐとう なまぬ 人間国宝ぬ 西江喜春(にしえきしゅん)先生とうかやー、

鈴木：またや 康春しんしー えー また あのー 安富祖流の上(うえ)の えー 大湾清之(おおわんきよゆき)
しんしー むる あのー 重鎮たちぬ あのー 仕口(しくち) そーたる 会社 やいびーくとう、うれー
あのー 沖縄県から 功労賞 あのー NTTんかい 贈(うく)らぬー ならん、ならんさやーんでいちえー
わんぬー どうーくる 思(うむ)とーいびーん。・・・ううーんん、

康春：やくとう サンシン そーぐとうんでい 言(い)やーに また 仕事(しぐとう) 疎(うるす)かに しえー
ならんしえーやー。で、うぬ かわい へーく 仕事(しぐとう) 切(き)り上(あ)ぎやーに、ちゃんぐとうし
サンシン 弾(ひ)ちゅがやーんち、うぬすく うんぬー すくとうよー じんぶのー(補注 知恵は) まー
てい ちゅーしえー、ちゃーし ちゅーぬ 仕事(しぐとう) へくなー 終(う)わらち、あのー 帰(け)ーい
がやーんでい 言(い)やーに、うぬ 為(たみ)なかいや サンシンとう 仕口(しくち)、いっペー 相乗効果ぬ
あたん。

鈴木：ううーううー、納得。

ええー、ちじえー 聡先生(せんせい)んかい あのー 琉大郷土芸能部時代の う話し 聞(ち)かしみしえー
ぶり やーさい。

聡：先(さき)ほどうぬ 研究所 訪(たじ)にたくとう 門前払い くわーさってーぬ はなしやー。うれー 誰
(た)やが 分(わ)かいんばーてーやー、わったーや。

康春・鈴木：アッハッハッハ

聡：分(わ)かいしが あとうから 聞(ち)ちーぬーよー。

「っやー やいぬー 断(く)とうわ)らんたぬむんやー」んでい・・・

鈴木：うーっ、うーっ。

聡：言(い)ってたんですよ。

えー わーが、あぬ サンシンとうか 太鼓(テーク) 始(はじ)みたしや やっぱり さきふどう、あけぼの
劇場ぬ 話し さしが、うぬ あけぼの劇場ううてい、よく 芝居 見(ん)ち あのー わったー 芝居 ぬー
ちん(補注 とは言っても) なさきむん(註 人情劇)や 全然 分(わ)からん、たまに うぬ チャンバラが
っんじてい ちゅーん。うん。うぬ チャンバラどう 見(ん)ち えー 面白(うむさ) そーたる。只(ただ)
そーてい 行(い)かってい おばーが 好(し)ち やたくとう 只(ただ) そーてい いかってい 只(ただ)
る 見(ん)ちよーたるやー。あんしん わったー おばーとう あぬー いいきがぬうや(父) どうーふー(補
注 自己流) やしが いひぐわー サンシン 弾(ひ)ちゅたんよー。

鈴木：おおーううー

聡：いひぐわー(少し) サンシン 弾(ひ)ちゅたしが、まーんじ ふかんじえー 習(なら)てー ううらん。い
ひぐわー サンシン っし、たとえば あのー おばーぬ いちゅくぬちゃーが えー 正月(そーぐわち)
とうか 盆(ぼん)とうか あぬー 集(あち)まてい、ぬーがら あぬー むえー(模合)ぐわー やていん そー
たん あらんがやー。集(あち)まていから サンシン、おじさんたー じょーじ(上手)、上手(じょーじ) やたん。
うり 聞(ち)ちから はー わったー あぬー 古典や 知(し)らんしが、うぬ カチャーシーよー。たいし
ちよーでー 二人(たい)し カチャーシー すし うりる 見(ん)ちよーたるよー。

鈴木：ううー

聡：上手(じょーじ) なてい、「へー あっ うれー、サンシンし あんしん ないさーやー」んでい ただ、ただ
思(うむ)とーたん。うりが いるいる こう 年(とうし) とうてい えー「民謡で今日(けふ)ばなびら(みんようで
ちゅー ううがなびら)」んでい いし、

鈴木：あーあ

聡：うぬ くるから そーてーぐとう、

康春：ラジオで・・・

聡：民謡ううてい すしや ぬーん 違和感 ぬーらん。うんぬーるや ゆー 聞(ち)ちよーたしが、えー やっぱ
り うぬ 思(うむ)いが まーがらんかい 残(ぬく)とーたんでい 思(うむ)いん。

えー 年(とうし) とうてい、えー 高校ん 卒業 しーからー えー 大学 入(い) っち。わったーが
大学 入(い) っちやしえー、あのー 復帰前(めー)、

鈴木：はい。

聡：復帰ぬ 1年前(めー)。

鈴木：うううう、

聡：わったー 昭和46年入学 やぐとう、えー 47年が 復帰 やしえーやー。わったーや 46年に こう 大学

入学し、えー 暫(しばらく)く しーから この 講義 受(う)きーがんち、えー とー この 授業 受(う)きーが 行(い)ちゅんでいち、まーがらから サンシンぬ 音(うとう)が 聞(ち)かりてい ちゅーん。えー まーがやーんち まっ、うぬ とうき(時)や あんまり 感(かん)じらんたしが、講義 受(う)きてい 終(う)わていから、まだ サンシンぬ 音(うとう)が 聞(ち)かりーぐとう、えー かめーやー かめーやーっし っんまんかい 入(い) っっちゃぐとう、えー 二三人ぐらい、この クラブ室んでい いしが あていやー、うぬ 二三日ぐらい っんまんじ サンシン えー 弾(ひ)ちよーたん。っし、入(い) っち 行(っん)じから、「あー サンシン 成(な)らんしが えー 習(なら)ーち くいみそーらんがやー」んち、「あー 体験 ないがやー」んち、

鈴木：体験、ンフフ

聡：「体験 ないがやー」んち 入(い) っっちゃぐとう、んーな うっさ しーよー、やっぱり クラブ 部員が うーらんたん はじどー。

鈴木：ほーをー

聡：「入(い)れー 入(い)れー」んち、体験 しみらったしが 全然(じえんじえん) わからん。あぬー うしチブ(押しつぽ)ん 分(わ)からん。こんな 状態で 先輩ぬちゃーから こう やって、あんし、「稽古日(けいこび)や あぬー 火曜(くわよー) 木曜ぬ 講義 終(う)わていから 5時6時ぐらいから そーぐとう っんまんかい くーわやー」んち、あー クラブ室 あらんぐとう 別(びち)ぬ 講堂、教室 借(か)ていよー っんまんじ 稽古(けーこ) あー 毎週 稽古(けーこ) そーたんよー。あんしえー っんまんかい 行(っん)じゃぐとう、あっ、ビックリ。あん 言(い)やーに 30名 40名 ううしえーやー うぬ やっぱり 各学年10名ぐらい ううてい、1年生(いちねんしえい)や まだ 5、6名 やたしが、あっ うっさ 繁盛(はんじょー) すさやーんちてー、すぬ うぬ 時分(じぶん)から あっ、古典芸能、

鈴木：うん

聡：まっ、古典でい いしん 分(わ)からん、民謡んでい いしん 分(わ)からん。うぬ クラブや 郷土芸能研究クラブんでい 言(い)ーてーぐとう、すぬ クラブに 入(い) っちからん、えー 古典、民謡んでい 言(つゆ)しる 分(わ)かたる。わったー 民謡しか 聞(ち)ちえー ううらんぐとう、古典ぬ 「うーうーうーうー」や、全然(じえんじえん) 知(し)らんてーぐとうやー。ただ おばーたーが うぬ 「きゆぬ きゆぬ」んでいぬーがやーんでい 「かじゃでふー」 弾(ひ)ちよーたるぐらい、あい、聞(ち)ちよーたしが、くぬ クラブんかい 入(い) っち、から 1年生(いちねんしー)までいや、うぬ 先輩ぬちゃーたーから、っわーびぬ 先輩ぬちゃーたーから んーな 習(なら)いしが、2年生 ないねー うぬ 研究所(けんきゅーじょ)かい そーてい 行(い)かったんよー。

鈴木：ううーをー。

聡：習(なら)いが。研究所、2年生。だから復帰の年と わったー あぬー みつふみ(註 島袋光史氏)に 入門。それから サンシンや 棚原忠信(たなはらただのぶ)先生(しえんしえい)に 入門。えー いいぬ 年(とうし)、いいぬ 月(ちち) 5月 やたん。

鈴木：ううー

聡：だから 復帰、復帰や まーだ しえー ううらんたん はじやー。5月ぬ 初(はじ)め、たぶん 4月ぬ 末(まつ)から 5月ぬ 初(はじ)み やたんでい 思(うむ)いしが、え あー、そーてい 行(い)かってい っんまんじ 先生(しんしー)から 初(はじ)みてい 習(なら)ーたんでいーし。あぬー 特(とく)に 太鼓(テーク)や くぬ 1年生ぬ 時(とき)に あー、
——補注 日本復帰の日 昭和47年5月15日 ——

鈴木：おー。

聡：くぬ 琉大郷土芸能研究クラブんでい いしや 年に 1回 うぬ 発表会(はっぴよーかい) すん。

鈴木：発表会(はっぴよーくわい)。

聡：発表会(はっぴよーくわい) すん。して うぬ 中(なか)んじ、あー、わったーや もう 斉唱(せーしょー)しか っんじらんたしが、

鈴木：うんうん

聡：「かじゃで風(ふー)」とう 「うんなぶし(恩納節)」とう 「びぬち(辺野喜節)」やたがやーやー。うぬ みーちしか 出(っん)じらんぐとう、うぬ みーちしか あびらんたしが、あんしが 最後に うぬー 器楽合奏(きがくがっそー)んでい いしが あん。

鈴木：器楽。

聡：器楽合奏んでい いしが あてい、わったー 先輩ぬちゃーが 三人(みっちゃい)し この 器楽合奏「渡りぞう」「滝落とし(たちうとうし)」やたん はじどー 多分。うり 打(う)ちよーぐとう、「あっ、うんねるん あさやー」んち、うぬ 時(とうき)に 初(はじ)みてい 太鼓(テーク)んでい いしる 分(わ)かたる。

康春：うん

聡：まー 芝居(しばい)し、芝居とうか あぬー やんばる 行(い)ちーねー 太鼓(テーク) 打(う) っちよーしえー 聞(ち)ちよーしが うんねーる 揃(する)ていから

鈴木：うん

聡：太鼓(テーク) 打(う)ちゅんでい いしや あんまり 知(し)らんてーぐとうやー、うり 見(ん)ち。「あい」、くぬ 時(とうき)に、「凄いなー」んでい 思(うむ)てい、うえええ、先輩ぬちゃーに、「わにん そーてい 行(っん)じ くいらんがやー」んち 行(っん)じゃしが、光史先生ぬ とうくま やたん。

鈴木：光史先生。

聡：あんし うぬ 先輩んでい いしが、えー 芸大の 教授も した 島袋君子(しまぶくろきみこ)先生(しえんしえー) やたん。

鈴木：ううううー

聡：島袋君子先生とう 男(いきが) 二人(たい) 三人(みっちゃい)し 器楽合奏 そーしる 見(ん)ち、「あ
あー 見事(みごと) やさやー」んでい 思(うむ)てい、あぬー、太鼓(テーク)ん 習(なら)いぶさやーんでい
行(っん)じゃしが、光史先生 とうくまんじ えー なままでい 続(ちぢ)とーん、続(ちぢ)ちよーんでい
ぬ 話し やいびーん。

鈴木：ううー

聡：だから、あぬ わったー 古典びかーる 習(なら)たるよー。うぬ 民謡調とか 言うのは、なー どうー
なーたーくるる しえーぐとーよー。あの一、光史先生の ただ 行って、やぐとー 五六名しか ううらんぐ
とー、ただ 習(なら)て、習(なら)てい 帰(け)てい うぬ 繰(くり)返(け)し やたしが。だー くままでい
来(ちょ)ーしえーやー。

鈴木：ウフッフッフー

聡：ただ そう言うだけの、ただの 太鼓(たいこ)が 好きで、

鈴木：うー

聡：好(し)ち やたぐとーる 行(っん)じゃる。

鈴木：うん

聡：くりが ねーらんねー まあ うれー、あんせー そう えー やってないかも知れませんねー。

鈴木：うーん。

あ、でも あの一、しんしー(先生)ぬ あの一 う話しぬ 中(なか)に あたしが、あの 琉大郷土芸能研
究クラブんでいちえー、うれー また あの一 沖縄の この 芸能(じぬ)ぬ 発展かい あの一 貢献
しちよーる あの一 クラブじゃないかなーと思うんですよね。あの一 みんな教員になって、高教組で組
踊(クミウツドゥイ)仕掛(しか)きたり、それからそれはもう 名立たる先生(しんしー)方を輩出されてって言
うお話もありますし、

聡：しんかぬちゃー 相当(そーと) ううんどー、

康春：いっぺー 羨(うれ)まさたん。

鈴木：うんうんうん

康春：わったー しーじゃ(兄)ん あの一 琉大ううてい まじょーん ううてーぐとー

聡：わったー 先輩ぬちゃー うりやか しーじゃ(兄)ぬ ううんよー。

ヤスオ(〇〇)さんち しーじゃが えー 三期、二期先輩が 上(うえ)に ヤスオさんでい いしが いい
てい(居て)、うれー 相当(そーと) ヤスオさんたー 同級生から ごーぐちひゃーぐち さりてい、つーと
たん はじろー。

康春：やしが なま 考(かんげ)ーれー、琉大かい 行(い)ちよーさんてーぐとーる、

鈴木：うー

康春：安富祖先生(しんしー) めーかい 行(っん)じゃがら 分(わ)からんぐとーやー。

鈴木：ああああ

康春：「みちえー(補注 道は) まーううてい 転(くる)ぶがら 分からん」でい 言(い)やーに、うんな とーく
るから、

鈴木：うー、ううう、また この 決まっている所に この

康春：うん

鈴木：でも、なまや 考(かんげ)ーらん。うれー 大学の クラブんかい ううとーてい、2年生に なていからに
また、先生(しんしー) とーくんかい そーてい 行(い)ちゆるにてー、うれー もう 贅沢と言うか、も
う いい経験だなーと思って聞いていましたねー。

聡：くれー 学生 やたぐとー 月謝ん 払(はら)たがら ぬーがら 覚(うび)てーううーらんばーてーやー。

鈴木：うんねー(註 そのような) 時代ですよ。

聡：ま、だから、ぬーがら・・・

鈴木：だから、僕が、琉球芸能史いろいろ研究している中で、とっても不思議に思うのは、えー、しんしーさい(補
注 教職に就く)、あの一、むる あの一 研究所に行く、古典芸能習うって言う そのひとつのこの信念
て言うか、心持(くるむ)ち(補注 志) 持(む)ってい あの一 研究所んかい えー 行(い)ちゃびーし
が、うぬ 前(まえ)ぬ 先輩方、八十(はちじゅ)なやーぬ 先生方や なんか ぬーやか 分(わ)からん
けど ぼつと入って行くと言うような、だから、やっぱり、世代が違う、ちゃんと習うって言う状況から、この、
芸能し始めるって言うのは、とっても、あの、ひとつの時代、いまと変わらないって言うような

康春：やしが 面白(うむさ)たしえーやー、

鈴木：うー

康春：あの、しーじゃが 大学から 帰(け)ーてい ちゅーしえー。休(やす)み。家(や)ううてい サンシン
弾(ひ)ちゅしえー。

鈴木：うー

康春：おばーが、「っやー サンシン しえーからー あしばー ないんどー・・・」、

鈴木：ウハ ハハハー

康春：「うんな むの一 大学 行(っん)じん すぬ ばーい? やみれー!」って言ってね。

鈴木：ああああ、世の中は、

康春：うん、うんな くとうん あたん。うん。

鈴木：ううー むむ、心配して、

康春：あんし わーが わー また 始(はじ)みたくとー

「っやーまでいんなー!」うんうん。

鈴木：アッハッハッハー

聡：わったー また、逆(ぎゃく) やたんどー。わったー 家(や)んかい 帰(け)ーてい 来(ち)ーねー、

鈴木：うー

聡：わじゃとう 親(うや)ぬ 前(め)ーんじ 弾(ひ)ちゅんばーよー。やしが わったーが 習(なら)い始(はじ)みたぐとう なー 弾(ひ)かん なとーんばーよー。

鈴木：あああー

聡：あぬ、親(うや)ぬちゃーが。わったーや 先生(しんしー) めーううてい、

康春：正式(せいしき)に 習(なら)とーぐとうやー。

鈴木：うううう

聡：わったー 親(うや)ぬちゃーや どうーふー(註 自己流)にどう そーぐとうやー。わったー 親(うや)や、「普通——指で示しつつ——くりっ、くりっ、くり、やしえー」。

鈴木：うううう

聡：わったー 親(うや)や 薬指(くすいゆび) 使(ちか)いたんよー。くぬ サンシン 弾(ひ)ちゅぬ 時(とうき)よー。「あっ、うり、珍(みじ)らさっさやー」んでい 思(うむ)とーたしが、えー、わったーが この本格的に 習(なら)いはじみたぐとう、なー 弾(ひ)かん なとーたしがてーっ。あんしが、「加那よー」や 弾(ひ)ちゅたんやー。

鈴木：あああ

聡：わったーや 成(な)らんしが。こんなこんなして——指の動きで示した——

鈴木：うんうんうん

康春：うれー ゆぬむん ゆぬぐとーん やんやー。

最初、わったー 父(おと)ん、なんじゅ いいー ちらー さんたしが、あぬー わーが 最高賞 とうやーに、あんさーに 村芝居ぬ ジウテ(地謡) すんち なたぐとう、

鈴木：うー、うー

康春：おやじえー んかしえー、村芝居ううてい でーじな 若按司とうか、うんぐとーん そーぬばてー。わーが サンシン 弾(ひ)ちゅんち なたぐとう、くんどー また 自慢(じまん) さーによー、

「くれー わん 二男(じなん)どう やしが、安富祖竹久ぬ 弟子 やん」でい っやーにてー、ぬーぬーし。

鈴木：まー 親孝行ですな・・

康春：うんにー(註 その時)からー なー また、・・

聡：うんねーる 時代(じだい) やんよー。あぬー うぬ じぶのー 親(うや)ぬちゃーたー、新人賞とうか 優秀賞とうか 最高賞とうか 知(し)らんぐとう、新人賞 とうたんでい いぐとうよー、なー うっさ した。新人賞だよ。ウヒッ

鈴木：ハッハッ

聡：なま 新人賞んでいれーからー あり やしが、新人賞 とうたんでい 言(い)ぐとう、ぬー やていん 弾(ひ)ちゅんでい 思(うむ)とーんばーよー。

鈴木：あっはあー

聡：ぬー やていん ないんでい 思(うむ)とーんばーよー。

鈴木：やしが あぬ 時分(じぶん)ぬ 新人賞や いっぺー むちかざる はじる やくとう、うー。新人でい ちえー 大節(うふぶし)ん 弾(ひ)ちゅる 人(ちゅ)ぬちゃーが、新人賞 受ける 時代 やぐとうやー。うーっ。あはー、うれー 貴重な話しですな。

とー、えーとーっ、なまや えー 話(はなし)しに 惚(ふ)りてい、また えー、うぬ じぶのー その駆け出し、先生(しんしー)たーの 駆け出しぬ 頃(くる)ぬ その 御師匠(うししよ) またや 先輩ぬ 人(ちゅ)ぬちゃーの まー 楽屋での話しとか、えー 面白いお話し、えー うむさる エピソードんかい 聞(ち)かし くみそりよーさい。

康春：わんねー ちょーどう 安富祖先生(しんしー)かい えー そーてい 行(い)かってい、まー あまくまぬ 組踊(クミウッドウイ)ぬ 舞踊(ぶよ)ん 地謡(ジウテ)んでー そーいくとう、えー あまくまんかい そーてい 行(い)かってい うぬ 楽屋ううてい、つまかいや 光裕(こうゆう)先生(しんしー)とうか、——補注 鳥袋光裕氏——

聡：光裕先生やー、うーん

康春：真喜志康忠(まきしこうちゅう)先生(しんしー)とうか、宮城文(みやぎふみ)先生(せんせー)、あるいは、光晴(みつはる)先生(せんせー)、宮城光史(みやぎみつふみ)先生(せんせー)、錚々(そうそう)たる 先生(しんしー)たーぬ ううみしえーたんよー。

あまううてい、うぬ 先生(しんしー)たーが、ああ、いるんな 芸能(じぬ)ぬ 話(はなし)しとか、あるいは また、失敗談(しぱいだん)とか、うんな 話(はなし)すぬばー

鈴木：うんうん

康春：あー、うりが ゆー 聞(ち)ちょーちーねー、うちなーぬ 芸能界ぬ 戦前戦後(せんじえんせんご)ぬ、遷(うつ)り変(かわ)りぬ、が、くぬ なまに 伝(ちた)わてい 来(ちゅ)ぬよーな うんぐとーな 話(はなし)やたんよー。

鈴木：うー。

康春：はい、「ちゃんぐとーな 苦勞(くろ) しちゃん」「ちゃんぐとーぬ くとう しちゃん」でい。えっ、うぬ 話(はなし)聞(ち)ちゅしが いっぺー あー 面白(うむさ)たん。また うぬ 中(なか)かいや、あー いろんな また えー 失敗談(しぱいだん)、特に 失敗談、なー 面白(うむさ)たんてー。

えー、いっぺー なまー、なまちきてい なー、覚(うび)んじやしえー 笑(わら)いしが、えー まぎしんしー

たー(大先生方)が、あー、北米公演？ 南米公演？ が 行(っん)じゃがら、あぬ ボウルぬ 話しよー！。

聡：うむっ、あー、はいはい

鈴木：うー。

康春：レストランかい、アメリカぬ レストランかい 入(い) っち ちゃーに

聡：フィンガーボウルぬ 話(はなし)する やっさい、

康春：テーブルぬ うわーびかい 水(みじ)ぬ 入(い) っちゆぬ ボウル あんでいっ。うれー フィンガーボウルんでい いやーに、ふんとー あぬー 食事 すぬ 前(めー)ううてい 手(ていー) 洗(あら)いぬ 水(みじ) やしが、うぬ しんしーたー(先生方) 咽喉(ぬーでいー) かーきとーたん はじろー

聡・鈴木：アッハッハッハー

康春：うぬ テーブルぬ っわーびかい あぬ(有る) サーター(砂糖) むる 入(い) ったーに(補注 音便語幹)、あー、くりしん 足(た)らーん。とうねー(隣席)ん むる むる 持(む) っち ちゃーに、サーター(砂糖) 入(い) ったーに アイスさーに、ありさーに、

鈴木：かちゃーさーに ありさーに、

康春：とー なまねー 飲(ぬ)まりーさ んでい 言(い)やーに んーなし 飲(ぬ)だーに(補注 音便語幹)、てーっ、

聡・鈴木：アッハッハッハー

康春：飲(ぬ)だーに、あんしん 足(た)らーん。あぬ また ボーイ 呼(ゆ)だーに(補注 音便語幹)、「水(みじ) お代わり」。さくとう、うぬ ボーイかい 「くれー 飲(ぬ)むし あらん。手(ていー) 洗(あら)いする やる」んでい、いらりやーに、

聡・鈴木：イヒッウフフフー

康春：でい、どうーぬ 傍(すば)ううてい 見(ん)ちよーたぬ わかーぬ しんしーたー(若い先生方)がてー、「いったー むのー 知(し)らん むんぬ 人(ちゆ)ぬちゃー しーざまよー」って、っんまううてい しんしーたー争(おー)たんでいぬ 話し。

なー うり 聞(ち)ちゃーに わた くじかじり(補注 腸が捻じれるほど) なー 笑(わら)たんてー

鈴木：うーうう

康春：うぬ くとぅん 話しぬ しーよーぬ 面白(うむ)さくとう、なー 涙(なだ)ぐるぐるー するか 笑(わら)たん。うんな 話しん あたんやー。

やしが、うぬ、うんな 楽屋ううていん また しんしーたー(先生方)や いっぺー すん わじゃ(註する技)ぬ 話しとうか、うぬ 芸能史ぬ 話しとうか すせー、うれー でーじな あぬー 勉強(べんきよー) ないたん。

やぐとう 楽屋は ある意味では、うんな 流派を越えてぬ あぬー サロンみたいな むんてー、うん。

鈴木：うんうん

康春：っんまううてい しんしーたー(先生方)や いーひゃーていーひゃーっし うへー 笑(わら)てー ううしが、ふんとーや っんまううてい また、どうーなぬ 考(かんげ) 一方(かた)とうか、

鈴木：うーっ

康春：いろいろな 芸能(じぬ)ぬ、

「あまぬ 手(ていー)や くんぐとう やしが、んかしえー くんぐとうー やたん」とうか、うんな 話しぬ すぬばー、こう 言った いわゆる 芸能史ぬ 勉強(べんきよー)ん ないたるばーてー。えーっ

鈴木：うううう

康春：うれー やぐとう うぬ 時分に っんまかい ううたぬ 御蔭(うかじ)なかい

「みーなり ちちなり」 そーしえー。なまー どうーぬ いっぺー 財産 かとーん。

鈴木：うーんん

康春：やぐとう わねー えー なまー 国立劇場ううてい、若(わか)むんたーとう まじょーん ないしが、なるびちや うぬ 当時ぬ 話し。また あぬ、「しんしー 話しや また んかしぬ 話しし」んでい 言(い)しが、なるびち うんな 話し たげーに する あぬー よーによーっ、そーんよーっ。

鈴木：「あぬ しんしーや うんねーる やたんやー」んでいーちえー

康春：やぐとう 楽屋んでいぬ うぬ 話しんでいーしえー あのー ただ 単に うぬー、ちげー 着替えとうか すん とうくまー あらん。っんまううてい なー ていーちぬ 技(わじゃ)ぬ 伝承 あるいは 他ぬ 流派ぬ 人(ちゆ)ぬちゃーとうぬ 交流、

鈴木：うんうんうん

康春：やぐとう えー でーじな もう っんまから いい(得)らりーる むのー まぎさぬ はじんてい。やぐとう うぬ くとぅ わんねー なま 若(わか) ーたーかい 話し そーぬばー。

鈴木：うん

康春：っんまううてい 「なるびちえー うちなーぐちん 使(ちか)りよー」んでい、

鈴木：うううう、

うれー 大切(てーしち) やいびーくとぅやー。うれー、聡先生んかい・・

聡：うんねーる 話しや わったーん 聞(ち)ちよーんよー。あぬー わったー先生(しんしー)や 光史先生(しんしー)。棚原先生(しんしー)や あんまり あのー うんねーる 話しや んかしぬ はなしえー・・それに 光史先生(しんしー)ぬ 親(うや)や 光裕先生(しんしー)。だから うぬ 芝居ぬ 話しから ぬーんくいーこう すたん。

ようするに えー 戦後、わったー 光史先生(しんしー)や 21から 26までいや 戦争に 満州んかい 行(っん)じょーぐとう、えー、復員し 来(っち)から うぬ えー 光裕先生(せんせー)の 所(ところ)で えー、

松劇団。

鈴木：松劇団。

聡：っまんじ 事務職 しながらる 芝居なんか 出(っん)じたる 事務的な しごと(仕事) そーたんでいぬ 話し。いるいる あぬー 聞(ち)ちよーんよー。あんし、戦争、よく、ゆー 戦争ぬ 話し すたんやー。光史先生(しんしー)や・・・

ようするに あぬ 太鼓(テーク)ぬ 音(うとう)が、うぬ 機関銃・・・

鈴木：うーっ

聡：パラッパラッパラッパラッパラー すんちー、

康春：中国戦線ううてい

聡：中国戦線でよ、パラッパラッパラッパラッパラーし、うりが 太鼓(テーク)ぬ 音(うとう)に 聞(ち)かりーたんとうかてーっ、うんねーる あぬ 結び付けて 話し すたんよーっ。

鈴木：うううー

聡：あんし なー ひっちー ぬーがら しーねー ビンタ ほーかりーくとう、
「なー うんねーる とくまんかい うういねー なー 死(し)ぬしえー まし」んでいち、

鈴木：おううー、死(し)ぬしえー まし

聡：堂々(どーどー)とうよー、弾(たま)が プスプスプスプスー

鈴木：ええー

聡：すしが、砂(しな)ぬ、土(つち)ぬ、砂(しな)ぬ 上辺(つわーび)んかい・・・。当(あ)たらん。

鈴木：うん

聡：当(あ)たらんぐとう、なー 死(し)じえー しむん でいち うんねーる 話しん すたしが、プスプス 当(あ)たらん。あんし また (補注 隊に)帰(け)ーたぐとう ビンタ ほーかってい、

鈴木：ウハハーハー

聡：うりぬ 繰(く)り返(け)ーし やたんでい いしが、まっ、うんねーる 話(はなし)しーとうかよー、ううー、捕虜(とら)になった話し。あっ 捕虜(とら) 捕虜(とら)を、あの一 うぬ 捕虜(とら)が、中国の 捕虜(とら)が わったー 先生(しんしー)んかい、あぬー くとうば 通(つー)じらんしえー。

鈴木：うー。うー。

聡：うぬー 「っやーや やー。とうし とういねー 杖(ぐーさん) 突(ち)ちーねー 髻(ひじ)ん 伸(ぬ)ばち っくわーん うっさ ふどう いーんどー」んち、くぬ 中国の 捕虜(とら)が 言(い)ーたんでい、

鈴木：うううう

聡：うんねーる 話し、あんし なま なたぐとう なー だー 別(びち)ぬ 世(ゆー) あんち なとーしえー。ああ、光史先生(しえんしえー)が 言(い)ちよーたしえー 「ありやー ふんとー やてーさやー」んでい、「なま 生(い)ちちよーれー いちやいぶささー」と言うお話しをされ・・・まー 二人(ふたり)は たい いいぬ おー(註 同) 年齢(ねん) やたん はじ やくとう なー なまや ううらん はじ やしがやー。そう言う戦争(せんそう)の話し、

鈴木：ううーうん

聡：それから芝居(しば)の話し、芝居(しば)ではもうあの一 最初(はじめ)ぬ くるや 銭(じん) ちゃっさん 入(い) っち 来(ちゆ)ー たんでよー、銭(じん)が 入(い) っち っち(来)、

鈴木：ほうー

聡：『「あっ、うれー ちゃー 続(ちじ)ち すさやー」んでい 思(うむ)とーたん』でい いしが、あんしが うりが また、うぬ、皆(みな)さんご存知(ぞんじ)のように映画(えいが)が 入(い) っち 来(ちゆ)、

鈴木：映画

聡：いるんな 事(こと)が入(い)って来て、この映画(えいが)と芝居(しば)が、こう取(と)って代(か)わる、

鈴木：ううううっ、

聡：時期(じき)が来て、うぬー 最初(はじめ)や ななさん(補注 七三の割合) っし 手間(ていま)ぐわーや いいー (得)とー たんでい。

鈴木：ななさん(七三)、

聡：あんし 劇場(げきやう)が 三(さん)、

鈴木：うーっ

聡：出演者(しゅえん)が 七(なな)

鈴木：なな(七)

聡：とうとーたんでい 言(い)しが、うりが だんだん だんだん ろくよん(六四)に なてい、ごーごー(五五)に なてい、ろくよん(六四：補注 劇場六 出演者四)に なてい、逆転(さか)し しちさん(七三：補注 劇場七 出演者三)までい なたる 話しを そーたしが、うぬー 最初(はじめ)の じぶのー ほんとに はっせん(八千人)にん(八千人)とうか、

康春：はっせん(八千人)

聡：うぬ 話し そーてーぐとうよー、

鈴木：ううーん

聡：ちゃーし 銭(じん：木戸銭) とうたがやーんでい 思(うむ)いんばーてー。

鈴木：ううううう

聡：うんねーる 話しまでい そーたん。

鈴木：あーあ

聡：観客(くわんかく) 八千人(はっせん(八千人))にん(八千人)でいよーっ、まーんじ すぐとう、だー、

鈴木：うん、まー、まーんじ
 聡：うれー 球場んじ さんとー ならんしえーやー。
 鈴木：うんうんうん
 聡：わったー 古典芸能 しーからー、八千人 集(あち)まいんでいしや なー、じょーい 無理(むり)。うんねー
 る 話しとうかねー。
 鈴木：八千人・・
 聡：あぬー、ゆー なま 康春先生(しんしー)が 言(い)ちやるぐとう 安富祖先生(しんしー)とうぬ 話し。 安
 富祖先生(しんしー)がよー、
 康春：あれー 面白(うむ)さんやー。
 聡：光史んかいやーっ。「光史ぬ 前(めー)んじえーやーっ、うっぴぐわーぬ 話しんやー うっさ ないん ——補
 注 針小棒大で話す——」でいち、
 康春・鈴木：アッハッハッハッハッハ ——声上げて笑う——
 聡：ゆー 話しー そーたんよ、ゆー。
 康春：ううん ううーううーうう
 聡：うん。「うぬ 光史ぬ 前(めー)んじえーよー うっさん 言(い)ららんろー」んでいる 話し そーたしが、し
 かし、良く意気投合していたんでないですかねー。あの一、ある時(とうち)、ヤマトウ公演 行(っん)じゃぐとう、
 安富祖先生(しんしー)とう 光史先生(しんしー)が、あの一、同部屋(どーべや) なたんでいが、
 鈴木：うんうんうん
 聡：あんし うぬ じぶの一(時分や) 二人(ふたり)で、たいし ちゆいぬ へや(註 相部屋) やたぐとう あ
 んし、光史先生(せんせー)は安富祖先生より年が五つ四つぐらい 下(しちや)、しちや(下) やんばーてー、
 鈴木：ああ、しちや。
 聡：しーじゃかた やしえー、
 鈴木：うーうーう、しーじゃかた。
 聡：安富祖先生(しんしー)や なー、気(きー) 使(ちか)ていよーっ。あぬー 光史先生(しんしー)が 安富祖先
 生(しんしー)んかい 気(きー) 使(ちか)てい、むぬうとう(物音) 立(て)いてー ならん でいちよー、
 鈴木：アハハハハ ——物静かに笑う——
 聡：うぬ 寝(に)んじゆる 時(とうき)に よーんなー よーんなーし、光史先生(しんしー)がるろー。
 鈴木：ううう、アハハハハ
 聡：くぬ 気(きー) 使(ちか)てい、くぬ よーんなー よーんなー ぬーんくいー、齒(はー) みがちゆしん 茶
 (ちやー) 入(い)りーしん、なー 起(う)くさんぐとうー、そう言うふうな話しを よくよーっ、
 鈴木：ええー
 聡：そーたん。
 もうだから 光史先生(しんしー)と うぬ 安富祖先生(しんしー)や ゆー なんか 投合、(補注 意気)投合
 してたんじゃないかねー。
 鈴木：ううーんん
 聡：わったーが 思(うむ)いしが・・・
 うんねーる、あの一、芸談もよく話しましたけど、すたしが、あつまあ、光史先生(せんせー)の 話しや た
 まには むちかさぬよー。
 鈴木：ううーんん
 聡：わったー 後輩ぬちやーに ゆー 話し すしが、まだ 分からん とうくるが あぐとう、いろいろ話しは聞
 かされました。
 鈴木：芸能(じーぬー)哲学、
 聡：芸能の 話しとうかやー、
 鈴木：哲学みたいな話し、
 康春：うんねるー 話し わんにん 覚(うび)とーん。でーじな 二人(たい)が、そう、芸能(じーぬー)ぬ 話し
 すさやー、
 鈴木：うーうーうっ、
 康春：なー 目(み)ん玉(たま)ん 光(ひちや)てい、うぬ あたい そーたん。
 あんさーに また、うぬ えー ゆんたく。座持(じゃーむち)ぬ 話し なれーからー、わったー 安富祖先
 生(しんしー)や また っんじらん、うりかいや むる まあ 興味(きよーみ)や 無(ねー)ぬばー、傍(すば)
 ううてい 弁当(べんとー)ぐわー、
 鈴木：ええー
 康春：うんな 性格ぬ うぬ 違(ちが)いぬ あたんよー。
 やしが 舞台(ぶたい)かい 上(あ)がてい 行(い)ちゆぬ ばー。わったー 先生(しんしー)や ひょー
 ひょー(飄々)とう 上(あ)がてい 行(い)ちゆしが、光史先生(しんしー)や なん(なま：今)までい うっ
 さ ゆんたく そーしが、うりがなー 舞台(ぶたい)かい 上(あ)がいぬ 前(めー) なれーからー、すぐ ちら(貌)
 ぬ なー 話しぬ すぐ パンみかち 終(う)わらち、ちら(貌)ぬ だんだん 顔付(かうじ)ちぬ 変(か)
 わてい 行(い)ちゆぬばー、
 鈴木：うー
 康春：ゆー ぬーんでい いがら、舞台人(ぶたいじん)ぬ、なまんでい 言(い)ーねー オーラる やがやー。ち
 ふえー、気配(けはい)。うりかい すぐ 変(か)わてい 行(っん)じゃーに、目(み)ん玉(たま)や とうじ(補
 注 トウジャ；銚：爛々と輝かせ) なちよーてい 舞台(ぶたい)かい 上(あ)がてい 行(い)ちゆたん。

鈴木：うん
 康春：うれー なー
 鈴木：光史先生(しんしー)かい、うんねーる・・・
 聡：舞台んじ 上(あ)がいねーよー、なー 先生(しんしー)たー 眸(みー)ぬ 違(ちが)いたぐとう、特(とく)に
 わったー 光史先生(しんしー)や あぬー 芝居ぬ 時代(じだい)から ゆー そーぐとう、くぬー、第一(だ
 いいち)、光裕先生(しんしー)ぬ 教(ならー)し方(かた)が、
 「見(いいん)ちょーきよーやー」んでい
 鈴木：ああー 「いいんーちょーけー」
 聡：うん。「ぬー やていん 見(いいん)ちょーけー」。うえーええ、すぐ なにか うぬ 役(やく) しみらーりーたい、
 鈴木：うんうんうんうん
 聡：ぬーがら あたんでい いぐとう。「っやー しえー」とうか、
 鈴木：うーんん
 聡：あぬ 欠員ぬ 出(っん)じーねー、「っやー しえー」とうか。
 「わんねー しえー ううーらんむん」でい。
 「っやー いいんちょー さに」んでい、
 鈴木：うんうんうん
 聡：こんな教えを受けて来ているから、やっぱり 舞台に上がる時、舞台んかい んでい 出(っん)じーねー なー
 眸(みー)や ふんとー (本当) 真剣そのもの やたんやー。
 鈴木：うんうんうん
 康春：うれー あり やっさー。あのー わったー 組踊(クミウウドウイ)とうか ぶ(舞)ぬ ジウテー (地謡)、
 研究・稽古場(けーこば)ううてい 先生(しんしー)から 指導(ならー)さったる 覚(うぶ)いや ねーんどー。
 鈴木：はあ。
 康春：「追(うー)てい 来(くー)わ」、
 聡：そう。
 鈴木：うわーあああ
 聡：わったーん、「んーな うーてい くーわ」、
 康春：「するてい 追(うー)てい 来(くー)わ。」「っやー じゃあ いちいち 暇(ひま) あみ？」やれー、「舞踊(ぶ
 よー)ぬ 稽古(けーこ) あくとう」あるいは「結婚式(けっこんしき) あくとう」あるいは「組踊(クミウウ
 ドウイ) あくとうやー、っやー 来(くー)わ」んでい 言(い)やーに。
 「先生(しんしー)、うれー わんねー ないびらんどー」って言う。
 「ぬーが ちゃー ひーじー (平生) そーしる やっさい」んちから、
 鈴木：おう、
 康春：あぬー やくとう、うりかい えー そーてい (誘われ) 声(くいー) 掛(か)きらりれーからー なー でーじな
 うみはまてい ちーく (稽古) さーに 先生(しんしー)かい みーわく (迷惑) 掛(か)きらんぐとうんし、うんぐとうー く
 とうん すてーぐとう、
 聡：うぬ しんしーたー (先生方) や むる「追(うー)てい 来(くー)わ」る やたん はじろー
 鈴木：うぬ 時代(じでー)ぬ うせーかた(教え方) っていうのは、この 琉球芸能(りゅうちゅうげい)ぬ そ
 の なんて言うの、あー ならーし ならーしよー (註 指導法) っていうほうがいいですね、
 康春：わったー ばーねー、わんや しんしー (先生)ぬ 歌(うた) あと(後)から 追(うー)いしえー うーてい
 うり ねーび(真似) するだき、
 鈴木：うーんんん
 康春：あぬ いっぺーさっぴん ねーび するばー
 鈴木：うんうん
 康春：やしが あるとうち、「とー あんしえー っやー あっぴ あびてい んーれー」って、言(い)らったーに(註
 音便語幹)、あんされー ねーび そーぐとう どうーくるしえー なとーんでい 思(うむ)やーに、ふみ
 らりーがやーんでい 思(うむ)たぐとう、
 「っやー むのーやー、ただ わん ねーびびけーる やる。」
 鈴木：うー うー う
 康春：「あぬー わた(腹)から 声(くいー)ぬ っんじらん。吟使(ぢんぢけー)ん よー (弱)さん。うんな ねー
 びびけー しーねー ダメ」んでい、
 鈴木：へえーええー
 康春：だから、「なに いっ ぬーが、先生(しんしー)ぬ 芸 盗(ぬす)むしえー くれー あたいめーぬ はじ や
 しが」。やしが ただ っわーびびけーん ねーびる やてーさ。
 鈴木：うー うー。
 康春：実際ぬ 先生(しんしー)ぬ 歌(うた)ぬ、くぬ ぢんぢけー (吟使)とうか 歌(うた)ぬ その 情(なさ)
 けとうか、うぬ ふーじーや むる とうてー ねーん。ただ あぬ っわーびびかーい。
 やぐとう これは なまぬ わーが ならーちょーぬ あのー 芸大ぬ 学生とうか、あるいは しんしん
 たー (先生方) とうか、あー しーとうぬちゃー (生徒達) とうか、うったーかいん うんぐとうー 話し そーん。
 鈴木：うーう
 康春：うったーや うぬ まっ、なとーぬ ふーじさーに やしが、かんなじ うぬ アクセントとうか 仮名(かな)
 ぬ ていーち ていーち
 鈴木：うーっ

康春：「うりや、いったー むのー ただ なんべーらー なてい」
 鈴木：ううー
 聡：なんべーらー
 康春：「うんとうー しえー ならん」んでい
 鈴木：っわーび、っわーび(補注 上っ面)ぬ ねーび、
 康春：うん。ちゃんとう 語(かた)る、やー。くとうに うぬ 琉歌ぬ 歌(うた) 詠(ゆ)むぬぐとうし 歌ぬ 仮名(かな)ん ていーち ていーち 付(ち)きてい 行(い)かんでー うれー あぬー すぐ 歌ねー 成(な)らんでい 言(い)やーに。
 聡：わったーから しーねー、サンシンや みっちゃい(三人) たい(二人)し、弾(ひ)ちゆしえーやー、
 鈴木：うう
 聡：テーコー (註 太鼓は) ジウテー たい(二人)し 成(な)らんぐとう、
 鈴木：うーううーっ
 聡：光史先生(しんしー)が 打(う) っちょーし、見(いいん)ちる 勉強(べんきょー) そーぐとうやー、
 鈴木：ああ、その、
 聡：これ、あの、「かじゃでい風(ふう)」とうか 「ぬぶい」(補注 上り口説)とうか あぬ 手(てい)ぬ 決(き)まとーしや うすまさ 習(なら)さったんよー。うぬ 型(かた)ぬ 決(き)まとーしや。あんしが、うり 使(ちか)ていから、舞踊 打(う) っちゅんでい いしや、やっぱり 先生(しえんしえい)が 打(う) っちょーし 見(いいん)ち、組踊(クミウツドゥイ) やていん むる いいぬむん。うり 見(いいん)ちる 勉強 さるよー。サンシン、わったーん サンシン そーしが、やっぱり 二三名し すさやー、ジウテー (地謡) ならんぐとうよー テーコー (註 太鼓は)。
 この辺は、羨(うれ)まさんやー。
 康春：ううーんん そうかー。
 鈴木：そうですね。どうーちゅい (一人) っし えー しねー (補注 さねー) ならん。「みーなり、ちちなり」ですよね ほんとに、
 聡：うん、そうですね。
 鈴木：「みーなり ちちなり」って言うのは、芸能(じーぬ)ぬ しかい、世界(せかい)の中の・・・
 康春：一番(いちばん) うれー 肝心(かんじん)な くとう やん。
 鈴木：うーう
 康春：やぐとう 楽屋(うていぬ) 話しー 「みーなり ちちなり」さーに、うりが いっぺー 残(ぬく)とーんよーやー
 鈴木：ううーんん
 聡：そう言う言葉言葉がね、あの一、が 一番大事だと思う。しんしー (先生)や あん 言(い)ーたん。うぬ 「っやー ジウテー (地謡)ぬ 太鼓(テーク)や あんし あらんどー」と言う、全く 言(い)らんたん。
 鈴木：うーんんん
 聡：あの一会話の中でね、「ああ こう思ってるんだなー」とかそう言うことを聞き取るということ、
 鈴木：ひーじー (補注 平生)ぬ ゆんたくの中で
 聡：ゆんたくぬ 中(なか)んじよー。
 鈴木：ああああ
 康春：そう言えば この 褒(ふ)みらったしえー ちゅけーぬん 無(ね)んよーやー、
 鈴木：あーああーああ、
 康春：どうーしえー 成(な)とーんでい 思(うむ)てい、
 鈴木：意外(いがい)
 康春：うん
 鈴木：へえー
 康春：あの一 ぬーんでいがんでい いーねー、すぐ
 「とー あまんじ っやー あびてい んーれー」。あぬー しーねー、
 「わんねー あんし あびとーみ」。あん 言(い)られーからー なー 固(かた)まやーによー。
 鈴木：恐(おそ)いねーえー あは
 康春：みー ひちやてい (註 目が光って)から、みー ひちやていから、
 「わんねー あんし あびとーみ」んでい 言(い)やーに、でいしぬちゃー (弟子たち)ん むる なー むる、
 鈴木：ああーもう、
 康春：なー うっちんとうー そーるむん。
 ああ、うんな くとうん あたんやー、
 鈴木：あああーあ
 康春：やぐとう てーげーや、
 「てーげーぬ 今日(ちゅ)や 成(な)とーんやー」んでい 思(うむ)たれー、歌(うた)いねー、えー、なとーぬ 場合(ばあい)や ただ ちゅくとうば(一言)、
 「うん、成(な)とーさ」。
 鈴木：あああ
 康春：なー おつかれ。
 鈴木：成(な)とーさ。
 康春：うん

鈴木：はあああ、難しいですね。奥が深い、

康春：やぐとう なまー、やぐとう うんな くとうが あぐとう、ありん(聡氏のこと)わんにん なまー 大学うう
てい あのー 古典音楽 まー 習(なら)ーちえー ううたしが、

鈴木：うううー

康春：しんしー(先生)かい さったるぐとう しえーからー、わねー ちゅけーのー(補注 一度は) さぬ くとう
あんよーやー。

鈴木：ウフッ

康春：「うぬ あたい 成(な)らんれー やみれー」んちゃぐとう、

鈴木：アハハハハハハ

康春：なー なーちゃ(翌日)からー くーんよー。うん なま 考(かんげ)ーいねー ハラスメント やてーんてー

鈴木：そうそうそうそう、うれー もう なんか 芸能(じーぬー)ぬ 世界、あのー、研究所(けんきゅーじょ)ううとー
てい うれー ないしが、うれー 大学ううとーてい うれー パワーハラスメントんでいちえー えー・・・

康春：やしが、わったーが 聞(ち)けーからー、

鈴木：うーう

康春：あぬ、えー、むるっ いっぺー 才能ぬ ある 人(ちゅ)ぬちゃー、
学生 まんどーぬばー。てっこー(手巧)ん かなていやー、

聡：てっこー(手巧)ん かないしえー あまー、

康春：てっこー(手巧)ん かなてい 声(くいー)ん 出(つん)じーぐとう あー

鈴木：うううう。
もう、そのような、うぬよーな う話しん あいびーしが、あー、今日(ちゅー)や なー ていーちえー、あのー
う話し 聞(ち)かし・・・
えー 琉楽三人展(りゅうがくさんにんてん)でいちえー しんしー(先生)とう えー 中村司先生(なかむら
らつかさしんしー)とう みったい(三人)し、あのー まあ、言い方は悪いけれども、

康春：うん

鈴木：「どき廻り(補注 地方公演・田舎廻り)」んでいちえー なま 考(かんげ)ーてい あのー あぬ 時分(じぶん)
ん)や、あの わったーん 四十代(よんじゅーだい) なとーてい、えー まあ あのー 時分(じぶん)の
あのー どうーなーし あのー えー 新垣俊道(あらがきとしみち)君とか、それから、あー、まー、立方(た
ちかた)だったら まー 嘉数道彦(かかずみちひこ)君とうか、まあー ちりーぬ ちゅぬちゃー(註 同年
輩の者たち)ぬ あのー 若手(わかて)んでいちえー うみはまてい じーぬー(芸能) そーしが、あつ
その、うぬ 時分ぬ 四十代、

康春：うん

鈴木：なんか こう同じ時期かなー んでいちえー 思(うむ)てい えー う話し 聞(ち)かし くみそーりよーん
でいち 思(うむ)とーいびーしが・・・

康春：あぬー さちふどう(先程) わねー あぬー 琉大ぬ 郷土芸能クラブ いっぺー 羨(うれー)まさんでいー
ぬ 話し さしが、あぬー また、あー ライバルん やたんよー。

鈴木：あっはー、あぬ じぶぬん(註 時分も)

康春：特に、うぬ 聡とう 司、

鈴木：うー、うー、うっ 琉大、

康春：あぬー、うー、うったー たい(二人) 偶(ぐー)組(く)でい、ジウテー(地謡) そーてーぐとう、あつ う
れー、うったー ゆー すっさーやーんでい うんぐとうー 羨(うれー)まさたん。
やしが ある時(とうち)や

聡：うん

康春：舞踊ぬ しんしー(先生)から、

聡：先生(しんしー)が、

康春：わん 組(く)まちゃーに、みっちゃい(三人)し 組(く)まちゃーに。
「ジウテー(地謡) さんなー」んでい 話し 来(ちよ)ーてーぐとう、やしが 師匠(ししよー)ぬ 違(ちが)
いしえー。

鈴木：うーっ

康春：あまー 棚原忠徳(たなはらちゅうとく)先生(しんしー)、わんねー 安富祖先生(しんしー)。謡(うた)い方(か
た)ん うふえー 違(ちが)いたんよー。

鈴木：うん

康春：えー やたくとう、うれー ちゃーがやーんでい 思(うむ)とーたしが、やしが なー 若(わか)さくとう
すぐ 打(う)ち解(とう)きやーに、

鈴木：んん

康春：「でいー ありん さー くりん さー」、あー すぬ 内(うち)に、あまくまから なー、あのー 「ジウテー
(地謡) っし くりん」んでい 言(い)やーに 来(ちゅ)ーたんやー。

聡：ああ、本当(ふんと)・・・

康春：なー やぐとう・・・なげーくとう(長いこと) 散々な くとう っし ちゃんやー。

鈴木：アハハハハハハ

康春：うーんん 例えば、オペラとうん っし ちえーしえーやー

鈴木：うううーうううー

康春：あんさーに しんしーたー(先生方)から ぬらーつてい。

鈴木：うーうーうっ

康春：「あん 聞(ち)かんげー」んでい 言(い)やーに、

鈴木：若さの、なんて言うの。「若気の至り」んでい 言(い)やーに

聡：わったー みっちゃい(三人) こう、ぐー(偶) なていから えー、さしが。

えー わんねー 司とう まじゅん、司しんしー(先生)とう まじゅん こう、学生時代から、

鈴木：うーっ、

聡：まじゅん そーぐとう、わったー ゆー 知(し) っちょーんよー。うり 安富祖先生(しんしー)ぬ みーんか
い うりが ううんどーやーんち 知(し) っちょーん。

鈴木：うーんん

聡：あんし あぬ 司とう 康春先生(しんしー)や 最高賞 まじゅん やぐとう、

鈴木：あっ、はあはあーあ

聡：して、うぬ 時(とうち)ぬ 最高賞ぬ 最年少 やぐとうやー。

鈴木：うーんんん

聡：司とう ちょっと違う。あの一 最年少で最高賞とる。あの一 知(し) っちょー。

康春：勝負(すーぶ) そーたんやー、

聡：うんうん、知(し) っち うったー 二人(たい)や 勝負(すーぶ) そーたんよー。

鈴木：うふっ、はは

聡：わんねー 太鼓(テーク) やぐとうよー。あんし まじゅん なた、ある しんしー(先生)が、一緒(いっしょ)に 偶(ぐー) なてい いいー 始(はじ)みた 時(とうき)から あぬー うったー 二人(たい) サンシンや、わんや 太鼓(テーク)んち 廻(まー)やーい、いるんな とうくる 巡(みぐ)たんやー、ほんとに。

康春：最初や みっちゃい(三人) そーたしが、やしが、わんとう 司(ちゆかさー)とう 話し さーに、「聡(さとしー)や うれー 光史先生(しえんしえー)の 後継(あとつ)ぎる やくとう、なー たい(二人)し さーに、あり 稽古(げーこ)かい 廻(まー)さ」んでい 言(い)やーに、うんなくんな っし、えー 琉楽三人展(りゅーがくさんにてん)ぬん たい(二人)し サンシン、あれー てーげー(補 練習に) 行(い)かすぬぐとう。

やしが、あぬー また ありが 歌(うた)ん 望(ぬず)ろーぬ あの一 舞踊家ぬ ううぬばー。うんねー
る ばー また あり 入(い) ったーに。なまん うんなくとう 続(ちじ)ちょーん、うん。

えー やしが なー、一番 多(うふ)さぬ 時(とうき)や なー 年間 四十・・

鈴木：アハハハハハハ

康春：四十(よんじゅっ)公演 やたんやー

聡：わんねー 一応 っし、くぬ、くぬ、うちなーぐち講座が あんでい いち 一応 やっぱり 調(しら)びたぐとう
よー、年間よー、五十六十ぐらい あん。

鈴木：うわーああー、かあー

聡：一番 ピークねー、

鈴木：ピーク。

聡：うん、

鈴木：月(つき)、月5回から・・

康春：聡や 太鼓(テーク)ん そーくとう、

聡：うん

康春：うれー サンシヌん 太鼓(テーク)ん そーぐとう

鈴木：うううう

聡：うぬー 一年間 六十んでいれーからー、毎週 やしえーやーっ、

鈴木：うううう、毎週毎週。

聡：あの一 やっぱり ピーク時には、ああー くんねーる やたん。

康春：一番 多(うふ)さぬ ばーねー、一日(いちにち)に 五カ所(ごかしょ)。

鈴木：はっ、・・ハハハ

康春：五カ所 研究所 掛(か)け持(も)ちさーに、むる しーく(補注 ちーく：稽古)さーに

鈴木：あっ、うれー 稽古(ちーく)ぬ、ちーくぬ ジウテー(地謡)

康春：うん、ちーくぬ。えー うっさ 五カ所 廻(まー)てい ちーく すんでいれーからー、うぬ 後(くし)けー
また 五カ所ぬ 発表会ん あしえーやー。

鈴木：うーうう

康春：なま うり ちゆけーんの一(補注 一度切り) あらんせー。なー また うりが なーちゃ(翌日) なー
う(起)くたい、

鈴木：うううー

康春：やしが、うりが また、なー 真夜中(まゆなか)までい やぐとう、真夜中(まゆなか) 終(う)わてい、でい
うりから また 家(やー)かい 帰(け)ーれーから、あちゃーぬ 仕口(しくとう)ぬ くとう

鈴木：うううう

康春：すんでい いやーに、

鈴木：うーっ、

康春：寝(に)んだんよーい、こう また、仕口(しくち)かい 行(い)ちゆぬ くとうが あたん。

鈴木：はあー、

康春：でー ちゆけーんの一(補注 一度は)やー、

聡：ほんとに 五カ所(ごかしょ) あたんろー。

鈴木：へえーええ
 康春：司が 2時まんぐらいまでい 起(う)きてい 仕事(しごと)さーに ああ 稽古(ちーく)さーに、うりから 名護(なぐ)かい 帰(け)ーやーに しごと (仕事) すんでい すんでい いぬばー。

鈴木：はあ、
 康春：でー、止(と)うみたぬ くとうが あんよー。
 「うんぐとうー しえーからー なー どうー 痛(や)ますん」でい 言(い)やーに、

鈴木：うん
 康春：あんねーかんねー する 内(うち)に、なー あり、くも膜下出血さーに 倒(と)りやーに、うぬまんまー なー 去(は)てい ねーらん。

鈴木：うん
 康春：なー うんにんぬ ばーに なー、たい(二人)や なー、ああ くとうばん 無(ねー)らん。嗚呼
 鈴木：うんんん
 聡：あんしが うれー うったーが 力(ちから) あてーぐとうるやーっ
 鈴木：うー、うー、うっ
 聡：うぬー まーからか、
 鈴木：うん
 聡：う願(にげー) さりーる。先生(しんしー) うぬー 両方(りょーほー) しんしーたー(先生達)よー、うぬ 分(わ) かてー ううしが、うぬ 時分(じぶん) うぬー っんまぬ 研究所とう っんまぬ 研究所とう 偶(ぐー) なてい ジウテー (地謡) すんでい いしよー、タブー やたんよー、

鈴木：うんうんうん
 聡：うぬ 時代よー、ぬいくいーてい (補注 乗り越えて)る なまー 来(ちょ)ーぐとうよー。うぬ 時分 ほん とに わんねー 太鼓(テーク) やぐとう サンシン たい(二人)し、太鼓(テーク) 打(う)ちゃーなかい、 やっぱり 「ジウテー (地謡)や うったーびかーる ううんなー」んでい、

鈴木：うんうんうん
 聡：うんねーる 話しん 聞(ち)ちゃ くとう あしえー。あぬー 安富祖先生(しんしー)ん 棚原先生(しんしー) ン、よー この辺(へん)は あのー 我慢してるん(の)じゃないかなー。

鈴木：先生達(しんしーたー)も まわりから ごーぐちひゃーぐち、やなぐち・・
 聡：しんしーたー (先生達)ん ぬーがら 言(い)らっとーたん はじろー、多分。
 鈴木：うううう
 聡：あんしが 「うったー そーぐとう なー しむさ」んでい、

康春：「言(い)らったん」でい、わったー しんしー (先生)や 保存会ぬ 会長 やてーぐとう、ウフッフッフッフー

鈴木：やしが、うんねーる この、あぬ 若手ぬ 活躍ぬ 場(と)うか、あのー、芸能史を、こう はたから 見(ん)ー ちょーてい、この 若手が、この 舞台ぬ 前(め)んかい っんじてい、あぬー ジウテー (地謡) そー るんでいちえー、あぬ 時分 うぬー すっとうん ねーらん、あのー むる 大先生(うふしんしー)んかい、 から、もう なんて言うのかな、年功序列って言う言(い)方は 変(へん)ですけど。・・、「年功序列って、しまことばで、 むつかしい」(補注：年功序列 カーミン クーヤカー トウシヌ クー：亀の甲より年の劫/功)

康春：やくとう
 鈴木：だけど それを、若手が 出(っん)じていからに 実力(じりき)をもって この若い 古典(こてん)って言うか、若い芸(げい)を見せる と言う、まあ 円熟(えんじく)もあってもいいと思うんですけどね。これがやっぱり走り(補注 先駆者)だと、先生方、 走り(はしり)じゃないかなー と思(おも)まして

康春：うん、やたる はじ。
 鈴木：思(うむ)とーいびーしが。
 康春：あぬー ゆー 言(い)らりーてーぐとう、
 鈴木：うーっ
 康春：「いっペー 新鮮(しんせん) やん」でいやーに、あんとう わったーん すぬ すぬ ぶん やらー、この わったーの 特長(とくちやう) 活(い)かさんでいやーに、 「サンシンの すなわい(備わり)」、 「声(こゑ)ぬ すなわい(備わり)」、でー、 「歌(うた)ぬ すなわい(備わり)」。
 うぬ まんぐれー(補注 その当時は)や、えー まあ ジウテー(地謡)ぬ 頂点(ちやうてん)でいれーからー、 照喜名朝(ていきなあさ)先生、

鈴木：はいはいはいはい、
 康春：玉城正治(たまきまさはる)先生、西江喜春(にしえきしゅん)先生。なー わったーやかー 三十びーかー っ わーび やしが、わったーぬ 目標(もくひょう)や あまる やしが、あり 越(こゑ)ーる たみなかい わったーや ちゃー されー すむがやーんでい、

鈴木：あっはー
 康春：わったー あぬ、わったー 古典、音楽(おんがく) ちゅくらんでい 言(い)やーに
 鈴木：うーうううっ、
 康春：あぬー さぬ くとうん あん。
 聡：うぬ 時分(じぶん)や サンシン しみらったんよー。うぬ みっちやい(三人)とう わったー みっちやい(三人)んでい いしが、あてーぐとうやー。
 うぬ ゆー あぬー ちゅけーん あのー 照喜名しんしー (先生) やっぱり、わったー あの 弟子(でし)、

弟子ぐらいの 年齢差 あぐとうよー、わったー みっちゃい(三人)や。ゆー あぬー わったー 使(ちか)てい
くいたん どー、照喜名先生(しんしー)や。

鈴木：うーんん んん

聡：あぬー 一度(いちど) あぬー 一カ月(いっかげつ)ぬ 海外公演が、あたん。

鈴木：うーっ、

康春：あたんやー

聡：あたしが、わったー みっちゃい(三人)、声(こゐ) 掛(か)きらったんばーてー。

「えー 一カ月 やしが ちゃー すが?」。あんし、わんねー 太鼓(テーク)、うりとう 司や サンシン
やたしが、やっぱり しぐとー(註 仕事を) 一カ月 休(やし)むん」でい いし、

鈴木：うん

聡：でーじな くとぅ。あぬー まあ っんまー(補注 康春氏は) 行(い)からんたしが。なー あんしーねー 成(な)
らんさ、とー わんが サンシンかい まわてい、サンシン 担(にな)てい 太鼓(テーク)や たーがら そー
てい 行(っん)じゃしがよー。こんな時代に あの、「若い人を・・

鈴木：うん

聡：・・・ちゅぬちゃー そーてい 行(い)か」んち、照喜名先生が わったー 推薦し、そーてい 行(い)かったん。

鈴木：うーんん

聡：あぬ 時分 やっぱり くぬ やっぱり それだけ うっさ わったーが 頑張(がんば)とーたんでい 思(う
む)いんよーやー。みーちきらっとーたん(補注 注目されていた) はじ やぐとう。

鈴木：うみはまてい・・・

聡：他流、新報って、また 他流派 やしえーやー。

鈴木：うーうーうっ。

聡：わったー 野村流る やくとぅ。

鈴木：ううううう

康春：うれー ちゃー くくるが(心掛)きとーたんやー。

鈴木：ああああ

康春：あぬー、頼(たぬ)まりーしえー 断(くとぅわ)らん。

聡：うん、断(くとぅわ)らん。

康春：断(くとぅわ)らん。

あれ、あの一 わったー なー ていーちえー、「うぬ 曲、成(な)いみ?」。ふんとーや 成(な)らんしが、「成
(な)らん」でいれー 言(い)らん。あちゃーまでい 覚(う)びてい ちゃーに、「成(な)いん。成(な)いびー
んどー」んでいやーに。やぐとう うんな くとぅ あたんやー。

聡：ううん んー、本当だ・・・

康春：まんどーたん。

聡：断(くとぅわ)いん さん。「うぬ 曲、成(な)いん 成(な)らん」でいん 言(い)らん。

康春：むる ひちうき(引き受け)、

聡：でも、かちあーらん かじれー、むる 引(ひ)ち受(う)きとーたんやー。

鈴木：うぬ くくるむち(補注 心掛け) しーねー、えー まー あの一 じーぬー(芸能)ぬ 神さまんかい、あ
の一 なんて言うのかなー、まー 「救い上げられる」って言うか、なまぬ しんしーがた(先生方)ん あいびー
がやーんでいち・・・

康春：うぬ 代(か)わい、うぬ 代(か)わい やーちねー(家庭)や でーじてー。

聡：あああー、うぬ はじやー

鈴木：うぬ はじ。

康春：司ん、くりん、わったーん、やーちねー(家庭)や むる から(空)る なとーぐとう

聡・鈴木：アハッハッハハ

康春：わったー わらばーが、「わったー おっとーや まーが 行(っん)じよーがら 分からん!」・・・アハッハッ
ハハ

鈴木：まー うれー 仕方(しかた)ぬ ねーらんくとぅ

聡：面白い 話しぬ あんどー、司ぬよー。司ぬ めー(補注 所) 行(っん)じよー。家(やー)かい ううらんしえー
やー。あんし たまに 帰(け)ーてい 来(ち)ーねー、うぬ わらんちゃーがよー、「わったー 父(とー)ちゃ
ん ううしえー。見に行くか? 見に行くか?」んちよー、

鈴木：ウフフフフ

聡：ちゅけーとうないぬ わらばーたーんかい、あんし 言(い)ちよーたんでい、

鈴木：うれええー

聡：だから、ほとんど ううらんばーよー。

康春：わんにん、あの一 ちーく(稽古)から 帰(け)ーてい 来(ちゃ)ーに、家(やー)かい 帰(け)ーたれー
家(やー)かい 誰(た)ーん ううらんばー、

鈴木：うわー、

康春：っんま、置手紙ぬ あるばーてー。「病院に行ってます」。

あの一 浦添総合病院って、あんでー。っんまうてい、わらびが 熱(にち) っんじゃちゃんでい いやーに、
むる くわぬちゃー、いいなぐうや まじよーん ちよーぬばー。あんし わーが っんまかい 巡(みぐ)てい
っんじゃぐとう、

「父ちゃん 今日は帰って来た」。

聡・鈴木：アハッハッハハー（声上げて笑う）
 康春：あんすとう ちゅけーとうないんちゅや、「ぬーが くぬ いいきがや むる 浮気る そーがやー」んでい・・・
 鈴木：ぬーぬ 仕口(しくち) そーがやーんでいち、
 康春：あーっさー・・・
 聡：わったーや 逆(ぎゃく)に 親(うや)んちゃーとう まじゅん やたくとう、わったー 両親(りょーしん) なー
 まー あぬ 時(とうき) 生(い)ちちよーてーぐとうやー なー 家(やー)から 逃(ひん)ぎーんちよー、
 うりがる でーじ やたる。
 鈴木：へえーええ
 聡：「いち(何時) 子(つくわ)ぬ 面倒(めんどー) 見(いいん)じゅが？」んでい 言(い)らってい、うぬ 後(く
 さー)から 逃(ひん)ぎーしがる わんねー でーじ やたん。
 鈴木：アッハッハッハッハー
 聡：毎日(めーにち)、
 康春：うぬ あーたい、・・・
 聡：サンシン むっち 太鼓(テーク) むっち 出(っん)じーる すぐとうよー、
 「ぬー いったー めーなち(毎日) うりけー 稽古(ちーく)ん あんなー？」「うぬ 本番 あんなー？」んでい
 言(い)らってい、
 あんしが、なー わったーが ふどう いーてい 来(ちー)からてー、ぬーん 言(い)らんたしがよー。
 「いえっ、テレビんかい わったー 嫡子(ちやくし) 出(っん)じとーんどー」とかよー、
 鈴木：はいはいはいはい
 聡：くんねーる 成(な)とーたしがよー、
 康春：やしが、うぬ あたい、なー 三名(さんめー)し すしん、あぬー まし やしが、やっぱり じーぬー(芸能)
 ぬ やっぱり 好(す)き やてーぬばー。
 鈴木：うん、うん。ちょうど いいお話しですね。でも、うんねーる 話(しん)でいちゃえー、
 あの もうあと、時間も時間なので、うれー 最後の質問 やいびーしが、あのー うふたい(おふた方)や
 沖縄県立芸術大学うとーてい 古典音楽 ならーさって(補注 ご指導されて)、うぬ 学生ぬ ちゅぬ
 ちゃーや、また、あぬー 若い なまから この うちなぬ 古典芸能目指すとか言う あの 若い 人
 (ちゅ)ぬちゃーへのメッセージや うんねーる ゆんたくが あいびーがやーさい。
 康春：あぬー、なんか えー なー まだ 学生(がくせー)ぬ 人(ちゅ)ぬちゃーや、うれー なまー 一生懸命
 勉強(べんきょー) そーけー、ええ、しむしが。なー 卒業 そーぬ 若(わか)むんたー、なー うれー 若
 むんでい いしやかー なまからぬ うちなぬ 芸能(げーのー)、広(ひろ)みやーに 発展させて 行(い)
 ちゅる、なー うぬ あたいぬ わじゃ すねー(補注 備えて:獲得して)とーぐとう うり 自覚 さーに、
 えー わじゃぬ 高み(補注 至高の芸) くりからん まー 誠(まくとう) かきてい、
 鈴木：誠(まくとう) かきてい
 康春：誠(まくとう) 掛(か)きてい、うれー しー遂(とう)ぎれー(補注 究めよ)・・行(い)きんでい、うふえー
 にながとーん。
 鈴木：うううー
 康春：あんさーに また あのー あれーてー なー。なまー コロナし、大変 やせー、
 鈴木：うーっ、
 康春：えっ、ぬー インターネットとう ぬーとうか、うったー 若(わか)むんたーや、あのー いろいろ 送(う
 く)いくとう、すぬー うぬ ふーじーかい じんぶん(知恵) っんじゃち、えー 世界中(せかいじゅー)か
 い てー、うちなぬ 芸能(げーのー)ぬ メッセージ、ああ、素晴らしさ、魅力、うぬ ふーじー また、
 発信 するぐとう、また、うぬ 辺(へん)、うぬよーな くとうん また くりから、っし、とうらしえーやー
 んでい、あのー にながとーん。
 鈴木：うーう、にふえーでーびる。
 えー、聡しんしー(先生)。
 聡：あのー、サンシンとうか、うぬ ウッドウイとうか、うんねーるや っちゅ(人) まんどーしがよー、
 鈴木：うん
 聡：うぬ 太鼓(テーク) 専門に すしんでい いしが、あんまり ううらん。かずい(数え)ねー かずい(数え)らりー
 ん。だから、うぬ ちゃー しーねー こう、太鼓(テーク)んかい 向(ん)かとーてい、向(ん)かいがやーん
 ち うり 考(かんげ)ーいしが、なかなか 「っやー 太鼓(テーク) さに」とうか、「サンシン しむしが、太
 鼓(テーク)ん さんなー？」んでい いえー(補注 いへー:少し) 言(い)ーぶさしがよー、うんねーるが
 言(い)ららん。
 鈴木：言(い)ーぶさしが・・・
 聡：あのー、非常にいま、格闘しています・・・
 鈴木：ううう
 聡：まあ、やっぱり、もっと、なーひん うぬー 太鼓(テーク)ぬ 専門ぬちゃーが、ふどう いーれー(補注 成
 長して)やーんでい 言(い)ち 思(うむ)とーしが。
 あんし あのー やっぱり わったーん くーさる 時分から うぬ サンシンぬ 音(うとう) 聞(ち)ち く
 んねーる 大学 入(い) っちから 本格的に 始(はじ)みたしが、やっぱり うぬ くーさる じぶのー(註
 時分は) 小学生(しょーがくしー)とうかよー、うぬ 時分から やっぱり 習(なら)ーさんとー ならんが
 やーんち 思(うむ)てい、うぬ 認定さった 年(とうし)に、
 鈴木：うん、

聡：この一、わー 卒業 さる 松川小学校(まちがーそーがっこー)んでいーし、松川(まつがわ)小学校んでい いしが、

鈴木：まちがー、はい

聡：っまんじ、あぬー っんまがぬちゃー (孫達)が 学童んかい ううたぐとう、
「あぬー 太鼓(てーく) 習(なら)ーさらんがやー」んでい 言(い)ちやぐとう、すぐ「オッケイ(OK)」。

康春：うん

鈴木：へえー

聡：うん だから、松川小学校んじよー、うぬー 小学生(しょーがくしゅー)に、太鼓(てーく) 習(なら)ーちよーしが、あれは、習(なら)ーす とううくる あらんろー。なー 小学校一二年生(いちにねんしゅい)、あぎじゃびよーなー。

康春・鈴木：アハハハハ

聡：っまんじ ワーワーワーワーし、

鈴木：ウフ

聡：5分(ごふん)とう いいち ううゆーさんしゅー。でも うぬ ちゅんちゃーが やー、この ふどう いーていから、「ああー うんねーる あたんやー」んち 思(うむ)てい、また 太鼓(てーく)とうか、うぬ、舞踊(ウウドウイ)とうか、あの一 目指しーねー 上等(じょーとー) やさやーんでい 思(うむ)いん。
やっぱり くーさる 時分から 習(なら)ーすぬ くとうが いちばん いい。あぬー 舞踊(ウウドウイ)とうか、なまー サンシン まんどーしゅー、わたー じぶの一 ううらんたんよーやー、あの一 舞踊(ウウドウイ)や まんどーしが、あの一 もっと 太鼓(てーく)ん うぬ 時分から、くーさる 時分から、ほんとに、あの一 するぐとう 習(なら)ーしゅーやーんでい 思(うむ)いしが、なかなか、

鈴木：うん

聡：あの一 太鼓(てーく)ー 専門に すんでい いしが、

康春：うん

聡：なかなか ううらん。うりが 一番 悩み やんやー・

鈴木：うーんんん

聡：でも、そうも言(い)ていられない。やっぱり うぬ ちゃー 若(わか)い むんぬちゃーよー、やっぱり まーがらんじ、

鈴木：うん

聡：えーっ 育(すだ)ていぶさんやーんでい いち 思(うむ)とーん。

鈴木：うーっ、いっぺー にふえーでーびる。

康春：えー、今日(ちゅー)や うちなーぐちぬ ふんとーや 講座 やしゅーやー。やくとう なまー、えー 若(わか)むんたーが、うちなー芝居(しばい)とうか、あるいは 組踊(クミウウドウイ)とうか、うんな むんさーに うちなーぐち、なー てーげー だんだん だんだん 慣(な)りてい ちよーぐとう、

鈴木：うーっ、

康春：なまからや、うちなーぐちが くぬー 普及 する たみなかひや、うぬ 若(わか)ーたーが、あぬー うぬ ふーじー 芸能(げいのう)通(と)ち、とうーち(補注 常に)

鈴木：うん

康春：うちなーぐち、うり うふえー 理解 深(ふか)みやーに てー、うちなーぐちぬ 話者(わしゃ)とうし、

鈴木：うん

康春：うぬ 広(ひろ)みてい 行(い)ちゅぬ くとうん 考(かんげ)ーてい。あんし なー 芸能(げいのう)かいる 残(ぬく)とーしゅー。なーっ、なまから いるんな 普及ぬ 活動 そーぬ はじ やしが、

鈴木：うん、うん。

康春：えーっ、くれー でーじな むちかさんでい 思(うむ)いん。

鈴木：いっぺー むちかさる くとう、・・・

康春：やぐとう うぬ 為(ため)なかい うぬ 芸能(げいのう)学(まな)どーぬ 若(わか)ーたーから、うったーから 広(ひろ)みてい 行(い)かりぬぐとう、あぬー いろんな、あぬ、企画(けい画)とうか ういぬむんぬさー (補注 売り物：イベント)に 引っ張り 出(つん)じゃさーに すしん、なー、また、いったー 努(ちとう)みあらんがやー、

鈴木：うっ、わーあ

康春：思(うむ)とーしが、

鈴木：うーっ、うみはまてい、えーっ、

聡：うぬ、しょーがくしゅー (小学生)たーかい、太鼓(てーく) 習(なら)ーちよーしがてー、

鈴木：うーっ、

聡：やっぱり うぬー 「今日(ちゅー) ううがなびら」とうか、うんねーる くとうば 知(し)らんしゅー。やっぱり うぬ 始(はじ)みーる 前(め)に、
「えー くりから 太鼓(てーく)ぬ ちーく(稽古) 始(はじ)みやびんどー」って あいさつ 習(なら)ーちから なまー そーしがてー、うびー (覚(さ)える)までい 半年(はんとうし) 掛(か)かひんやー。

康春：んんんん

鈴木：うんねーる

聡：週に1回(いっぺ)しか 行(い)かんぐとう、

鈴木：週に、

聡：なー 1週間 たていーねー 忘(わし)とーん。

鈴木：うう
 聡：うり 何回ん 何回ん、いいぬ くとぅ 繰(く)り返(け)ち
 鈴木：うー うっ、
 聡：あんしが 終(う)わていから、
 「えー 今日(ちゅ)や うりっし 太鼓(テーク)ぬ ちーく(稽古) 終(う)わやびら」んでい いち、「いっペー
 にへーでーびたん。」とかよー、
 うんねーる くとぅば いちよー 覚(うび)ーしん 時間 掛(か)かいん。
 鈴木：うーんん
 聡：やっぱり、「くーさる 時分から ぬーんくいー 聞(ち)かちよーちゅしえー まし やさやー」んでい・・・
 鈴木：だから あのー、自分 どうなーっし(補注 自身で)、あのー むぬ考(かん)げー そーいびーしが。あ
 ぬ チャンネルぬ テレビぬ チャンネルぬ あいびーしが。なんか 何チャンネルか 使(ちか)てー ねー
 らん チャンネル あいがやー、
 康春：うん
 鈴木：4チャンネルとか、7チャンネルとか、あぬ チャンネルんかい そう言うもの・・・
 康春：やぐとうやー
 鈴木：うちなぬ(芸能) じーぬーとか、あのー うちなぬち ぴりんぱらんぬ もう なー 24時間 垂れ流
 し した方が この耳から えー 入って来て、
 康春：ああ、はいはい
 鈴木：すぐ 使(ちか)いる はじ やくとぅやーんでいちえー 思(うむ)とーいびーしが、わったーん 育った所が、
 あのー くーさる じぶねー 読谷村(よみたんそん)。えー、あのー やくとぅ、あのー、国道58号線から
 海側んかい 入っちょーいびーくとぅ、あのー あんまり共通語も入って来ない あのー 時代だったんですよ
 ねー、だから 四十代なんだけど、ちょっと 那覇の子たちからすると、
 「うれー やんばるぬ 人(ちゅ)ぬちやーんかいや にちえーる(補注 似ている)」、あのー 言われるぐらい、
 だから聞いて分かるようになるって言うのは、やっぱり、「耳が大事なー」と。「みーなりー、ちちなりー」って、
 先生方ずーっとおっしゃっていましたが、やっぱり くとぅばんかい、「みーなりー、ちちなりー」が重要な
 あと 思いましたね。
 で、今日は、いろいろお話し伺って、
 康春：あんすぐとう、大事(だいじ) やしえー 今日(ちゅ)や うちなぬち。わったー うさきーなー うちな
 ぬち 使(ちか)たぬ くとー ねーんむん
 聡：ねーんむん。
 康春：やしが、たい(二人)ぬ ううぬ ばーや、なー ほとんど なー 8割方(はちわりがた) うちなぬち、
 鈴木：うーっ、
 康春：で、言(い)ーやーていーやー しーねー ちゃんぐとうー しん しむせー。やぐとう あぬー 構(かま)
 いてい あびらんぐとう、うん。あぬー まんちやーひんちやー やていん しむぐとう、
 鈴木：うーっ、うーっ。
 康春：あのー うんぐとうし、えー 話し する くとぅ、うぬ 癖(くし) ちきらんれー、えー たとえば なー、
 「っやー むのー 言(い)ー方(かた) 間違(まちが)とーんどーやー」とかてー、
 鈴木：そうそうそうそう
 康春：なー うぬ ふーじー なれーからー、なー うれー なかなか むちかしー。やぐとう いかに 普通ぬ
 生活ぬ なーかううてい、うんかー ぬー うひぐわー やていん しむぐとう 話し するぐとう
 聡：あんしえー わったーん なまから うぬ 若(わか)むんぬちやー うういねー、方言 使(ちか)てい・・・
 鈴木：ううううう
 聡：ない、うっさ、
 鈴木：また、あの、ねーえ、ウヤメークトッパ(敬語)、また・・・撮影上の会話混入のため省略・・・テレビぬ、カ
 メラぬ ある とくくるや 何て言うのかな、「立派(りっぱ) うちなぬち ね、しまくとうば 使(ちか)ねー
 ならんさやー」んでいちえー 思(うむ)いねー うれー 成(な)らん。えー やしが あのー、どうしんちや
 ーとか、えー やーぬ ちねーんかい ううとーてい、わんねー あのー しまくとうばんかい まっ いい
 ぐわー あのー 使(ちか)いぶさっさーやーんでいちえー 使(ちか)とーいびーぐとう。うれー ウヤメーク
 トッパ(敬語) いっペー むちかざる ちゅ・・・
 康春：うれー むちかさん、うん。
 鈴木：うれー、「ちゅー(今日)や うちなぬちっし えー、うちなぬちえー・・・、しまくとうばっし、えー ゆ
 んたく さびら」んでい てー 言(い)ちよーいびーしが、ああ ヤマトウクトッパぬ、また 研究の こと
 ばんでいちえー、うれー 日本語、日本語っし 習(なら)やびたぐとう うれー ふか(外)んかい っんじ
 ーねー あのー しまくとうばに、あのー 何と言うのかなー、替(け)ーるくとぅ ないびらんくとぅよー。うれー
 あのー 非常に失礼しましたね わっさいびーたん でいちえー 思(うむ)いびーしが、また、しんしー方
 (がた)や、あのー まー すわって演奏する ぬ こう言う舞台の上で、歌(うた)たい うれー 叩(たた)ちや
 い、えー うれー 問題 ねーやびらんしが、うぬ 講演でいちえー いっペー むちかざるくとぅ、ひーじ
 (平生)ねー、あのー 慣(な)りらん あっ くとぅー、あのー っんまんかい めんそーち えー くみそ
 ーち いっペー にふえーでーびるんでいちえー 思(うむ)とーいびーん。で なまー あのー 第8回(だい
 はちかい)でいちえー この 会(かい) そーいびーしが、あのー、この回で終わらないで、あとまた10年後
 ぐらい、
 聡・康春：エッヘッヘッヘー

鈴木：わったー 先生(しんしー)たーが、あのー たい(二人)し するてい、うぬ 会は また、あのー 出来れば
なーと思っております。私もその頃には・・

聡：うー、うれー 元気(げんき)し ううらんとー ならんさーやー。

鈴木：ううううっ、大丈夫です。まだ若いですから。
えー、今日は あの、このようなドタバタの会とはなりましたけれども、えー、これで、第8回の「誇(ふく)らしゃ
しまくとぅば」講演会、「語(かた)やびら うちなー芸能(じーぬー) ゆんたく さびら」と言うような内容
でございましたが、えー くりっし 終(う)わやびらんでいちえー、思(うむ)とーいびーん。

康春：いいー 勉強(べんきょー) さびたん。

鈴木：ちゅーや たいぬ しんしーんかい 拍手。手(ていー) パチパチー ゆたさるぐとう うにげーさびら。
いっぺー にふえーでーびる。

康春：にふえーでーびる、いっぺー 勉強(べんきょー) ないびたん。
—— 会場からの拍手で終了 ——

補遺 収録後の1コマ

DE：はい、OKです。

鈴木：OKはい、お疲れさまでした。

康春・聡：はっさよー

鈴木：はあー 変な汗かいた。
ここむつかしいですね。なんか頭の中に出て来るんだけど、使えないですね、やっぱり。

会場1：緊張していた・・

会場2：(補 先ほどの話しは)小学生は、何年ごろの、

鈴木：昭和よんじゅう、あっ 違う、小学生のころですよ。小学生のころって、何年ですか？

康春：小学生のころって言うのは、昭和さんじゅう

聡：そう、東京オリンピックの・・6年生

康春：昭和28年生まれだから、10歳前後だから 昭和35、6、7、8年、そのぐらいだな

鈴木：(会場2)さんなんかは、

参加者2：昭和26年、小祿うまれの僕らも小学校では「方言は使わないように!」と・・

—— 閑話休題 ——

康春：くれー うくさりーがやーさい。

鈴木：いっぺー むちかさる くとう やいびーしが、・・・ありがとうございました。
一回でも(録音・録画で)とっとくべきですね。先生方のお話しは。あの日本語でも・・・、

DE：お疲れさまでした。ありがとうございました。

康春：お疲れさまでした。

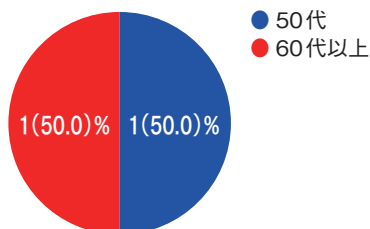
— 御ひらき —

6-4 第8回講演会アンケート集計結果

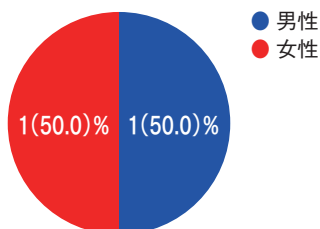
日時：令和3年3月31日
(YouTube 配信)

講演会タイトル：芸能から受け継ぐ「誇^{よく}らしゃしまくとぅば」
視聴回数：ダイジェスト版1,634回完全版184回
期間：令和3年3月31日～10月30日
アンケート回答数：2件

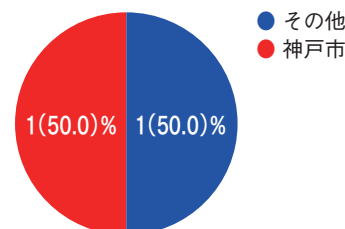
1. 年齢



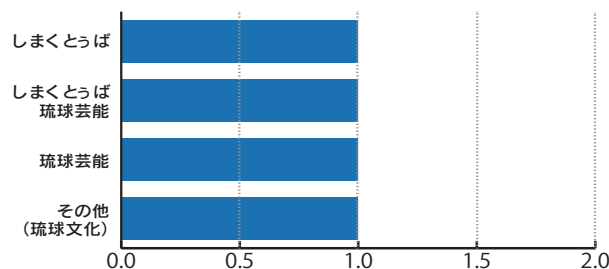
2. 性別



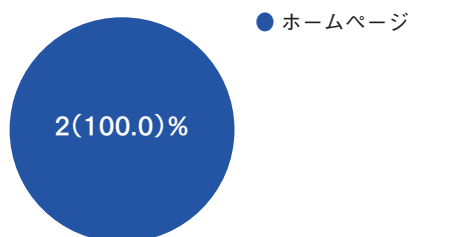
3. お住まいの地域



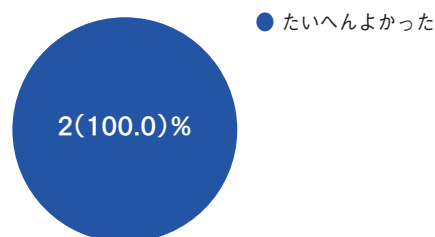
4. 興味ある内容 (複数回答可)



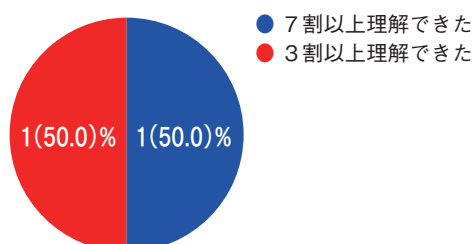
5. このイベントをどのようにして知りましたか？



6. 講演会はいかがでしたか？



7. 今回使用されたしまくとぅばをどの程度理解できましたか？



8. 本学の琉球芸能専攻におけるしまくとぅば実践教育事業についてどのようにお考えでしょうか？



9. 本事業および今回の講演会についてのご意見ご感想（今後の講演会に出演してほしいひと）などがありましたら、お書きください。

- ・きれいな島言葉で分かり易いし、講演内容は、深い面もあり貴重な話だと感謝しています。今後共、引き続き、よろしく願いいたします。
- ・たいへんよかった。

7 次年度への展望

昨年まで「事業報告会」を開催していたが、今年度も昨年に引き続き、対外イベントを開催するためには、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から大きな障害がともなう状況が続いた。昨年度は「事業報告会」をYouTube配信としたが、今年度は昨年同様の内容で行うよりも、これまでの活動を紹介する「活動紹介動画」を研究会で制作し、公開することが決定された。本事業の「活動紹介動画」は、次年度公開する計画を立て、現在進行中である。

今年度も昨年にひきつづき多くの事業がコロナ関連で変更を余儀なくされた。それに伴い、研究会の先生方や特別講師、さらには学生にまで様々な対応をしていただいた。今年度は昨年と変わり、「ウィズコロナ」の観点で多くの事業を開催できたことは、昨年から学んだことである。しかし、沖縄以外の地域における地域の言語を教育に取り組むという事例調査・研究はある意味停滞してしまっている。次年度からは実践教育を遂行させつつ、遠隔や現地調査を行い、他地域の事例などの調査、情報収集を行っていきたい。

筆末であるが、今年度は本事業の開催中に、特別講師の宮城幸子先生が国指定重要無形文化財「琉球舞踊」立方（各個認定）に指定され、金城光子先生が沖縄タイムス芸術選賞「大賞」を受賞、しまくとぅば講演会に登壇いただいた仲田幸子氏が「ロサンゼルス日本映画祭」に参加した「なんくるないさあ劇場版」にてその演技が高く評価され、最優秀主演女優賞を受賞された。本事業に関わるしまくとぅばの先達達の受賞ラッシュに、研究代表者として嬉しく思うとともに、あらためて本事業は沖縄、世界において大切な人材によって成り立っていることに感謝の念が込み上げた。次年度もこれまで培ったノウハウや事業実績をもとに、本事業の発展を目指したい。

8 資料 (当事業の新聞掲載、令和2年度のしまくとぅば事業関連資料など)

8-1 新聞掲載記事

2021年(令和3年)1月21日(日) **thePon** 5

しまくとぅば

自己紹介に挑戦!

「はやくとぅば(しまくとぅば)とぅば(しまくとぅば)は、この国(しまくとぅば)の文化(しまくとぅば)の宝(しまくとぅば)です。みんな(しまくとぅば)が、この国(しまくとぅば)の文化(しまくとぅば)を、大事(しまくとぅば)に思(しまくとぅば)っています。みんな(しまくとぅば)が、この国(しまくとぅば)の文化(しまくとぅば)を、大事(しまくとぅば)に思(しまくとぅば)っています。みんな(しまくとぅば)が、この国(しまくとぅば)の文化(しまくとぅば)を、大事(しまくとぅば)に思(しまくとぅば)っています。」

イラスト: cumi

言葉にたくさんの魔法

「言葉(しまくとぅば)は、魔法(しまくとぅば)の杖(しまくとぅば)です。言葉(しまくとぅば)は、魔法(しまくとぅば)の杖(しまくとぅば)です。言葉(しまくとぅば)は、魔法(しまくとぅば)の杖(しまくとぅば)です。」

イラスト: cumi

タイムスリップでき

「タイムスリップ(しまくとぅば)でき、昔(しまくとぅば)のしまくとぅば(しまくとぅば)を、体験(しまくとぅば)できます。タイムスリップ(しまくとぅば)でき、昔(しまくとぅば)のしまくとぅば(しまくとぅば)を、体験(しまくとぅば)できます。」

イラスト: cumi

高学年を支援

「高学年(しまくとぅば)を支援(しまくとぅば)する、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。高学年(しまくとぅば)を支援(しまくとぅば)する、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。」

イラスト: cumi

アソビの巻

「アソビ(しまくとぅば)の巻、しまくとぅば(しまくとぅば)の文化(しまくとぅば)を、楽しむ(しまくとぅば)ことができます。アソビ(しまくとぅば)の巻、しまくとぅば(しまくとぅば)の文化(しまくとぅば)を、楽しむ(しまくとぅば)ことができます。」

イラスト: cumi

しまくとぅばを学ぶ

「しまくとぅば(しまくとぅば)を学ぶ、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。しまくとぅば(しまくとぅば)を学ぶ、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。」

イラスト: cumi

今月は食べ物!

「今月(しまくとぅば)は、食べ物(しまくとぅば)の巻です。今月(しまくとぅば)は、食べ物(しまくとぅば)の巻です。」

イラスト: cumi

2022年(令和3年)1月16日(日) **thePon** 5

しまくとぅば

丁寧語を使ってみよう

「丁寧語(しまくとぅば)を使って、言葉(しまくとぅば)を、丁寧に(しまくとぅば)使(しまくとぅば)います。丁寧語(しまくとぅば)を使って、言葉(しまくとぅば)を、丁寧に(しまくとぅば)使(しまくとぅば)います。」

イラスト: cumi

魔法薬箱にまつわる言葉

「魔法薬箱(しまくとぅば)にまつわる、言葉(しまくとぅば)の巻です。魔法薬箱(しまくとぅば)にまつわる、言葉(しまくとぅば)の巻です。」

イラスト: cumi

魔法薬箱にまつわる言葉

「魔法薬箱(しまくとぅば)にまつわる、言葉(しまくとぅば)の巻です。魔法薬箱(しまくとぅば)にまつわる、言葉(しまくとぅば)の巻です。」

イラスト: cumi

文中に出てくる必須語具はどれ?

「文中(しまくとぅば)に出てくる、必須語具(しまくとぅば)は、どれ(しまくとぅば)ですか? 文中(しまくとぅば)に出てくる、必須語具(しまくとぅば)は、どれ(しまくとぅば)ですか?」

イラスト: cumi

しまくとぅばを学ぼう

「しまくとぅば(しまくとぅば)を学ぼう、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。しまくとぅば(しまくとぅば)を学ぼう、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。」

イラスト: cumi

しまくとぅばを学ぼう

「しまくとぅば(しまくとぅば)を学ぼう、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。しまくとぅば(しまくとぅば)を学ぼう、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。」

イラスト: cumi

2022年(令和3年)3月20日(日) **thePon** 5

しまくとぅば

身近にある単独の芸術文化

「身近(しまくとぅば)にある、単独(しまくとぅば)の芸術文化(しまくとぅば)です。身近(しまくとぅば)にある、単独(しまくとぅば)の芸術文化(しまくとぅば)です。」

イラスト: cumi

三徳にまつわるしまくとぅば

「三徳(しまくとぅば)にまつわる、しまくとぅば(しまくとぅば)の巻です。三徳(しまくとぅば)にまつわる、しまくとぅば(しまくとぅば)の巻です。」

イラスト: cumi

三徳にまつわるしまくとぅば

「三徳(しまくとぅば)にまつわる、しまくとぅば(しまくとぅば)の巻です。三徳(しまくとぅば)にまつわる、しまくとぅば(しまくとぅば)の巻です。」

イラスト: cumi

歌を聴く麗らかな夜

「歌(しまくとぅば)を聴く、麗らかな(しまくとぅば)夜(しまくとぅば)です。歌(しまくとぅば)を聴く、麗らかな(しまくとぅば)夜(しまくとぅば)です。」

イラスト: cumi

しまくとぅばを学ぼう

「しまくとぅば(しまくとぅば)を学ぼう、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。しまくとぅば(しまくとぅば)を学ぼう、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。」

イラスト: cumi

しまくとぅばを学ぼう

「しまくとぅば(しまくとぅば)を学ぼう、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。しまくとぅば(しまくとぅば)を学ぼう、新しい(しまくとぅば)取り組み(しまくとぅば)です。」

イラスト: cumi

9 令和3年度しまくとぅば実践教育 授業録画日一覧 (括弧内の数字は回数)

【令和3年度・前期】授業実施回数：舞踊実技(高嶺)4回、(比嘉)8回、舞踊創作演習(比嘉)15回 組踊実技(阿嘉)17回

4月7日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(1)
4月12日	舞踊実技Ⅰ／比嘉(1)
4月14日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(2)
4月21日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(3)
4月26日	舞踊実技Ⅰ／比嘉(2)
4月28日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(4)
5月10日	舞踊実技Ⅰ／比嘉(3)
5月12日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(5)
5月19日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(6)
5月24日	舞踊実技Ⅰ／比嘉(4)
5月26日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(7)・組踊実技Ⅲ／阿嘉(1)
5月27日	組踊実技Ⅰ／阿嘉(2)・組踊実技Ⅴ／阿嘉(3)
6月2日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(8)・組踊実技Ⅲ／阿嘉(4)
6月7日	舞踊実技Ⅰ／比嘉(5)
6月9日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(9)・組踊実技Ⅲ／阿嘉(5)
6月10日	組踊実技Ⅴ／阿嘉(6)
6月16日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(10)・組踊実技Ⅲ／阿嘉(7)
6月17日	組踊実技Ⅰ／阿嘉(8)・組踊実技Ⅴ／阿嘉(9)
6月21日	舞踊実技Ⅰ／比嘉(6)
6月24日	組踊実技Ⅰ／阿嘉(10)・組踊実技Ⅴ／阿嘉(11)
6月30日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(11)
7月5日	舞踊実技Ⅰ／比嘉(7)
7月7日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(12)・組踊実技Ⅲ／阿嘉(12)
7月8日	組踊実技Ⅰ／阿嘉(13)・組踊実技Ⅴ／阿嘉(14)
7月9日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(13)
7月14日	舞踊創作演習Ⅰ／比嘉(14)(15)・組踊実技Ⅲ／阿嘉(15)
7月15日	組踊実技Ⅰ／阿嘉(16)・組踊実技Ⅴ／阿嘉(17)
7月19日	舞踊実技Ⅰ／比嘉(8)
8月23日	舞踊実技Ⅰ／高嶺(1)
8月24日	舞踊実技Ⅰ／高嶺(2)
8月27日	舞踊実技Ⅰ／高嶺(3)
9月29日	舞踊実技Ⅰ／高嶺(4)

【令和3年度・後期】授業実施回数：舞踊実技（高嶺）3回、（比嘉）8回、組踊実技（阿嘉）13回、地謡実技（新垣）4回

10月11日 舞踊実技Ⅱ／比嘉（1）
11月8日 舞踊実技Ⅱ／比嘉（2）
11月15日 舞踊実技Ⅱ／比嘉（3）
11月22日 舞踊実技Ⅱ／比嘉（4）・地謡実技Ⅳ／新垣（1）
11月24日 組踊実技Ⅳ／阿嘉（1）
11月25日 組踊実技Ⅱ／阿嘉（2）・組踊実技Ⅵ／阿嘉（3）
12月1日 組踊実技Ⅳ／阿嘉（4）
12月2日 組踊実技Ⅱ／阿嘉（5）・組踊実技Ⅵ／阿嘉（6）
12月6日 舞踊実技Ⅱ／比嘉（5）・地謡実技Ⅳ／新垣（2）
12月8日 組踊実技Ⅳ／阿嘉（7）
12月9日 組踊実技Ⅱ／阿嘉（8）・組踊実技Ⅵ／阿嘉（9）
12月13日 舞踊実技Ⅱ／比嘉（6）
12月15日 組踊実技Ⅳ／阿嘉（10）
12月17日 舞踊実技Ⅱ／比嘉（7）・地謡実技Ⅳ／新垣（3）
12月20日 地謡実技Ⅳ／新垣（4）
12月22日 組踊実技Ⅳ／阿嘉（11）
12月23日 組踊実技Ⅱ／阿嘉（12）・組踊実技Ⅵ／阿嘉（13）
12月27日 舞踊実技Ⅱ／高嶺（1）

令和4年

1月26日 舞踊実技Ⅱ／高嶺（2）
2月2日 舞踊実技Ⅱ／高嶺（3）

令和 3 年度しまくとぅば実践教育プログラム開発事業
事業報告書

令和 4 年 3 月 31 日

編 集 鈴木 耕太・麻生 伸一・大城 円
発 行 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所
〒903-0815 沖縄県那覇市首里金城町 3-6
電話 098-882-5040
事業委託者 琉球新報社 担当 宮城、池宮

